鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（19）

主要地方道上屋久・永田・屋久線改良事業に係る埋蔵文化財
発掘調査報告書

一湊松山遺跡（いっそうまつやま）

所在地　熊毛郡上屋久町一湊字松山

1996年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　文

この報告書は，主要地方道上屋久・永田・屋久線改良工事に先立って，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した一湊松山遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

一湊松山遺跡は，屋久島北端部にそびえる一湊岳の麓の，北に東シナ海を臨む砂丘地に位置する縄文時代前期から近世までの遺跡で，特に縄文時代後期の一湊式土器及び松山式土器の標識遺跡として有名な遺跡です。

今回の調査では，縄文時代前期に位置付けられる曽畑式土器を中心に後期の一湊式土器等多数の土器・石器が出土しました。また，縄文時代前期の集石遺構や屋久島で初の縄文時代後期住居跡等の貴重な遺構も発見され，これからの研究に多くの資料を提供することになりました。

本報告書が，南九州の歴史研究に寄与し，併せて文化財保護のための一役を担うことができれば幸いです。終わりに，この発掘調査に御協力をいただいた屋久島事務所土木課道路係，上屋久町教育委員会社会教育課並びに地元の皆様に心から感謝いたします。

平成8年3月

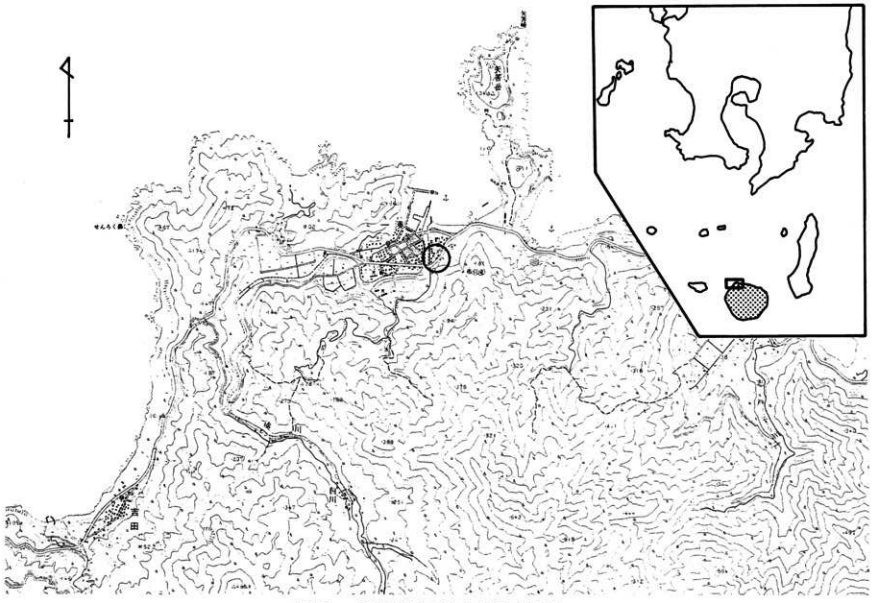
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　内村正弘

報告書抄録

ふりがな	いっそうまつやまいせき
書名	一湊松山遺跡
副書名	主要地方道上屋久・永田・屋久線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	19
編著者名	堂込 秀人・肱岡 隆夫
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地 TEL.0995-65-8787
発行年月日	西暦1996年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
一湊松山遺跡（いっそうまつやまいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 熊毛郡（くまげぐん） 上屋久町（かみやくちょう） 一湊（いっそう） 字松山（あざまつやま）	465-08	82-2,27	30度 28分 0秒	130度 30分 0秒	09931002 ～ 19931010 19940530 ～ 19940708 19951016 ～ 19951122	20 270 000	主要地方道上屋久・永田・屋久線改良工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一湊松山遺跡	包含層 住居跡	縄文時代前期	集石遺構3基 石斧デポ1基 配石遺構1基	曽畑式土器 土製垂飾品 石斧，磨石等	
		縄文時代中期	集石遺構2基	深浦式土器 条痕文土器	
		縄文時代後期	竪穴住居1基	市来式，一湊式， 松山式土器 石斧，磨石等	



第1図　一湊松山遺跡の位置図（5万分の1）

例　言

1　この報告書は，主要地方道上屋久・永田・屋久線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　発掘調査は，鹿児島県土木部道路維持課（屋久島事務所土木課道路係）の依頼を受けて，県立埋蔵文化財センターが実施した。
3　発掘調査については，上屋久町教育委員会社会教育課の協力を得た。
4　遺物番号は，すべて通し番号であり，本文及び挿図・図版の番号は一致する。
5　挿図の縮尺は各図ごとに示している。
6　本書で用いたレベル数値は，遺跡近くのベンチマークから移動した高さを基準とした海抜絶対高である。
7　出土遺物の整理復原作業等は，県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行い，遺構・遺物の実測・トレース・写真撮影は，整理作業員の協力を得て堂込，肱岡が行った。
8　本書の執筆分担は，以下のとおりである。

第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ章第1節・第2節，第Ⅳ章第1節2－(2)，第2節2－(2)，第3節2－(2)，第4節2－(2)，第5節2－(2)，第6節2－(2)，第7節2－(2) ―― 肱岡　隆夫

第Ⅲ章第3節，第Ⅳ章第1節1，2－(1)，第2節1，2－(1)，第3節1，2－(1)，第4節1，2－(1)，第5節1，2－(1)，第6節1，2－(1)，第7節1，2－(1)，第8節，第Ⅴ章 ―― 堂込　秀人

第Ⅵ章第1節 ―― 西中川　駿

第Ⅵ章第2節 ―― 大久保浩二

第Ⅵ章第3節 ―― ㈱パリノ・サーヴェイ

9　本書の編集は県立埋蔵文化財センターで行い，堂込が担当した。
10　遺物は，県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する計画である。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 12
　第1節　調査に至るまでの経過 …… 12
　第2節　調査の組織 …… 12～13
　第3節　調査の経過 …… 13～15

第Ⅱ章　位置と環境 …… 16
　第1節　位置及び自然環境 …… 16
　第2節　歴史的環境 …… 16～17

第Ⅲ章　調査の概要 …… 22
　第1節　調査の概要 …… 22～23
　第2節　遺跡の層位 …… 23～24
　第3節　出土土器の観察と分類 …… 24～26

第Ⅳ章　機構・遺物 …… 28
　第1節　17層の調査 …… 28
　　1　遺構等 …… 28
　　2　遺物 …… 33
　　(1)　土器 …… 33
　　(2)　石器 …… 33・45・46
　第2節　9層～15層の調査 …… 55
　　1　出土状況等 …… 55
　　2　遺物 …… 55
　　(1)　土器 …… 55
　　(2)　石器 …… 55
　第3節　8層の調査 …… 63
　　1　遺構等 …… 63
　　2　遺物 …… 66
　　(1)　土器 …… 66
　　(2)　石器 …… 66・77
　第4節　6層の調査 …… 83
　　1　出土状況等等 …… 83
　　2　遺物 …… 83
　　(1)　土器 …… 83
　　(2)　石器 …… 83

第５節　５層の調査 …… 86
1　遺構等 …… 86
2　遺物 …… 86
(1)　土器 …… 86
(2)　石器 …… 93～94
第６節　３層の調査 …… 101
1　遺構等 …… 101
2　遺物 …… 101
(1)　土器 …… 101・104
(2)　石器 …… 104・112～113
第７節　２層の調査 …… 118
1　遺構 …… 118
2　遺物 …… 120
(1)　土器 …… 118
(2)　石器 …… 123～124
第８節　土製品 …… 128

第Ⅴ章　考察 …… 144
第１節
第２節

第Ⅵ章　同定・分析
第１節　上屋久町一湊松山遺跡出土の動物遺体 …… 151～153
第２節　一湊松山遺跡出土の赤色顔料について …… 157～158
第３節　一湊松山遺跡^{14}C年代測定 …… 159

挿　図　目　次

第１図　一湊松山遺跡の位置図 …… 3
第２図　周辺遺跡分布図 …… 20
第３図　遺跡周辺地形図 …… 21
第４図　標準層位模式柱状図 …… 24
第５図　遺跡の層位 …… 27
第６図　１号集石・２号集石 …… 28
第７図　17層検出石斧デポ …… 29
第８図　17層出土土器出土状況 …… 30
第９図　17層出土石器出土状況 …… 31

第10図　B地点17層相当層出土状況 …… 32
第11図　17層出土曽畑式土器(1) …… 34
第12図　17層出土曽畑式土器(2) …… 35
第13図　17層出土曽畑式土器(3) …… 36
第14図　17層出土曽畑式土器(4) …… 37
第15図　17層出土曽畑式土器(5) …… 38
第16図　17層出土曽畑式土器(6) …… 39
第17図　17層出土曽畑式土器(7) …… 40
第18図　17層出土曽畑式土器(8) …… 41
第19図　17層出土曽畑式土器(9) …… 42
第20図　17層出土曽畑式土器(10) …… 43
第21図　17層出土曽畑式土器(11) …… 44
第22図　17層出土石器(1) …… 47
第23図　17層出土石器(2) …… 48
第24図　17層出土石器(3) …… 49
第25図　17層出土石器(4) …… 50
第26図　17層出土石器(5) …… 51
第27図　17層出土石器(6) …… 52
第28図　17層出土石器(7) …… 53
第29図　17層出土石器(8) …… 54
第30図　9～15層出土土器出土状況 …… 56
第31図　10～15層出土曽畑式土器 …… 57
第32図　9層出土曽畑式土器 …… 58
第33図　9～15層出土石器(1) …… 60
第34図　9～15層出土石器(2) …… 61
第35図　8層検出3号集石 …… 62
第36図　8層曽畑式土器（223・248）出土状況 …… 63
第37図　8層出土土器出土状況 …… 64
第38図　8層出土石器出土状況 …… 65
第39図　8層出土曽畑式土器(1) …… 67
第40図　8層出土曽畑式土器(2) …… 68
第41図　8層出土曽畑式土器(3) …… 69
第42図　8層出土曽畑式土器(4) …… 70
第43図　8層出土曽畑式土器(5) …… 71
第44図　8層出土曽畑式土器(6) …… 72
第45図　8層出土曽畑式土器(7) …… 73
第46図　8層出土曽畑式土器(8) …… 74

第47図　8層出土曽畑式土器(9) …… 75
第48図　8層出土曽畑式土器(10) …… 76
第49図　8層出土石器(1) …… 78
第50図　8層出土石器(2) …… 79
第51図　8層出土石器(3) …… 80
第52図　8層出土石器(4) …… 81
第53図　8層出土石器(5) …… 82
第54図　8層出土石器(6) …… 83
第55図　6層出土曽畑式土器 …… 84
第56図　6～7層出土石器 …… 85
第57図　5層検出4号集石及び1号配石 …… 86
第58図　5層土器出土状況 …… 87
第59図　5層出土石器出土状況 …… 88
第60図　5層深浦式土器 …… 89
第61図　5層条痕文土器(1) …… 90
第62図　5層条痕文土器(2) …… 91
第63図　5層曽畑系土器 …… 92
第64図　5層出土石器(1) …… 95
第65図　5層出土石器(2) …… 96
第66図　5層出土石器(3) …… 97
第67図　5層出土石器(4) …… 98
第68図　5層出土石器(5) …… 99
第69図　5層出土石器(6) …… 100
第70図　3層検出5号集石・6号集石 …… 101
第71図　3層出土土器出土状況 …… 102
第72図　3層出土石器出土状況 …… 103
第73図　3層深浦式土器(1) …… 105
第74図　3層深浦式土器(2) …… 106
第75図　3層深浦式土器(3) …… 107
第76図　3層深浦式土器(4) …… 108
第77図　3層条痕文土器(1) …… 109
第78図　3層条痕文土器(2) …… 110
第79図　3層条痕文・曽畑系土器(1) …… 111
第80図　3層条痕文・曽畑系土器(2) …… 112
第81図　4層出土石器 …… 114
第82図　3層出土石器(1) …… 115
第83図　3層出土石器(2) …… 116

第84図　3層出土石器(3) …… 117
第85図　2層検出1号住居跡 …… 119
第86図　2層C地点縄文後期土器出土状況 …… 120
第87図　2層出土土器(1) …… 121
第88図　2層出土土器(2) …… 122
第89図　2層出土土器(3) …… 123
第90図　2層出土石器(1) …… 125
第91図　2層出土石器(2) …… 126
第92図　2層出土石器(3) …… 127
第93図　土製品 …… 128

表 目 次

付　表　報告書抄録
第1表　遺跡地名表(1)　～屋久島　上屋久町～ …… 18
第2表　遺跡地名表(2)　～屋久島　屋久町～ …… 19
第3表　遺跡地名表(3)　～口永良部島　上屋久町～ …… 19
第4表　出土土器観察表(1) …… 129
第5表　出土土器観察表(2) …… 130
第6表　出土土器観察表(3) …… 131
第7表　出土土器観察表(4) …… 132
第8表　出土土器観察表(5) …… 133
第9表　出土土器観察表(6) …… 133
第10表　出土土器観察表(7) …… 134
第11表　出土土器観察表(8) …… 135
第12表　出土土器観察表(9) …… 136
第13表　出土土器観察表(10) …… 137
第14表　17層出土石器計測表(1) …… 138
第15表　17層出土石器計測表(2) …… 139
第16表　9～15層出土石器計測表 …… 139
第17表　8層出土石器計測表 …… 139～140
第18表　6～7層出土石器計測表 …… 140
第19表　5層出土石器計測表 …… 140～141
第20表　4層出土石器計測表 …… 142
第21表　3層出土石器計測表 …… 142
第22表　2層出土石器計測表 …… 143

図 版 目 次

第Ⅵ章　同定・分析

図版１　一湊松山遺跡出土動物骨 …… 154
図版２　同上 …… 155
図版３　同上 …… 156
図版４　赤色顔料試料１のSEM像 …… 158

図版１　一湊松山遺跡近景，一湊松山遺跡の層位 …… 160
図版２　作業状況，C地点舗装剝ぎ取り，B地点矢板準備状況 …… 161
図版３　矢板打ち込み状況，作業状況（矢板内），B地点近景 …… 162
図版４　ベルコン・排土状況，GS前調査状況 …… 163
図版５　B地点土層，GS前完掘状況，GS前土層 …… 164
図版６　C地点遺物出土状況，土器出土状況（512），土製品出土状況（758）
　　C地点土層 …… 165
図版７　C地点１号住居跡 …… 166
図版８　C地点住居跡石組炉，B地点２号集石 …… 167
図版９　３層検出５号集石，３層検出６号集石，５層検出１号配石 …… 168
図版10　８層検出３号集石 …… 169
図版11　８層検出３号集石底石，完掘状況，17層検出１号集石 …… 170
図版12　17層検出１号集石，出土状況（8） …… 171
図版13　出土状況（1, 129, 16） …… 172
図版14　出土状況（20, 34, 165） …… 173
図版15　出土状況（781, 151, 123, 144） …… 174
図版16　出土状況（195, 243, 247） …… 175
図版17　８層出土状況 …… 176
図版18　出土状況（249, 263, 330） …… 177
図版19　出土状況（371） …… 178
図版20　出土状況（418, 644, 563, 617） …… 179
図版21　８層出土土器（曽畑式土器） …… 180
図版22　出土土器（1, 223, 248, 510） …… 181
図版23　出土土器（1～2） …… 182
図版24　出土土器（3～15） …… 183
図版25　出土土器（16, 20, 22, 34） …… 184
図版26　出土土器（27, 41, 42, 47, 73, 78, 88, 89） …… 185
図版27　出土土器（94, 102, 105, 106, 195, 196, 232） …… 186
図版28　出土土器（243, 251, 249, 263, 264） …… 187
図版29　出土土器（313, 372, 403, 418） …… 188

図版30　出土土器（512, 526, 563, 583, 569, 617） …… 189
図版31　出土石器（119～169, 151欠） …… 190
図版32　出土石器（170～177, 208～222, 333～357, 349欠） …… 191
図版33　出土石器（358～370, 376～379, 451～479） …… 192
図版34　出土石器（480～509, 635～654） …… 193
図版35　出土石器（655～673, 727～758） …… 194
図版36　土器文様（押引き，刺突，刺突・沈線，ナデ） …… 195
図版37　土器調整（工具ナデ，条痕ナデ消し，条痕） …… 196
図版38　調査地遠景，発掘調査参加者 …… 197

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部道路維持課（屋久島出張所（当時）以下，土木部）は，平成5年度事業として上屋久町一湊地区内における主要地方道の改良事業（道路拡幅）を計画し，事業に先立って対象地の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（以下，文化課）に照会した。

これを受けて，平成4年4月に文化課が分布調査を実施した結果，事業区内に一湊松山遺跡が存在することが判明した。さらに，平成5年10月に県立埋蔵文化財センター(以下,埋文センター)が計画部分について確認調査を実施した結果，対象地域に縄文時代後期の遺物包含層が確認された。

そこで，本遺跡の取扱について，県土木部・文化課・埋文センターの三者で協議した結果，埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため，拡幅部分について平成6年度緊急発掘調査を実施することとなった。

また，拡幅計画に併せて現道敷部分の改修計画が追加提示されたため，当該部分についての確認調査を本調査と平行して行うこととした。その結果，現道敷に縄文時代前期の遺物包含層が確認されたため，県土木部・文化課・埋文センターの三者で再度協議した結果，県道拡幅部分に連なる約70㎡を追加して全面調査を行い，残りの現道部分は平成7年度緊急発掘調査を実施することとなった。

確認調査は平成5年10月2日～10月10日の間実施した。緊急発掘調査は平成6年度は平成6年5月30日～7月8日の間実施し，平成7年度は平成7年10月16日～11月22日の間実施した。

整理作業及び報告書作成作業は，平成6・7年度に埋文センターで行った。

第2節　調査の組織

【平成5年度（確認調査）】

事業主体	鹿児島土木部道路維持課（屋久島出張所道路課）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　長	大久保忠昭
調査企画者	〃	次長兼総務課長	水口　俊雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	長野　真一
	〃	文化財主事	肱岡　隆夫
調査事務担当者	〃	主査	成尾　雅明
	〃	主事	中村　和代

【平成6年度（緊急発掘調査）】

事業主体	鹿児島土木部道路維持課（屋久島事務所土木課道路係）
調査主体	鹿児島県教育委員会

調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村　正弘
調査企画者	〃	次長兼総務課長	川原　信義
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	脇岡　隆夫
	〃	文化財主事	堂込　秀人
調査事務担当者	〃	主査	成尾　雅明
	〃	主事	中村　和代
調査指導者		鹿児島県考古学会長	河口　貞徳

【平成７年度（緊急発掘調査）】

事業主体	鹿児島土木部道路維持課（屋久島事務所土木課道路係）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村　正弘
調査企画者	〃	次長兼総務課長	川原　信義
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	脇岡　隆夫
	〃	文化財主事	堂込　秀人
調査事務担当者	〃	主査	成尾　雅明
	〃	主事	追立ひとみ
調査指導者		鹿児島県考古学会長	河口　貞徳
		鹿児島大学法文学部教授	上村　俊雄
		〃　農学部〃	西中川　駿
		〃　法文学部助手	本田　道輝
	沖縄県中頭郡北谷町教育委員会文化課		
		文化係長	中村　愿

第３節　調査の概要と経過

確認調査は，平成５年10月２日(月)から10月10日(火)，緊急発掘調査は平成６年５月30日(月)から７月８日(金)，平成７年10月16日(月)から11月22日(金)の間に実施した。以下，日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

【平成５年度（確認調査）】

10月２日(月)～６日(金)

県立埋蔵文化財センターより発掘機材を搬入。現場の作物等を撤去する。２×３mのトレンチ３か所を設定し，掘り下げを行う。縄文後期の土器及び石器が出土し，平板実測並びに写真によ

る記録を行う。約1.5m掘り下げた時点で壁面の崩落があり，掘り下げを中止し土層断面を実測する。

10月9日(月)～10日(火)

土層断面の実測を終了し，トレンチの埋め戻しを行う。発掘用具を整理し，調査を終了する。

【平成6年度（緊急発掘調査）】

5月30日(月)～6月3日(金)

発掘機材を搬入。土木課道路係担当と直前の確認作業を行う。プレハブを設置し，調査開始式を行う。道路幅より約50cm控えて調査区とし，ベルコンを設置して東側及び中央部分の表土剝ぎを行う。

3層まで掘り下げ，遺物の平板取上げ及び写真での記録を行う。集石（攪乱）を検出，記録する。西側部分の樹木を撤去し，1・2層を掘り下げる。耕作等による攪乱層である。5号集石，6号集石を検出し，実測する。

6月6日(月)～10日(金)

V層まで掘り下げ，V，Ⅵが遺物包含層であることを確認。遺物取上げ。道路擁壁撤去。西側部分Ⅲ層掘り下げ。遺物取上げ。

道路部分の確認調査を，25×5mのトレンチで実施。曽畑式土器出土。縄文時代前期の遺物包含層を確認。

6月13日(月)～17日(金)

東側部分8層を中心として掘り下げ。大型曽畑式土器片出土。3号集石検出・実測。西側部分3～5層を掘り下げ，遺物の取上げを行う。

6月20日(月)～24日(金)

東側部分検出集3号集石実測。西側部分5～8層掘り下げ。曽畑式土器を中心とした遺物取上げ。県考古学会長河口貞徳先生現地指導に来跡。現道部分の確認調査の結果をもとに協議。本調査は次年度以降に実施するものの，一部今回調査区域に追加することに決定。

6月28日(月)～7月1日(金)

東側部分検出3号集石実測。西側部分17層まで掘り下げ。平板取上げを行う。1号集石検出・実測を行う。追加部分の舗装を剝ぎ取り，掘り下げを行う。17層相当層を確認，完掘する。板状土製垂飾品出土。

7月4日(月)～7月8日(金)

東側部分検出3号集石実測終了。掘り下げを完了し，土層断面の実測を行うが，壁面の崩落が始まり，部分的な実測となる。遺物の整理，発掘用具の片付けを行い，調査を終了する。関係機関に終了の報告をし，島を後にする。

【平成7年度（緊急発掘調査）】

10月16日(月)～19日(木)

調査対象地を西側から，A，B，Cの3地点に分割して設定し，重機によりB地点の舗装及び表土の剝ぎ取りを行う。前年度調査における15層相当層を確認，曽畑式土器・獣骨・カーボン等多数出土。写真撮影の後，平板実測を行う。2号集石を検出し，実測する。部分的に17層相当層を

掘り下げ，遺物包含層であることを確認。

10月23日(月)～27日(金)

B地点17層相当層を掘り下げる。曽畑式土器多数出土し，取上げを行う。土層断面実測。B地点の調査を完了し，埋め戻しを行い，矢板を撤去する。関係者と協議の結果，A地点の調査を11月３日に実施することに決定。それまで発掘作業を中断することとなった。

11月２日(木)～３日(金)

A地点の舗装を剥ぎ取り，掘り下げを行う。包含層が一部残存するが，既に大部分は削平・攪乱され，遺物は出土しなかった。直ちに埋め戻しを行い，A地点の調査を終了する。協議の結果，C地点の調査を，11月13日より実施することに決定。

11月13日(月)～17日(金)

C地点の舗装を剥ぎ取り，掘り下げを行う。一部攪乱を受けているものの，縄文時代後期の土器小片が多数出土する。中央部に炉を持つ１号竪穴式住居を検出。写真撮影を行い，平面実測する。

11月20日(月)～24日(金)

一湊式土器等の縄文時代後期の土器多数出土。平板取上げを行う。球状有孔土製品出土。住居跡の埋土を掘り下げ，実測を完了する。炉跡の実測を行う。２基集石遺構を検出し，写真撮影及び実測を行う。土層断面を実測する。

発掘用具を整理し，調査を終了する。関係機関に調査終了の挨拶をする。

【発掘作業作業員】

平成6年

安藤ツタエ，池田マサエ，内田キミ子，大重裕子，小林慎一，斎藤サツ，寺田ケサ子，寺田シズ子，寺田ユフ子，西林一江，馬場ツイ子，真辺鈴美，真辺チトエ，真辺ツエ，真辺メイ，真辺幸乃，宮田のぶ子，山田トシ子

平成7年

安藤ツタエ，池田マサエ，内田キミ子，斎藤智恵美，高橋イサ子，寺田ケサ子，寺田良子，寺田ユフ子，西林一江，真辺ツエ，真辺チトエ，真辺チヨ子，宮田のぶ子，宮野タヅ子，米北由紀，若松ミドリ，大保美恵

【整理作業員】

四丸久美子，松本雅子，今村むつみ，西清子

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　位置及び自然環境

一湊松山遺跡は，鹿児島県熊毛郡上屋久町一湊字松山に所在する。

遺跡がある屋久島は鹿児島湾から約130km，佐多岬の南方60kmの東シナ海に浮かぶ薩南諸島北部の大隅諸島を構成する面積500㎢のほぼ円形の島である。島の大部分は斑状黒雲母花崗岩と呼ばれる花崗岩からなる山岳地帯で，特に中央部には，九州一の最高峰宮之浦岳1,935mをはじめとし，標高1,000mを越す山が30座以上ある。他方，海岸においては，山岳地帯を取り囲むように扇状地性の台地が海岸段丘を形成するが，河川流域に発達する小規模の沖積低地以外は平坦地に乏しい地形となり，全島ほぼ平坦な隣接の種子島とは好対照な島といえる。

屋久島は，年平均気温20℃弱と暖かい上，周囲を海に囲まれ付近を流れる黒潮の影響で，海からの湿った空気にさらされ，湿度の高い日が続く亜熱帯型の気候を呈している。そのため，林芙美子が「１か月に35日雨がふる。」と記したように雨が多く，従って河川の流量が豊富で，高い山塊より一気に珊瑚礁の海岸へと向かう瀑布も数多い。そのため，所謂表土の堆積が薄く，所によっては花崗岩の露頭が顕著である。しかしながら一方，高山部においては冬季氷点下10℃以下にもなる山岳気候を示し，南の島には珍しい１m近い積雪が観測されることもある。

このような気象条件により，ひとつの島でありながら，山岳地帯は高山植物の宝庫，平地はガジュマル等の亜熱帯植物が生息するという植物の垂直分布が観察できる珍しい島でもある。特に山岳部には「ヤクスギ」と呼ばれる樹齢1000年以上の杉の大木をはじめとする針葉樹林・広葉樹林の混生する原生林が生い成り，多数の「ヤクザル」「ヤクシカ」等と共に自然の姿が残り，1994年には「世界自然遺産」に指定され，年間を通じて多くの観光客が来島する。

本遺跡のある一湊は，屋久島の北半分上屋久町の北端に位置し，東シナ海に向け真北に突き出た矢筈岬の根元にある。一湊川によって開けた沖積低地及び砂丘地からなる集落であり，天然の良港に恵まれ，古くより鰹や鯖漁の基地として知られている一湊湾をもつ漁業の町である。

一湊の集落は，中央部を旧一湊川が貫く形で現一湊川の左岸を中心に広がり，遺跡は，これに対し，川の右岸に形成された砂丘地のほぼ最奥部に立地し，背後の「布引の滝」に水を容易に求められる利便な場所にある。この砂丘地は，古来より松の木が生い茂り，よって一帯を「松山」という地名で呼ばれるようになったと言われるが，現在は，数本の松が僅かにその名残を留めているにすぎない。

第２節　歴史的環境

屋久島は，かつて「掖玖」「夜久」と呼ばれ，７世紀初頭には朝廷との交流があったことが「日本書紀」等の記述に見える。中世から近世になると種子島氏や島津氏の勢力下にあったことがうかがえ，屋久島特産の「ヤクスギ」を税として納められていたことが記録に残されている。

それらの記述によると，遺跡が所在する一湊は集落としての規模も大きく，現在の行政区分である上屋久町内では第３位の集落であり，その自然地形を生かした天然の良港のため，最近まで交通の要所として重要な位置を占めていた。

本節では口之永良部島を含め，屋久島の遺跡について略述したい。本島の遺跡は，開発行為に伴う調査や大学による学術調査で明らかになったものを含め現在65遺跡を数える。これらの遺跡は第２図及び第１，２，３表のとおり，島の北側半分に集中する傾向が見られるが，今後の調査によって南側でも増加する可能性がある。

旧石器時代の遺跡については現在報告はないが，隣接の種子島では３万年前の礫群が発見されている事例もあり，今後の調査が期待される。

縄文時代の遺跡では，一湊松山遺跡(14)，栗生遺跡(46)，城之平遺跡(50)等が著名で，前期から晩期までの遺物の出土が報告されている。最近，口之永良部島において早期に位置付けられる塞ノ神式土器の採集もあり，縄文時代早期遺跡の存在の可能性もある。これらの中で，一湊松山遺跡については，昭和32年・32年・55年・平成４年と再々に渡る発掘調査が実施され，縄文時代前期の曽畑式・轟式等，後期の市来式・一湊式・松山式・研磨土器等のほか多数の石器や炉跡等の遺構が発見されている。

弥生時代の遺跡では，平成５・７年に発掘調査が行われた火ノ上山（宮之浦）遺跡(20)があり上能野土器が出土している。他には長峯遺跡(29)等が知られているが，表面採集による遺物のみである。

古墳時代の遺跡では，横峯遺跡(37)，白宇志遺跡(40)等から成川式土器片の採集が報告されているが本調査は実施されていない。また，本地域における古墳は今のところ報告されていない。

古代・中世の遺跡では，平成６年度発掘調査が実施された前田遺跡(2)・叶遺跡(5)，平成３年調査の岡遺跡(13)等が知られ，白磁，青磁，土師器等が出土している。また，種子島氏の屋久島支配に係る楠川城跡(24)等12か所の城郭跡が知られている。

近世の遺跡は，現在報告されていないが，山中に残る「ヤクスギ」の土埋木は，島津氏による屋久島支配の一端を物語るとともに，当時の島民の生活を知る上で重要な遺産であるとも言える。

《参考文献》

上屋久町郷土誌

鹿児島県市町村別遺跡地名表		1977	鹿児島県教育委員会
一湊松山遺跡	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書	1981	上屋久町教育委員会
岡遺跡	上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集	1992	上屋久町教育委員会

第1表　遺跡地名表（1）　～屋久島　上屋久町～

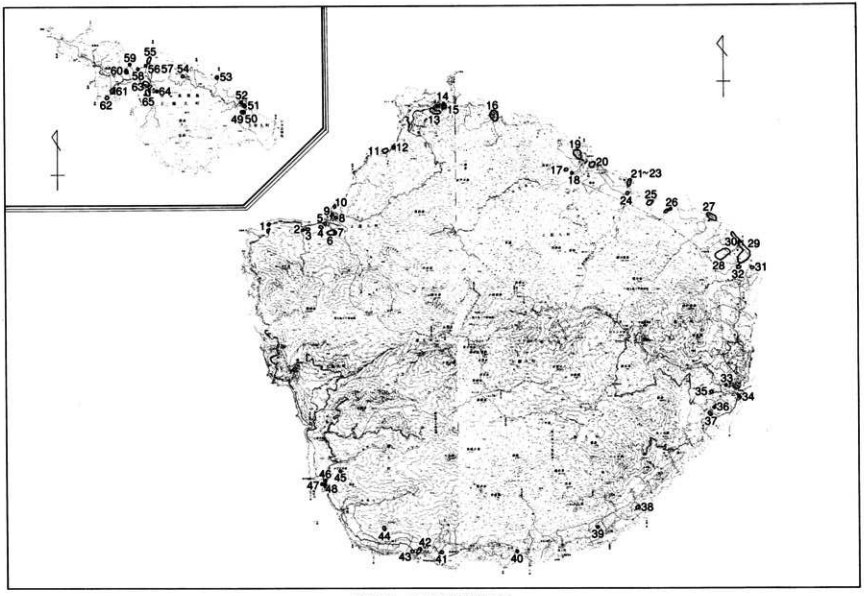
番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺　物　等	備　考	地名表
1	宿子	永田宿子	段丘	縄文	松山式，草野式	S61，62鹿大分布	82-63
2	前田	永田前田	丘陵	歴史	青磁・土師器	H6埋文セ調査	72
3	脇元	永田脇元	畑地	縄文・歴史	土器片・土師器・青磁	S61，62鹿大分布	62
4	瀬戸之上	永田叶	砂丘台地	縄（後・晩） 弥（後）	市来式・一湊式・弥生土器・石斧・石弾・石片		13，25
5	叶	永田叶	段丘	弥生・古墳	土器片	H6埋文セ調査	73
6	永田城山	永田城の山					34
7	永田城跡	永田				不明	39
8	田之峯	永田 向江田之峯	斜面地	縄文（後） 弥生（後）	黒色研磨土器，打製石斧，弥生土器，高杯，須恵器	県考古学会紀要2号 考古学雑誌39巻1号	3，15，12
9	向江	永田向江	微高地	縄文・歴史	土器片，土師器，磨石	S61，62鹿大分布	61
10	渕越道上	向江渕越道上	丘陵	縄文	土器片	H4.4農政分布	71
11	吉田川河岸	吉田	河岸	縄文・歴史	一湊式・松山式・土師器・須恵器・石斧・磨石	S61，62鹿大分布	60
12	吉田	吉田	畑地	縄文	土器片	S61，62鹿大分布	59
13	岡（塩入）	一湊岡	沖積層傾斜地	縄文（後） 弥生（後）	破片多数，弥生土器，有肩石器，打製石器		12，24
14	一湊松山	一湊松山	砂丘	縄（前・中） 縄（後・晩） 弥生（後）	曽畑式・市来式・一湊式・黒色研磨土器・石器・擦石・魚骨・敲石・打製石斧・磨製石斧・石皿・深浦式・轟式・弥生土器	考古学雑誌39巻1号 日本考古学協会発表23回	2，27
15	一湊城	一湊松山				破壊	40
16	志戸子	志戸子	微高地	縄文・歴史	土器片，土師器	S61，62鹿大分布	58
17	宮之浦城之平	宮之浦					35
18	八石山之上下	宮之浦 八石山之上下	谷斜面	不明		四連段築覆石石室	75
19	屋久島電工	宮之浦	台地	縄文・歴史	土器片，石皿，土師器	S61，62鹿大分布	57
20	宮之浦	宮之浦	砂丘	弥生（後）	弥生土器，磨製石斧	破壊	14
21	楠川Ⅰ	楠川公民館敷地	微高地	縄文	土器片，石斧	S61，62鹿大分布	53
22	楠川Ⅱ	楠川本蓮寺	微高地	縄文・歴史	土器片，石斧，須恵器	S61，62鹿大分布	54
23	楠川Ⅲ	楠川ゲートボール	微高地	縄文・歴史	土器片，石皿，土師器	S61，62鹿大分布	55
24	楠川城後	楠川城之川					32
25	牧野	楢川	台地	縄文	土器片	破壊	69
26	下牧野	楢川下牧野	台地	縄文	土器片		74，78
27	小瀬田	小瀬田	畑地		打製石斧	S61，62鹿大分布	56
28	屋敷野	小瀬田字屋敷野	台地	縄文	土器片	ミニゴルフ場分布	70
29	長峯	小瀬田長峯	山麓	縄（早・後・晩）， 弥（後）	市来式，磨製土器，石斧，石皿，凹石，敲石，弥生土器，石鏃，石弾，石錐		1，26
30	小瀬田城跡	小瀬田城					33
31	小落	小瀬田小落	海岸段丘	縄文・中世	縄文土器，土師器		77
32	小落上	小瀬田小落上	海岸段丘	縄文	縄文土器		76

第2表　遺跡地名表（2）　～屋久島　屋久町～

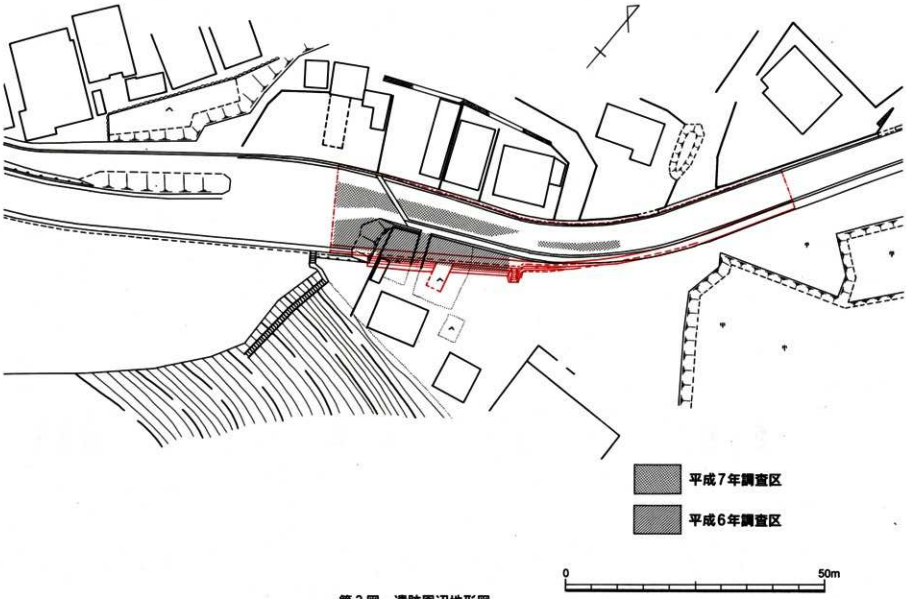
番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺　物　等	備　考	地名表
33	安房城山	安房向江野	平地		空堀，土塁	平地4ha 平盛久	83-7
34	安房	安房営林署構内	砂丘	弥生(後)	弥生土器小片		3
35	山口	春牧山口	海岸段丘	縄文(後) 中世	縄文土器，石斧，磨石， 土師器		34
36	横峯	春牧横峯	山林		市来式土器，石斧，石ノミ		2
37	横峯	春牧横峯	扇状地	縄文・古墳	縄文土器，石斧，磨石， 土師器		35
38	倉掛下町	麦倉掛 及び下町	扇状地 扇端	縄文	苦浜式		36
39	原城ヶ山	原神山	小山			落人伝説	9
40	白宇志	小島白宇志	台地	縄文・古墳	縄文土器，成川式土器		33
41	新八野	平内新八野	扇状地 扇端	縄文	石匙		32
42	田尾野	湯泊	台地	弥生・古墳?	土器，石器		28
43	瀬ノ原	湯泊瀬ノ原	海岸段丘	古墳	成川式土器		31
44	湯泊平家城跡	湯泊平家城	山地		城跡	落人伝説	10
45	栗生平家城跡	栗生甲ヶ崎	山地		土塁，空堀，塀	落人伝説	8
46	栗生	栗生	砂丘	縄文(後) 弥生(後)	市来式，弥生土器小片， 須恵器，土師器		1，4，6
47	栗生中学校	栗生	砂丘	弥生(後)	弥生土器		5
48	東宮原	栗生東宮原	砂丘	古墳	成川式土器		30

第3表　遺跡地名表（3）　～口永良部島　上屋久町～

番号	遺跡名	所在地	地形	時　代	遺　物　等	備　考	地名表
49	湯向城跡	湯向					82-38
50	城之平	湯向城之平	火山灰 台地	縄(後・晩) 弥(後) 後期(4期)	市来式・一湊式・黒色研磨 土器・打製石斧・軽石製加 工品・磨製円礫・弥生土 器・須恵器	県考古学紀要	4，16， 29
51	湯向集落	湯向	畑地	歴史	土器片	S61，62鹿大分布	67
52	富田原	湯向富田原	火山灰 台地	縄(後) 弥(後)	市来式・弥生土器・ 磨製石斧・有段石斧	一部攪乱	5，17
53	寝待	寝待	砂丘	縄文・歴史	土器片	S61，62鹿大分布	68
54	田代上	田代	台地	縄文	土器片	S61，62鹿大分布	66
55	西ノ浦	西ノ浦	火山灰斜面地	弥(後)	弥生土器・高杯		20
56	新浦(三浦)	西ノ浦	火山灰 台地	弥(後)	弥生土器・小型鉢・壷・ 石斧・石器		19
57	新浦	西ノ浦	火山灰 台地	縄(後)	市来式土器		7
58	西之浜	西ノ浦	火山灰 台地	縄(後)	市来式土器		8
59	中野(黒瀬)	西ノ浦	火山灰 斜面地	弥(後)	弥生土器・高杯・ 小型壷・石器・石鏃・滑石器		22
60	下新道(住吉)	西ノ浦	火山灰 台地	縄(後) 弥(後)	市来式土器・石斧・滑石器・ 弥生土器・高杯・鉢・滑石・ 石鏃		9，21
61	新村	新村	台地	縄文・歴史	土器片・土師器		65
62	新村西	新村	台地	縄文・歴史	土器片・土師器・須恵器	S61，62鹿大分布	64
63	宮迫	木村宮迫	火山灰 台地	縄（後）弥 （後）	市来式土器・磨製石斧・ 扁平片刃石斧・弥生土器		6，18
64	前田	金ヶ迫	火山灰 台地	縄(後) 弥(後) 後期(4期)	市来式・指宿式・無文土器 弥生土器・壷・鉢 須恵器		11，23， 31
65	津城跡	城山					37



第２図　周辺遺跡分布図



第3図　遺跡周辺地形図

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　調査の概要

（1）【平成5年度，道路拡幅部分確認調査】

本調査は，遺物包含層の存在及びその深さと範囲を確認するために実施した。道路拡幅対象地である畑地に2m×3mのトレンチ3か所を設定し，人力により調査を進めた。砂丘地のため，隣接の県道を通行する車両の振動でトレンチ壁面が崩落し，表土下約1.5mで調査を断念し，埋め戻しを行った。

遺跡は，砂丘独特の砂堆積を呈し，層位的な関係を十分把握できなかったが，縄文時代後期の文化層の存在を確認することができ，約200㎡を遺跡の範囲とした。また，下部の調査は実施できなかったが，遺物の出土状況から，下層に遺物包含層の存在が予想された。

（2）【平成6年度，道路拡幅部分緊急発掘調査・現道部分確認調査】

本調査は，対象地が砂丘地であり，予想される調査中の崩落に対処するため，計画上の道路幅から50cm控えて調査範囲とした。調査面積は，当初計画された拡幅部分200㎡及び同じに実施した現道部分の確認調査に基づく70㎡の合計270㎡である。

調査にあたっては，地形的に重機を活用することができないため，東部部分から1層ずつ人力による調査を実施した。一方，調査対象地は，北側及び西側にコンクリート擁壁設置され，また中央部には民家への出入りのためのコンクリート製階段が作られているため，掘り下げの進捗に併せて撤去して調査を進めた。

今回の調査では，表土から2・3層にかけて縄文時代後期の遺物が出土したが，畑耕作等による攪乱が激しく，大部分の遺物は一括で取り上げることとなった。本遺跡は砂丘形成による堆積が顕著で，遺物包含層と無遺物層が交互をなし，最終的には18層まで掘り下げたが，3，5，6，8，10，13，15，17層において遺構・遺物を確認した。

（3）【平成7年度，現道部分緊急発掘調査】

本調査は，現道部分改修工事に伴い，前年度実施した確認調査及びこれまでの遺物発見事例に基づいて設定した，一湊派出所前から一湊ガソリンスタンド前までの約140㎡を対象として実施したものである。

調査にあたっては，対象地が砂丘のため掘削の影響が隣接する民家に及ばないように，また調査作業員の安全確保のため，鋼矢板を打ち込んで実施することとしたが，打ち込みによる振動で民家に影響が出たため，鋼矢板の使用を断念し，いわゆる「段掘り」で調査を行った。

また，調査地点が現道であり，しかも迂回路が確保できないこと，現道下に上水道管及びNTT光通信ケーブルが埋設されていること，民家への出入りの確保といった理由から調査地点を3か所に区分し，西側部分40㎡をA地点，中央部分60㎡をB地点，東側部分20㎡をC地点として調査を行った。

A地点の調査では，舗装面より重機及び人力による掘り下げを行ったが，道路建設等により遺物包含層が完全に削平され，遺構・遺物共に検出されなかった。

B地点の調査では，重機による舗装面撤去の後，人力による掘り下げを行った。その結果，2枚の縄文時代前期遺物包含層が確認できた。いずれの包含層共東に向かって傾斜し，現在の地形が東に向かって上がっているのに対し，逆の傾斜を見せることから，砂丘の形成過程の一時期であることが推定された。これらの地層は，前年度調査地点における8層，17層に相当するものと判断した。

出土した遺物は，曽畑式土器及び磨石等の石器である。また遺構として集石が検出された。

C地点の調査では，交通確保や地下に埋設された光通信ケーブル保護に配慮し，道路センターラインに沿って約1m，長さ約20mのトレンチ状の調査区を設定した。

重機による舗装敷き撤去後，人力による掘り下げを行ったところ，黒色砂層中から縄文時代後期の土器及び石器が出土した。しかし2層上部は道路建設等による攪乱が激しく，遺物は一括で取り上げた。2層下部から3層にかけて，地層が安定し，一渙式土器を中心に多量の土器，石器が出土した。また3層から，中央部に炉跡を持つ竪穴住居1基が検出された。

2層以下の層位及び遺物状況を確認し，調査区の一部で4層が確認され，少量の縄文時代中期の土器が出土した。

C地点では，縄文時代前期の遺物包含層も予想されたが，調査の安全確保のため，縄文時代中期の遺物包含層まで確認した時点で調査を終了した。

第2節　遺跡の層位

本遺跡の層位は，平成6年度調査地点，平成7年度各調査地点において若干の違いが見られるが，基本的には砂丘が形成される過程に伴って遺跡が成立し，褐色系の砂層が生活が営まれたことを示しているものと考えられる。

各層については，平成6年度調査地点の層位を標準として記述する。

1層　耕作による攪乱層。縄文時代後期遺物が散布する。

2層　黒色砂層。最大約50cmの堆積があり，縄文時代後期遺物包含層である。ゴミ穴等による攪乱が多い。

3層　茶褐色砂層。30～40cmの堆積の中に巨角礫が多数入り込んでいる。縄文時代中期を中心とする遺物包含層である。集石遺構，炉跡が検出された。

4層　黄白色砂層。最大1mを測る。基本的に無遺物層であるが，ごく少量の遺物を含む。

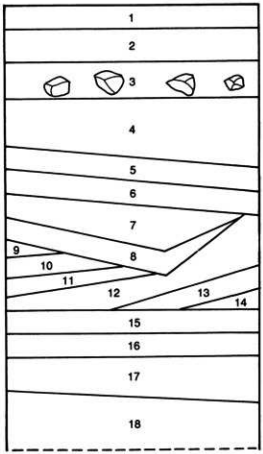
5層　茶褐色砂層。約30cmの堆積。縄文時代中期の遺物を中心に若干の前期の遺物が出土している。炉跡，集石遺構が検出された。

6層　黄褐色砂層。堆積は約20cmを測り，やや薄めの層である。縄文時代前期の遺物包含層であるが，遺物量は少ない。

7層　淡黄褐色砂層。調査区の中央部から東側部分にのみ存在する。無遺物層である。

8層　暗灰色砂層。7層と同様の分布をなし，10～30cmの堆積を測る。縄文時代前期の遺物包含層であり，多量の土器，石器が出土した。炉跡，集石遺構が検出された。

9層　明黄褐色砂層。部分的に存在する。少量の縄文時代前期の遺物が出土する。



第４図　標準層位模式柱状図

10層　暗褐色砂層。部分的に存在する。少量の縄文時代前期の遺物が出土する。

11層　黄褐色砂層。約40cmの堆積を測るが，部分的にのみ残存する。少量の縄文時代前期の遺物が出土する。

12層　黄白色砂層。４層と同質の堆積であるが，厚さは若干薄い。無遺物層である。

13層　明暗褐色砂層。中央部分に存在する層であり，厚さも10cm程度である。無遺物層である。

14層　黄白色砂層。13層より狭い範囲に存在する層であり，厚さは20cm程度。無遺物層である。

15層　明黒褐色砂層。厚さ約20cmを測り，少量の縄文時代前期の遺物が出土する。

16層　黄白色砂層。約10cmでほぼ均一に堆積する。無遺物層である。

17層　明黒褐色砂層。堆積は５～40cm程度だが，遺物の量は豊富である。８層と共に本遺跡における，縄文時代前期遺物包含層の主体である。

18層　黄白色砂層。現海岸に存在する，花崗岩を母体とする直径２～３mm程度の砂粒からなる層である。無遺物層である。

砂層の場合は，堆積もはやく，一時期をパックしてしまう可能性もあるが，海岸方向にむかって（風方向にむかって），各層が融合・分離しており，前後の近い時期が混在することも十分考えられる。８層と17層はその間層の層厚からも完全に分離できるが，９・10～15層で混在が見られるのはそのためであろう。ただし破片の大きさと出土状況からは，ほぼ現位置が保たれているものと考えており，３・５・８層については明確に分離できる。17層と８層については，砂層の傾斜によって（出土位置が西側の一湊川の方へ近くなるに従って）同一層内での時期的な幅も考慮することは必要である。

第３節　出土土器の観察と分類

胎　土

胎土については，実体顕微鏡を用いて，それぞれ量の多→少を◎→○→△で表す。

石　英　白濁した不定形のコロコロした印象の礫で，赤色が付着していることがある。

長　石　通常乳白色ないしは白っぽい色調をなすことも多いが，本遺跡出土のものは透明でへき開面が明確で，同心円状のへき界面が観察される。

角閃石　茶褐色～黒褐色を呈し，柱状結晶をなす。

金雲母　金色～銀色の薄片状で，火成岩に産するものである。

滑　石　銀色の色調で，へき開面がほとんどなく，繊維状にはいる。

砂　礫　そのほかの砂礫が若干含まれるが，とくに透明の火山ガラスがみられることが注目される。噴出源は口永良部島か，喜界カルデラあるいは桜島かは明確でない。

屋久島は，火成岩―花崗岩質の地質で，一湊海岸の土砂には金雲母が著しく混ざる。また，特徴的な長石（透明でへき開面が同心円状にみえる）が多く混ざる。特徴的な長石と金雲母の存在で，これらから地元で製作された土器かどうかの判断とした。

土器観察表には，滑石を含む土器をAとし，搬入された土器をBとして，地元で製作された土器をCと記した。

焼　成　については堅緻なものを◎とし，普通を○，不良のものを△とした。

調　整

ナ　　デ　原体が不明であるが，一応指や手を想定し，なでられているもの。

工具ナデ　原体がヘラ状のもの，あるいは木口状のものと観察される場合。器面が明確な条痕を残さないもの。ヘラナデともいわれる。

ヘラミガキ　元来ナデの調整の延長上のものであるが，器面が平滑で，照かっている場合で，ヘラ状の原体が確認されるもの。

条　　痕　貝殻が原体として確認される場合は貝殻条痕と記すが，木口状の原体の場合は〈ハケ目状〉のものとし，その他原体が不明なものは条痕とのみ記入。

文様は調整の後に記入し，土器の上部から順に述べた。

分　類

Ⅰ類（曽畑式土器）1～104，107～118，178～207，223～247，249～332，371～375

Ⅰ類は，外器面全体に沈線による幾何学文様を施すもので，同一の棒状工具による刺突文や押引文を伴う。口縁端部には刻目もしくは刺突文を施す。調整は外器面・内器面ともよくナデられているが，条痕が消されていないものや条痕のままのものもある。細分類については，今日までの研究で，とくに文様構成からなされることが多い。Ⅰ類のうちで，横・縦の割り付けが明瞭で，口縁部文様帯が刺突文ないしは押引文をなすものをⅠa類とする。胴部については，横区画の割り付け線が複数であるものは，Ⅰa類に含まれるものと考える。器形は，口縁部がやや外反し砲弾形をなす深鉢と，同様な湾曲をもつ浅鉢があり，口縁部が直立するものもある。底部は例外なく丸底である。17層出土の土器がほとんどがⅠa類に属する。

割り付け線が省略され，口縁部文様帯から刺突文ないしは押引文がなくなり，平行沈線が口縁部文様帯をなすものをⅠb類とする。8層出土土器はほとんどがⅠb類で，施文原体が細くなるものもある。器形は口縁部から胴部が真っすぐ立ち上がるものと，口縁端部で外反するものがあり，頸部がしまって胴径が上回る器形があらわれる。底部は丸底のものと，丸平底のものがある。口縁部内面も平行沈線を主体とする。口縁部文様帯がなく，口縁部が外反しないものをⅠc類とす

る。

II類　105・106・248

内外面が条痕で調整され，ヘラ状工具を器面に押しつけて，器面を削り込まない浅い沈線の縦方向の施文の後に，曲線文を上書きするものである。口縁端部には刻目もしくは刺突文を施し，器形は砲弾形をなす。やや尖底気味の丸底になると考えられる。

III類　380～386

貝殻条痕に連続刺突文を施すものである。口縁部が内湾する器形で，底部については明確なものが出土していない。

IV類（条痕文土器）392～424，563～616

粗い条痕文の土器群である。外器面は横方向の条痕の後に，縦方向にやや深い沈線様の条痕をつける。内器面は横方向の条痕で調整されることが多い。底部は丸部と平丸底がある。突帯を巡らすものがある。小型鉢形土器がみられる。

V類（曽畑系土器）425～450，617～634

I類のように幾何学文はなさず，縦方向の細めの沈線が施されるもので，上下方向に往復運動によって施文される。外器面はナデ調整か条痕がナデ消され，内器面は条痕で調整される。底部にはI類の曽畑式土器と同じような平行沈線やクモの巣状の文様が見られる。IV類より明確に沈線が認められるものである。

VI類（深浦式土器）510～562

ミガキないしナデにより，平滑に仕上げた外器面に突帯を貼り付け，刻目をほどこすもので，沈線や連続刺突文や貝殻腹縁による相交弧文が組み合わされる。内器面は貝殻条痕である。器形は口縁部がやや内湾し，胴部でしまる弱いキャリパー型をなす。口縁部は波状のものがあり，端部に刻目が施される。底部は丸底である。

VII類（市来式土器）679～685，691，720

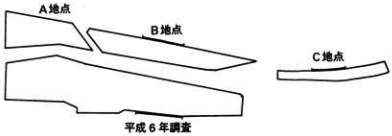
深鉢形の平底で，口縁端部が肥厚して断面三角形をなし，そこに貝殻刺突文や凹線を施すもので，調整は貝殻条痕である。

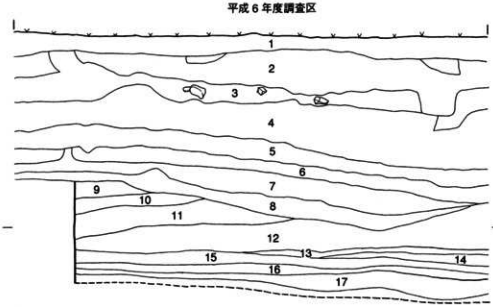
VIII類（丸尾式土器）686～690

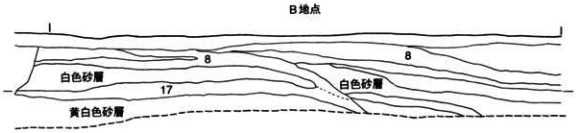
口縁端部は肥厚せず，口縁部断面が「く」の字断面をなすもので，口縁部下と「く」の字の屈曲部に，おもに貝殻腹縁による連続刺突文を施す。内外器面ともに貝殻条痕による調整がなされる。市来式の最終形態とされるものである。

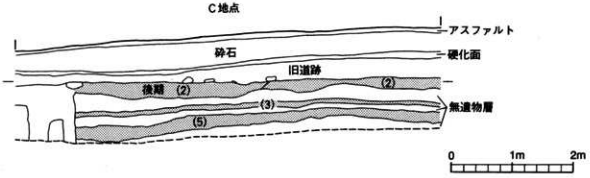
IX類（一湊式土器）692～716

貝殻腹縁による刺突文と細かい沈線文が特徴的である土器群。口縁部断面が「く」の字断面，もしくは「く」の字断面の形跡を残し，沈線文が顕著で，口縁部に幅広の文様帯をなすものをIX－a類とする。口縁部断面が「く」の字断面をなさず，文様が口縁端部に集約され，貝殻腹縁による幅のせまい刺突文とヘラ状工具による刺突文を施すものを，IX－b類とする。a類には波状口縁が，b類には平口縁が卓越するように考えられる。


A地点
B地点
C地点
平成６年調査


平成６年度調査区
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17


B地点
8
8
白色砂層
17
白色砂層
黄白色砂層


C地点
アスファルト
砕石
硬化面
旧道跡
後期
(2)
(2)
(3)
無遺物層
(5)
0
1m
2m

第５図　遺跡の層位図

第Ⅳ章　遺構・遺物

第1節　17層の調査

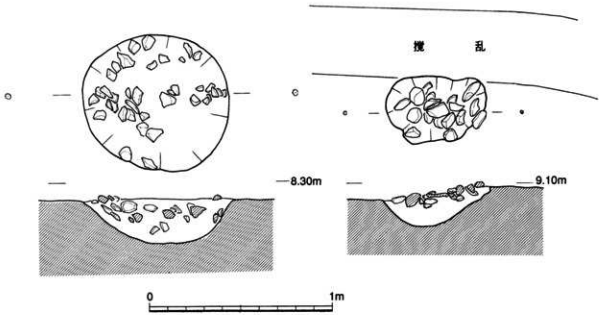
1　遺構等（第6図・第7図）

17層では，2基の集石遺構と石斧の集積遺構が検出された。17層は平成6年度調査では調査区に平行に堆積しており，良好な出土状態であった。平成7年度調査のB地点では，2層の包含層があり，下層は東側に傾斜して落ち込んでいる。平成7年度調査のB地点は，現状の高さで平成6年度調査区の8層より低い位置にあり，その上層については，15層段階として調査時に把握していた。しかしながら遺物量が少なく，土器の分類が困難であった。下層については土器からも17層相当として考えられるが，上層の扱いについては，出土量の多さなどから明確な包含層として位置付けられる8層に一括して整理作業を行った。

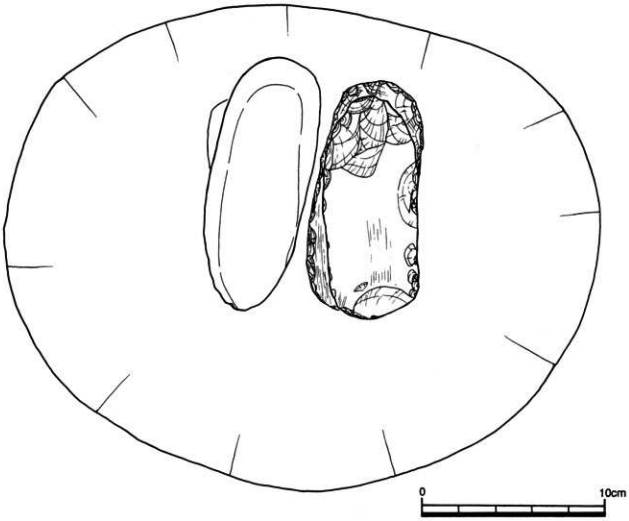
1号集石はA地点で，黒色砂層の落ち込みとして検出され，79cm × 72cmの規模で検出面より深さ24cmのほぼ円形の掘り込みをもち，礫が入っていた。礫は自然礫が熱により破砕したもので礫面を一面有するものが多い。そのほとんどが赤化していた。埋土は炭化物を多く含む。

2号集石はB地点で検出した。北側は電話線埋設時の掘り込みで撹乱されており，長軸54cm × 短軸34cmの楕円形に検出した。検出面より深さは17cmである。埋土は炭化物を多く含む。

石斧の集積遺構は，119・123・124・144の4本が123・144を上に2対ずつ重なって出土した。なお掘り込みの確認の前に，付近で121を取り上げており，同一の土坑に埋納されていた可能性が強い。明確に遺構把握する前に123・144を取り上げ，その後に，土坑を検出した。土坑掘り下げ中に砂の間層があって119・124を対で検出し，石斧の集積遺構であることが判明した。



第6図　1号集石，2号集石（B地点）



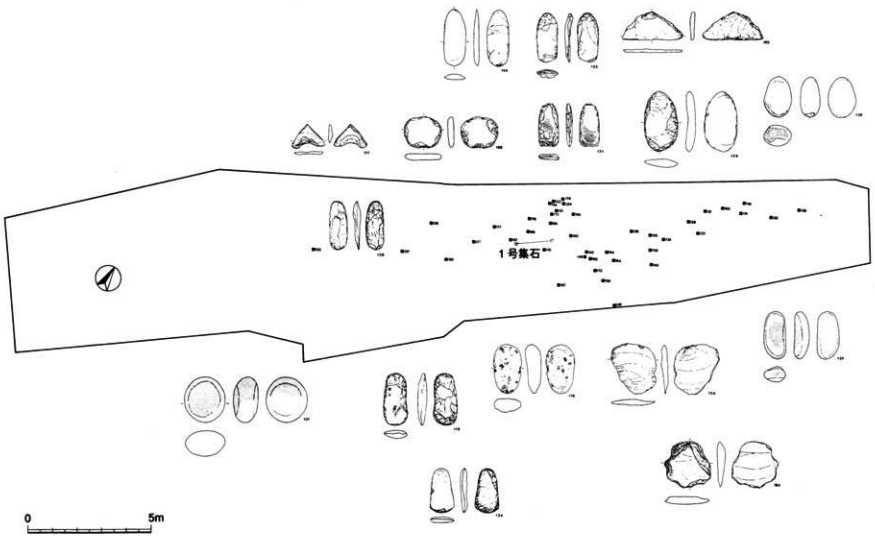
第7図　17層検出石斧デポ

出土状況（第8図～第10図）

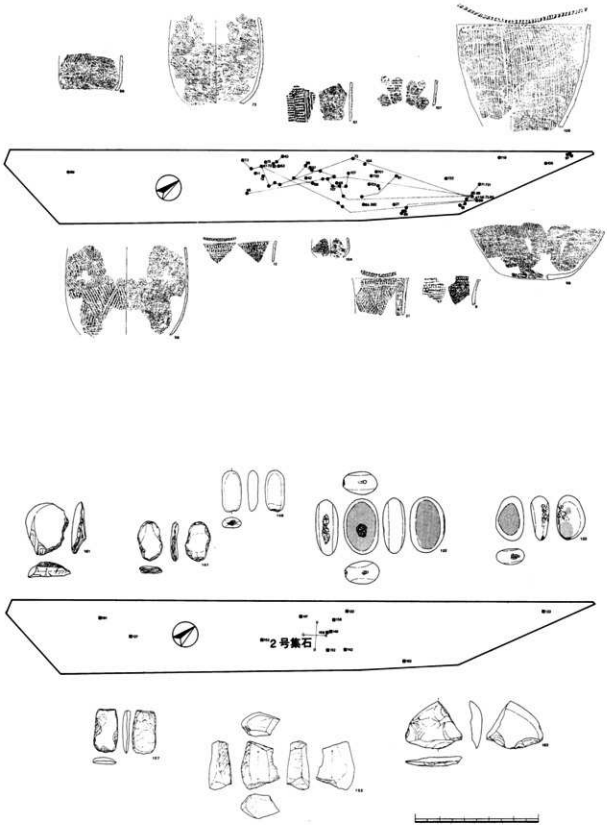
破片が大きく，同一層内で接合することから，包含層としては撹乱はないと考えられる。実測図として掲載したもののみを表記した。16・20・34・105（図版13）などの出土状況から，破片として動いているが，一定時期の現位置性が伺われる。北東側にかたよって分布する。石器の分布状況も，土器と同様である。

B地点においても，北東側からの出土量が多い。

第8図　17層出土土器出土状況



第9図　17層出土石器出土状況



第10図　B地点．17層相当層出土状況

2 遺 物

(1) 土 器

Ⅰ類土器

Ⅰa類は1～43・46～55・57～63・65・66・73～78・80～104・106で，Ⅰb類は44・45・56・64・67～72・79である。

1～45が口縁部，46～104が胴部，115～118が底部である。Ⅰa類のなかで，6・8・12・14・17・18は唐津タイプともいわれる古い階段のものである。横方向の割り付けが先行して行われることは，2・5・22・27・28・29・34・41などから理解できる。10・11については，刺突文がなく，押引文の下位に弧線が施されており，また41についても刺突文を失って，それぞれの編年観では時期が下がる。Ⅰb類の44も同様であるが，44は口縁部文様の平行線文に押引きの痕跡が強く，一概に混入とは言えない。41の文様構成は，文様帯をきちんともって，横方向の割り付けも行われ，整然とした区画であるのでⅠa類としたい。Ⅰa類のなかにも，短沈線と刺突文で同一の施文具で施文されるが，それぞれの文様の幅が一定に近い一群と，幅が細かったり，粗い沈線を施す一群（28・29・31・32・34・41・42・52・61・65・73・74・88・94・98）が存在する。これらの胎土は74を除けば，すべて地元産であり，前者が移入品もしくはオリジナルに近いもので，後者が在地化したものであることがわかる。内器面に条痕が残るものは後者に含まれるものが多い（29・31・32・34・41・45・61・65・73～88）。44・56・67・68・69のⅠb類は，胎土から搬入品であることが明確である。106は内外器面に貝殻条痕があり，口縁部は器壁が荒れてはいるが刺突文が観察され，その下に沈線による羽状文と曲線文を施している。Ⅰa類とⅡ類が融合した土器とも考えられる。

Ⅱ類土器　105

105は内外器面に貝殻条痕があり，口縁端部には刻目をいれ，縦方向の暗文風の沈線のうえに，曲線文を施文している。縦方向の割り付けが意識されているものと考えられ，これはオリジナルが1・3・16等の縦区画のものの影響とも考えられる。地元産である。

(2) 石 器

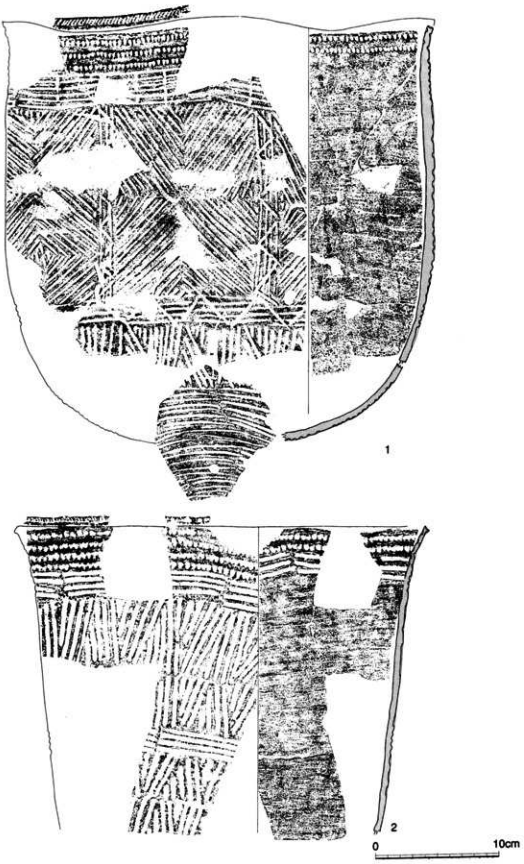
17層からは，局部磨製石斧4点，打製石斧9点，磨石・敲石19点，石皿1点，砥石1点，凹石1点，剥片石器6点，礫石器17点，軽石製品1点の合計58点の石器が出土した。石器は，前期相当層の調査が実施できなかったA地点及び遺物の出土が見られなかったC地点を除き，調査区のほぼ全域に分布するが，器種の違いによる分布の偏りは見られない。

石器の石材は，島内で産出する砂岩，頁岩，粘板岩，花崗岩，ホルンフェルスが用いられ，黒曜石等の石材は持ち込まれていない。

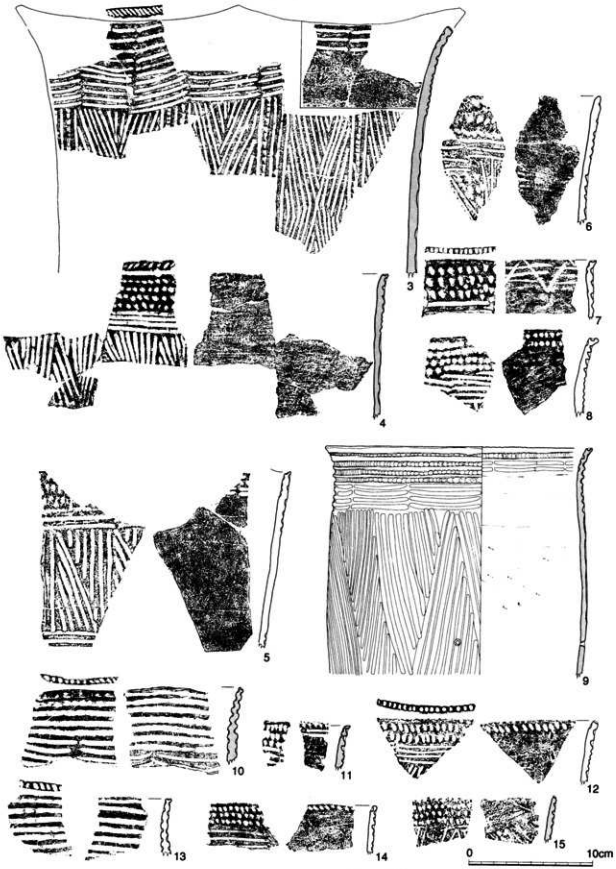
石器の構成をみると，狩猟用具となるものが無く，調理加工具である磨石・敲石や耕作用具とされる打製石斧が多く出土している。また，貝類の採集用具と推定される小型の剥片石器の出土が注目される。

①局部磨製石斧（第22図119～122）

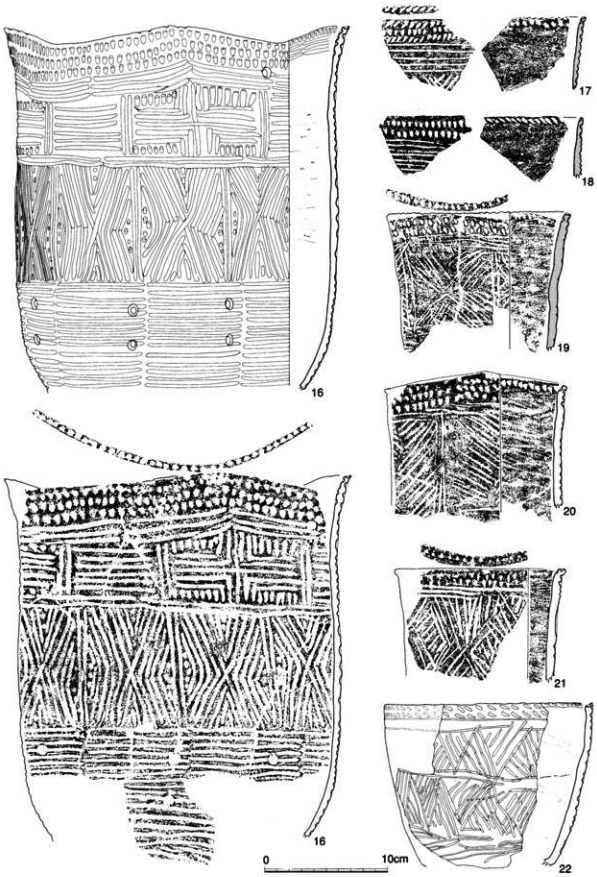
4点出土した。119は，表面から裏面にかけて敲打による調整が綿密に施されるほか，刃



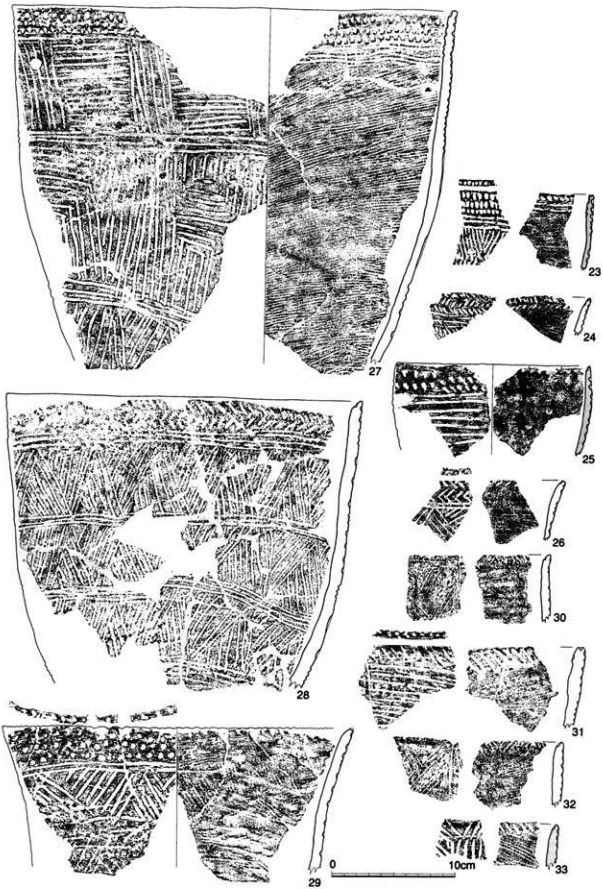
第11図　17層出土曽畑式土器（1）



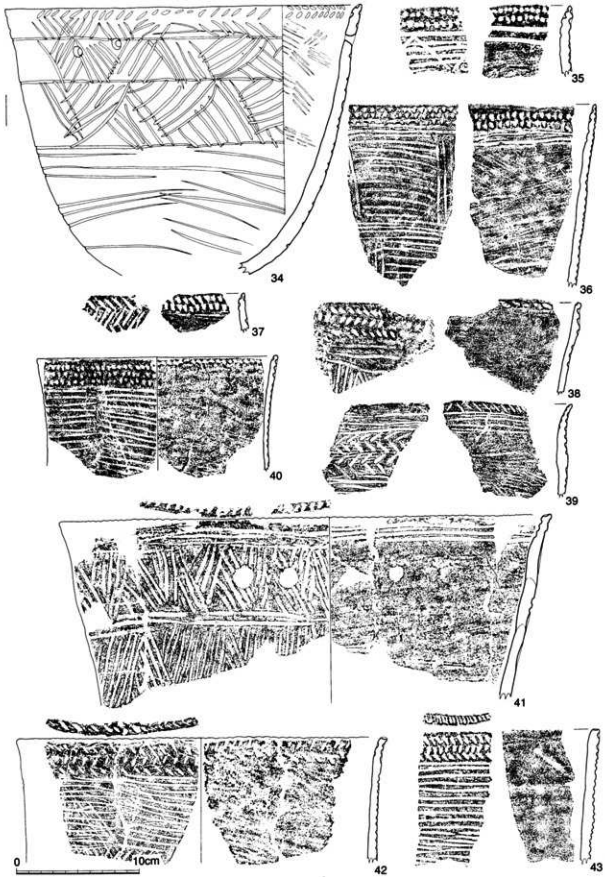
第12図　17層出土曽畑式土器（2）



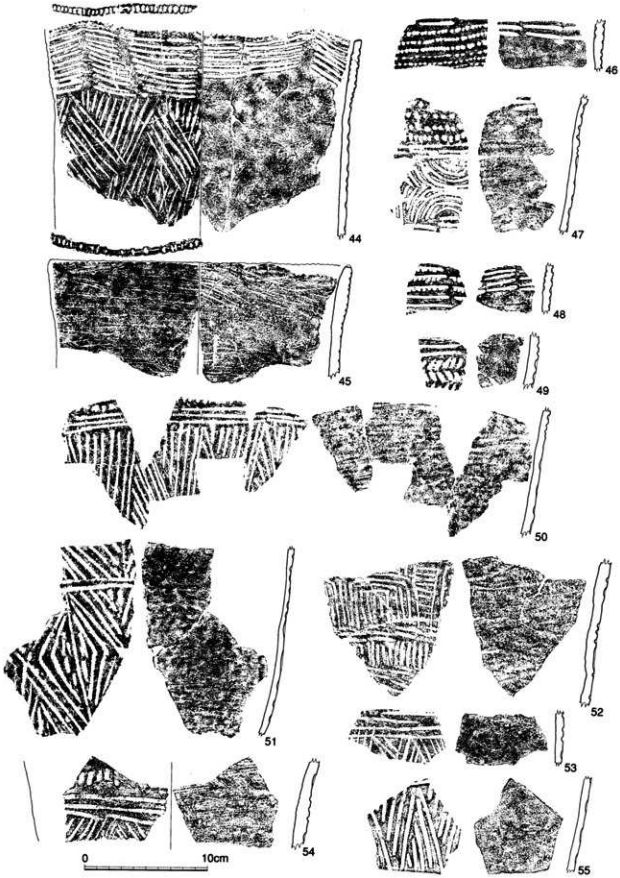
第13図　17層出土曽畑式土器（3）



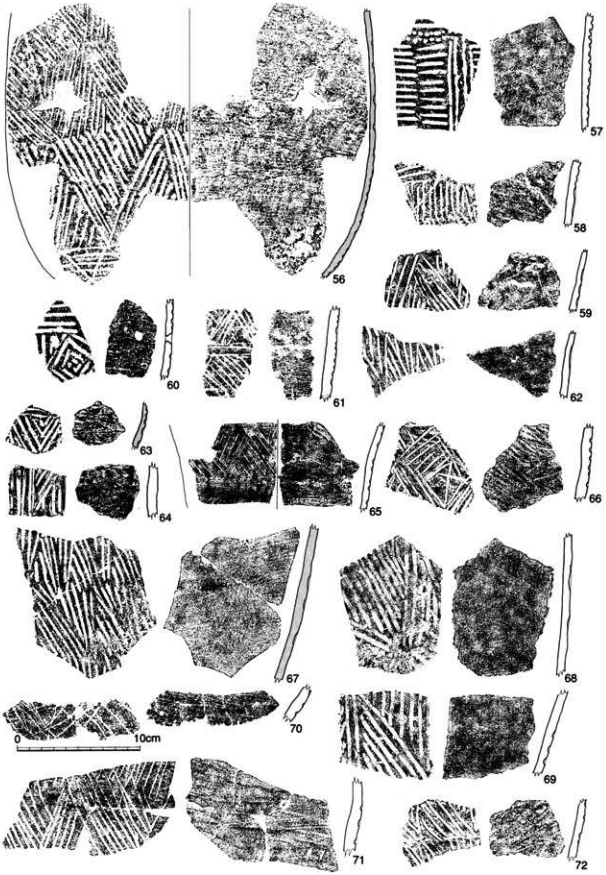
第14図　17層出土曽畑式土器（4）



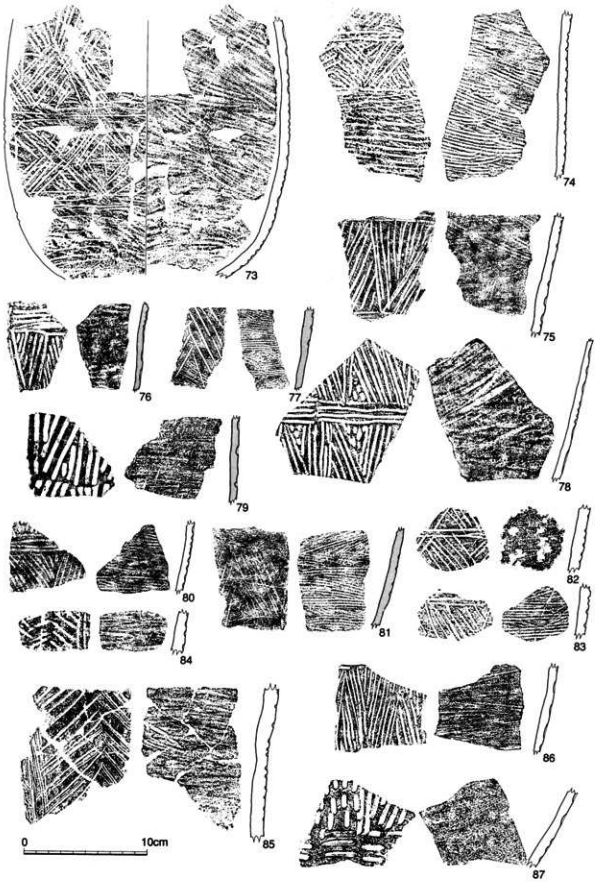
第15図　17層出土曽畑式土器（5）



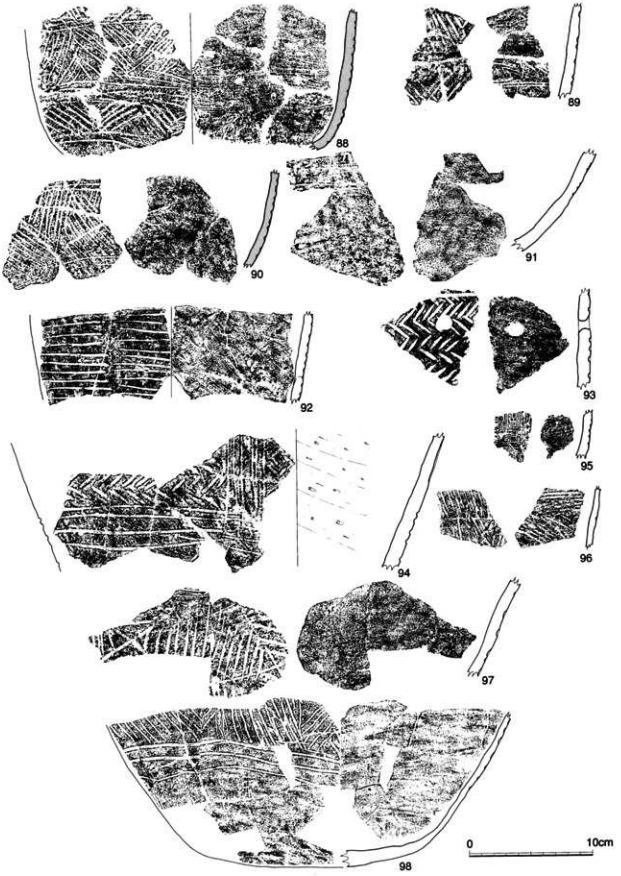
第16図　17層出土曽畑式土器（6）



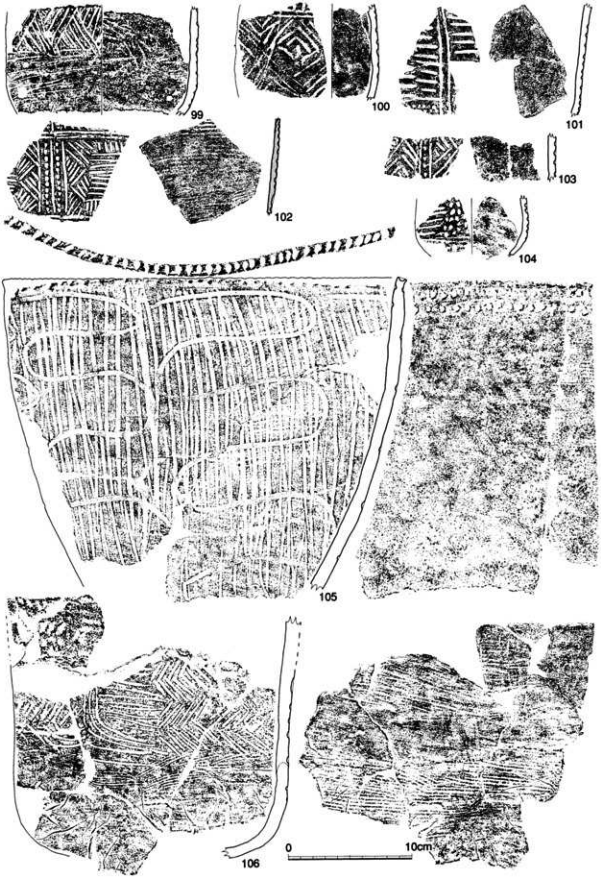
第17図　17層出土曽畑式土器（7）



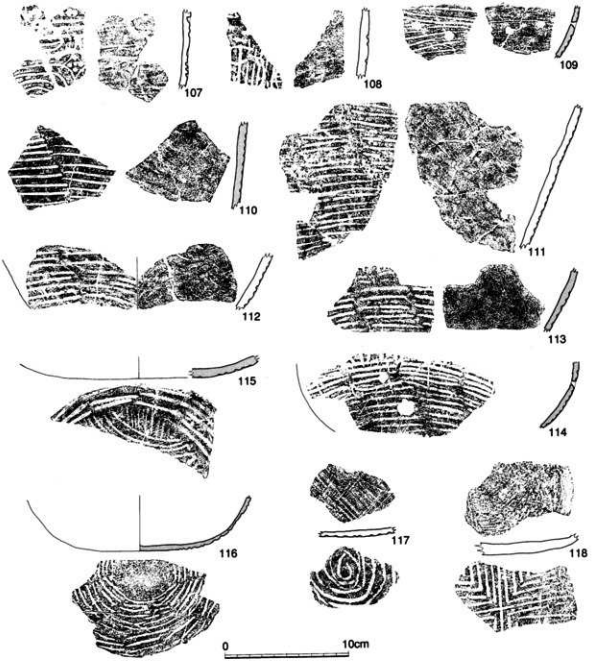
第18図　17層出土曽畑式土器（8）



第19図　17層出土曽畑式土器（9）



第20図　17層出土曽畑式土器（10）



第21図　17層出土曽畑式土器（11）

部及び側縁部の一部には裏面からの調整が確認できる。表面はほぼ自然面を利用するが，縦方向に研磨痕が観察される。刃部形態は，両刃である。120は，短冊状の自然石の側縁部に，わずかに敲打による調整を施して整形した後，刃部付近に縦位及び斜位に研磨を行って，刃部を作出している。刃部の大部分は欠損しているが，両刃である。121は，小型の石斧である。小型短冊状石材の側縁部に敲打による調整を施した後，表面は斜位に，裏面は横位及び斜位に，ほぼ全面研磨を行う。研磨方向の違いによる境界は，わずかな稜となる。刃部の欠損が大きいが，両刃が確認できる。122は，断面形状が半円の自然礫の先端部にわずかな研磨痕が観察できる。未完成品と思われる。

②打製石斧（第22図123～128，第23図129～131）

9点出土した。123～130は，いずれも片面が自然面となる石斧である。123は，基部付近に表裏両面ともに整形剥離を施すが，側縁部下部から刃部にかけて使用痕が明確に残る。刃部形態は，片刃である。124は，自然面側から敲打による調整を施す。刃部の整形は丁寧である。刃部形態は，片刃である。125は，自然礫から剥ぎ取った縦長剥片の側縁部を，わずかに敲打調整して整形したものである。126は，側縁部全部を敲打による整形を施し，刃部から基部にかけて2度に渡って大きく剥離調整を行っている。刃部形態は，両刃に近い。127は，短冊状の石材の側縁部及び刃部にかけてを施す。片側側縁部のほぼ中央部に抉り状の敲打痕が残る。128は，自然面から裏面にかけて敲打調整が施される。側縁部にわずかな抉りが確認できる。刃部形態は，蛤刃状を呈する。基部は欠損している。129は，自然面から裏面にかけて，周囲を敲打調整した，楕円形の石斧である。刃部形態は，片刃である。130は，刃部にのみわずかな敲打調整が見られる扁平な石斧である。131は，調整痕は見られないが，形状から石斧に位置付けた。敲石的な石器と考えられる。基部は欠損する。

③磨石・敲石（第24図132～140，第25図141～150）

19点出土した。132～135は，磨石及び敲石の両機能を持つ。132は，側部と表面に敲打痕が残り，133～135は側部の一部を敲打面とする。136～138は磨石である。138は，擦痕がわずかに観察できる。139～150は敲石である。139～140は，自然円礫を素材とし，側部を敲打面とする。141は，扁平な自然礫の一端を敲打面とする。敲打による破損が著しい。142は，先端部に敲打痕が観察できる。143は，先端部に敲打痕が残るほか，表面，裏面，側縁部の一部に擦痕が認められる。144～145は，自然礫の表面を，扁平に剥ぎ取った剥片を素材とする。先端部に敲打痕が観察できる。146は，長円形の自然礫を素材に，先端部を敲打面とする。敲打による破損が見られる。147は，扁平な自然礫の側部全体に，敲打による剥がれが見られるが，敲石としての機能に起因するものとは考えにくい。敲打痕がわずかに確認できる。148は，上部と下部に敲打痕が残る。上部の痕跡は，意図的に剥離を行った可能性もある。149は，拳大の花崗岩礫を素材とし，4カ所に凹み状の明瞭な敲打跡が確認できる。150は，乳棒状の自然礫の細くなった端部を敲打面とする。144，145，148は，今回出土している石斧の形状と類似し，石斧作成の意図の可能性もある。

④石皿（第26図151）

1点出土した。表裏両面に磨痕が観察できる。表面は，凹みが著しいが，磨滅の状態を

観察すると自然な凹みであると考える。

⑤砥石（第27図152）

1点出土した。表裏面を研磨面とする。表面は，磨滅し凹彎する。側面に筋状の凹みが5本確認できる。用途は明確ではないが，研ぎ痕と推定される。破損品である。

⑥凹石（第27図153）

1点出土した。表裏両面の中央部に浅い凹みが認められる。敲石の可能性もあるが，痕跡の状態から，凹石とした。

⑦剥片石器（第27図154～159）

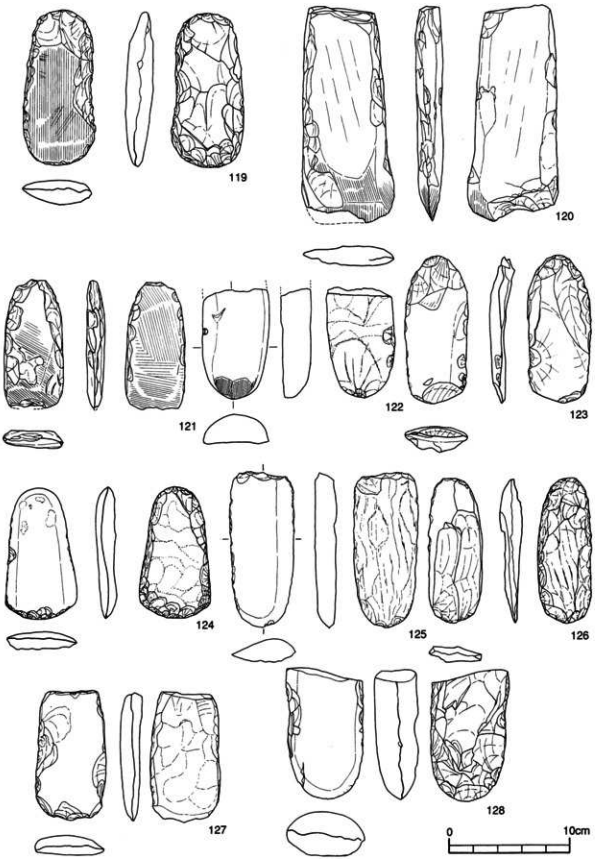
6点出土した。154は，原石からの剥離の打点が，表裏で逆方向となる。打点に自然面が残る。刃部は，剥離で生じた鋭利な縁辺部を充てている。155は，自然礫からの一次剥離で生じた縦長剥片である。鋭利な縁辺部に使用痕が観察できる。156～157は，一時剥離で生じたほぼ横長の剥片の下部に，横方向の剥離を加えて刃部を作出したものである。使用痕が確認できる。158～159は，円礫の表面を薄く剥離し，側縁部にわずかに二次的な調整を施す。

⑧礫石器（第28図160～169，第29図170～177）

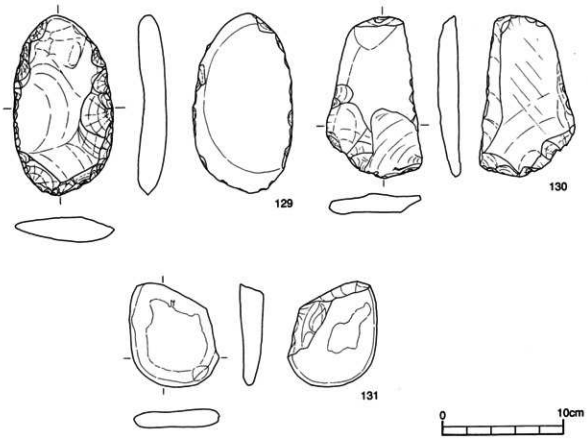
17点出土した。ここでは，剥片を素材にするもので，大型のものを礫石器とした。また，自然礫に剥離を加えて，刃部を作出したものも礫石器として位置付けた。160～164は，片面を自然面とするものである。160は，自然面を残す大型剥片の，自然面方向から粗い剥離を施す。161～162は，自然面を残す大型剥片の，剥離面方向から粗い剥離を行って，刃部を作出している。131は，2カ所に剥離が認められるが，調整剥離か使用痕か不明である。164は，一端を除いて，すべてに粗い剥離を自然面方向から施す。165は，鈍角二等辺三角形状の剥片である。166は，扁平な自然円礫の周辺に粗い交互剥離を加えた，円盤状の石器である。167～170は，剥離の方向や形状の一定しない剥片の，鋭利な縁辺部を刃部としたもので，使用痕が認められる。171～174は，破砕礫に近い剥片である。175は，小型の卵形自然礫の一端に剥離を加えて，刃部とする。176は，石鏃状の剥片の抉りの部分が刃部となる。

⑨軽石製品（第29図176）

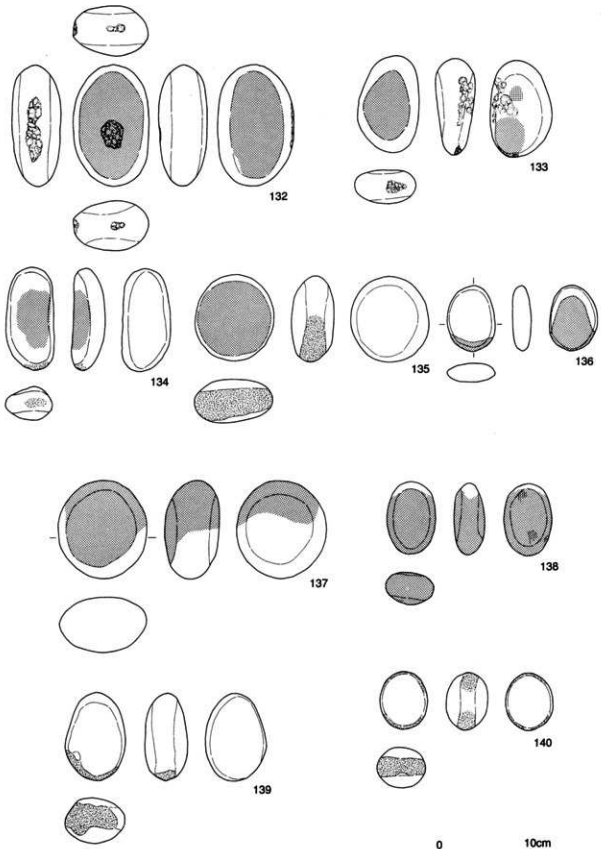
1点出土した。ほぼ自然の形状を残すものと考えられるが，全体に斜方向の擦痕が確認できる。用途は，不明である。



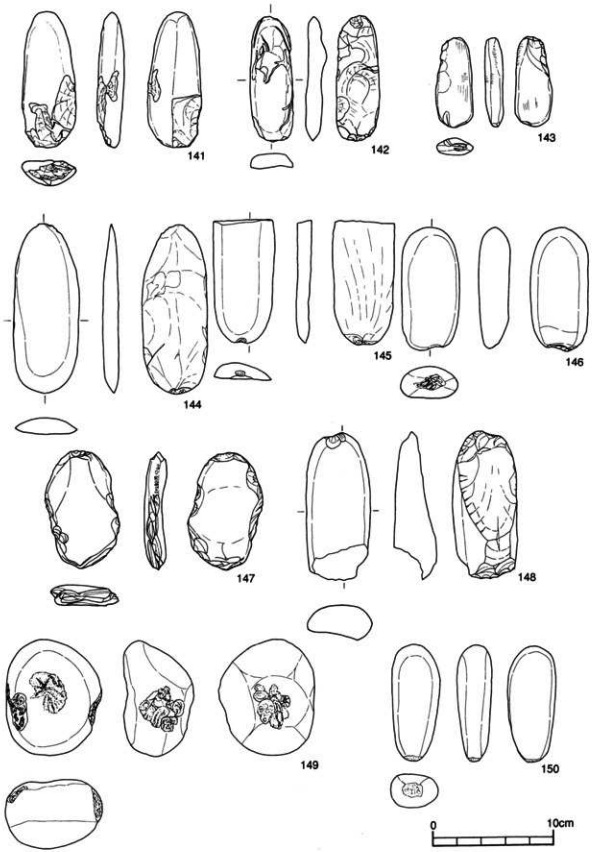
第22図　17層出土石器（1）



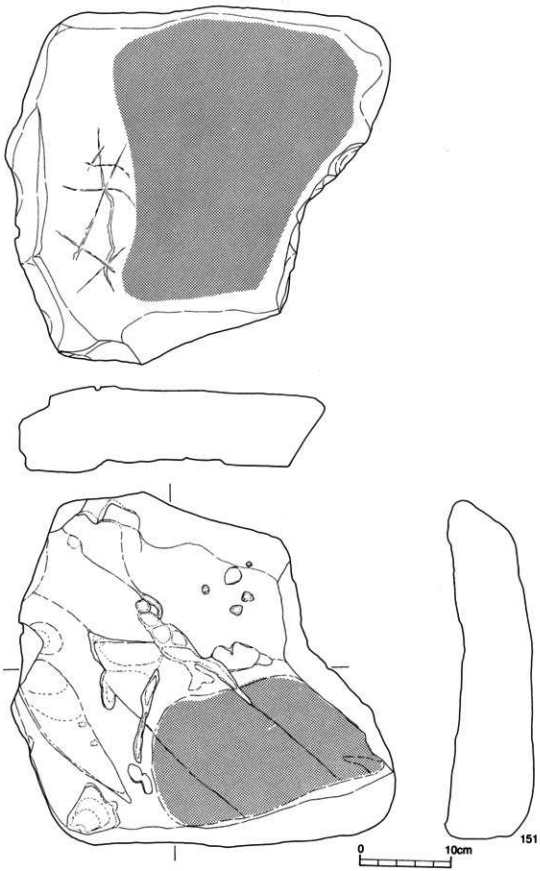
第23図　17層出土石器（2）



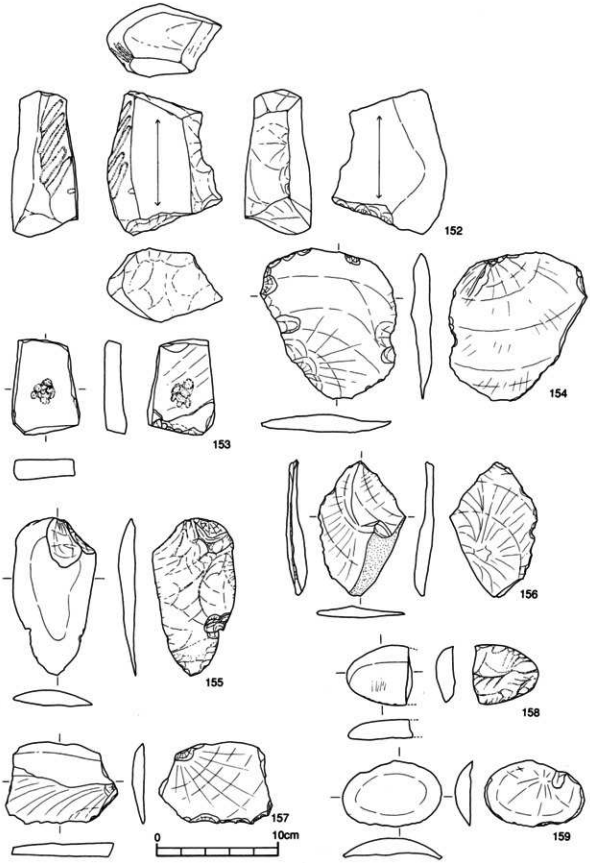
第24図　17層出土石器（3）



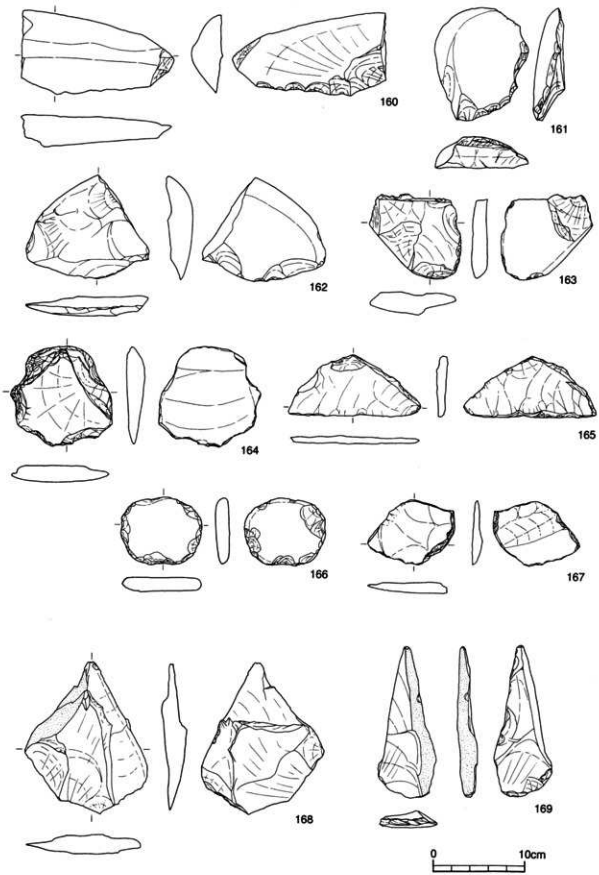
第25図　17層出土石器（4）



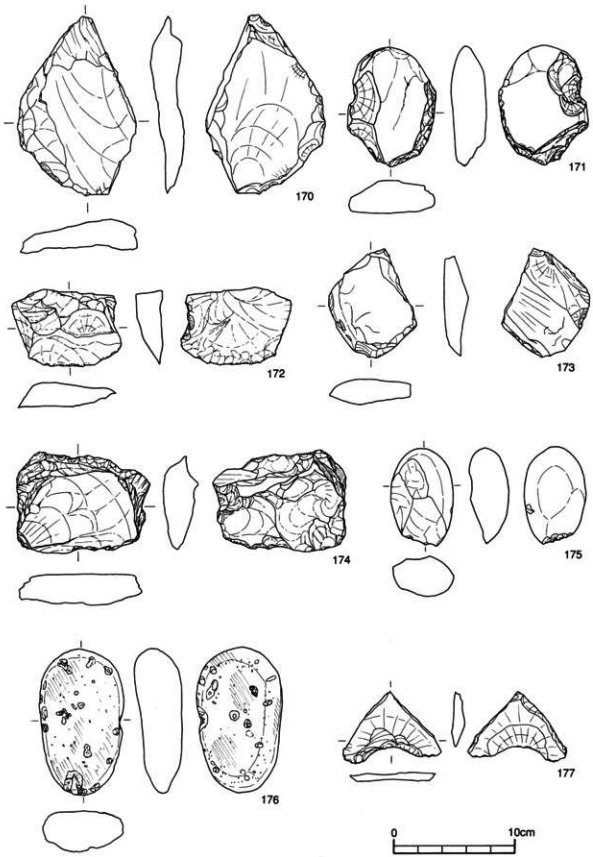
第26図　17層出土石器（5）



第27図　17層出土石器（6）



第28図　17層出土石器（7）



第29図　17層出土石器（8）

第2節　9層～15層の調査

1　出土状況等

9層～15層については，基本的に9層・10層・13層・15層がおもな包含層であって，その間に12層・14層・16層の白色砂層である無遺物層が堆積していた。古手の曽畑式土器が混入するなど，砂丘の移動にともなって混入の可能性もあるが，時期的には比較的短期間に形成された砂層であると思われる。無遺物層と遺物包含層が互層状態で堆積していた。これらの層は西側に傾斜しており，8層がこれを切るかたちで逆方向に堆積している。

第30図は，9層の出土状況と10～15層の出土状況である。10～15層については層位が異なるものの平面分布であるが，個体数が少ないため便宜上の処置である。9層では中央部付近でまとまっており，それ以外の層では北東側によって出土している。遺構については検出できなかった。

2　遺　物

（1）土器

10～15層出土土器

Ⅰ類土器

Ⅰa類は181・183・186～188・190・192

Ⅰb類は178・179・184・189

178・179・181・182が10層，180が13層，184～194が15層出土の土器である。178・179・183・184・185が口縁部で，それ以外が胴部である。15層出土の土器については滑石を混入した土器が目立つ。

9層出土土器

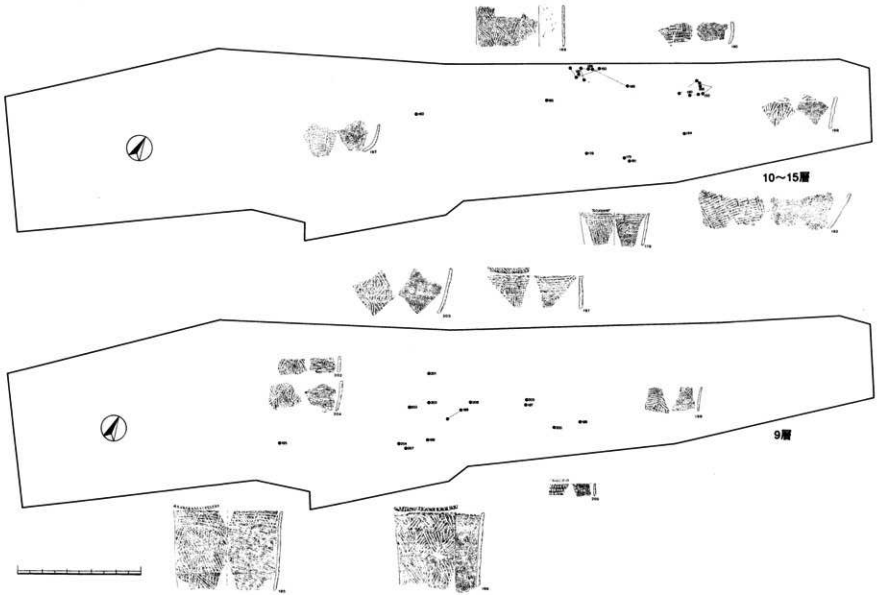
Ⅰ類土器

Ⅰa類は198・200

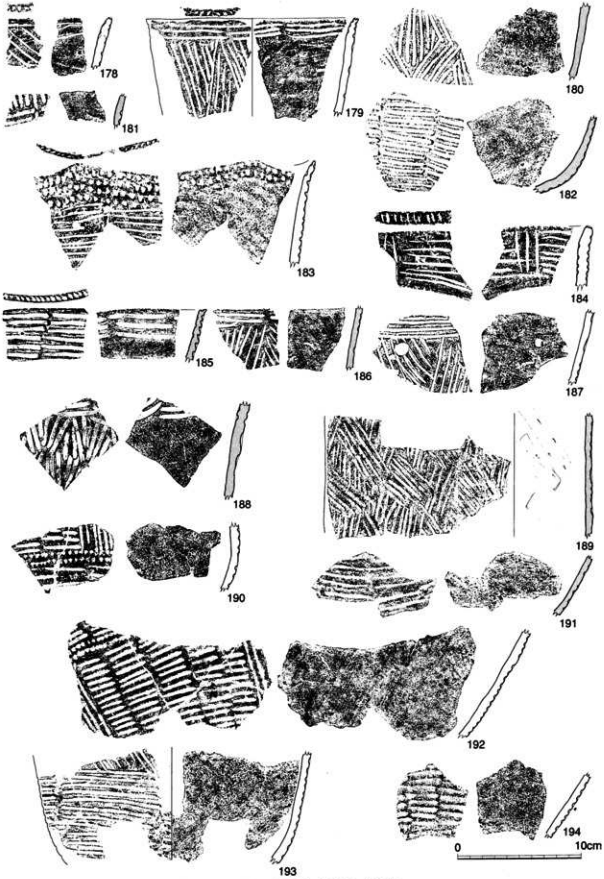
Ⅰb類は195・197・199

Ⅰc類は196

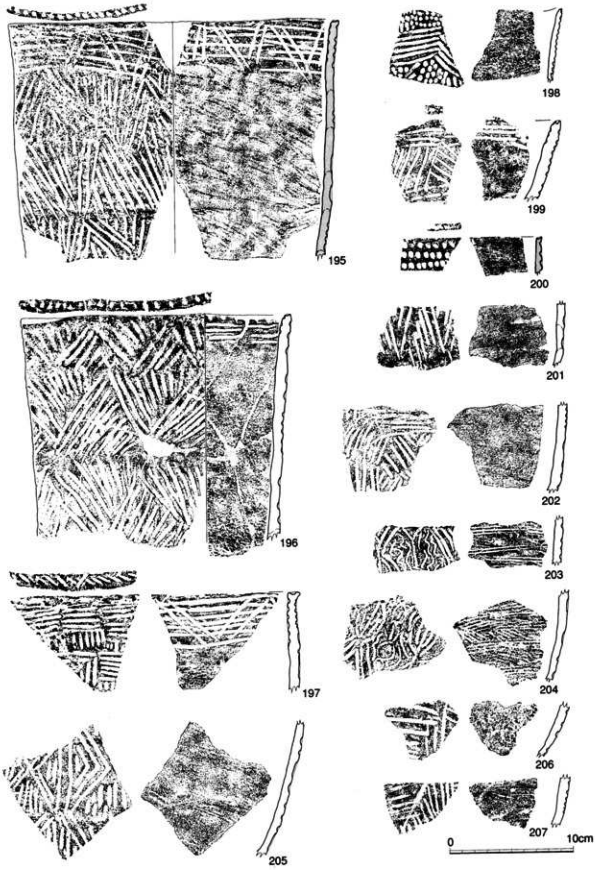
195・196・197・198・199・200は口縁部で，198・200は古手のものである。すでに割り付けの横区画線は失われている。202・203・204は曲線文と組み合わされており，曲線文によって空間充填されたものもある。



第30図　9～15層出土土器出土状況



第31図　10～15層出土曽畑式土器



第32図　9層出土曽畑式土器

(2) 石　器

9層から15層にかけて，打製石斧2点，磨石・敲石2点，石皿1点，剥片石器6点，礫石器4点の合計15点の石器が出土した。石器は，平成6年度調査区及びB地点からの出土分布であるが，器種の違いによる分布の偏りは見られないものの，大部分は15層からの出土である。

石器の石材は，島内で産出する砂石，頁岩，粘板岩，花崗岩，ホルンフェルスが用いられ，黒曜石等の石材は使用されていない。

石器の構成をみると，他の層からの出土と同じく，調理加工具，耕作用具，採集用具のみであり，狩猟用具は出土していない。

①打製石斧（第33図208～209）

2点出土した。208は，裏面に自然面を残す扁平な打製石斧である。両面方向に敲打調整が施される。刃部形態は，片刃に近い両刃である。基部は欠損している。209は，裏面に風化面を残す打製石斧である。両面敲打による側縁部に調整が認められる。刃部は，欠損している。

②磨石・敲石（第33図210～211）

2点出土した。210は，表面にわずかに磨痕が観察できる。集石遺構からの出土で，煤が付着する。磨石である。211は，乳棒状の敲石であり，両端に敲打痕が残る。

③石　皿（第33図212）

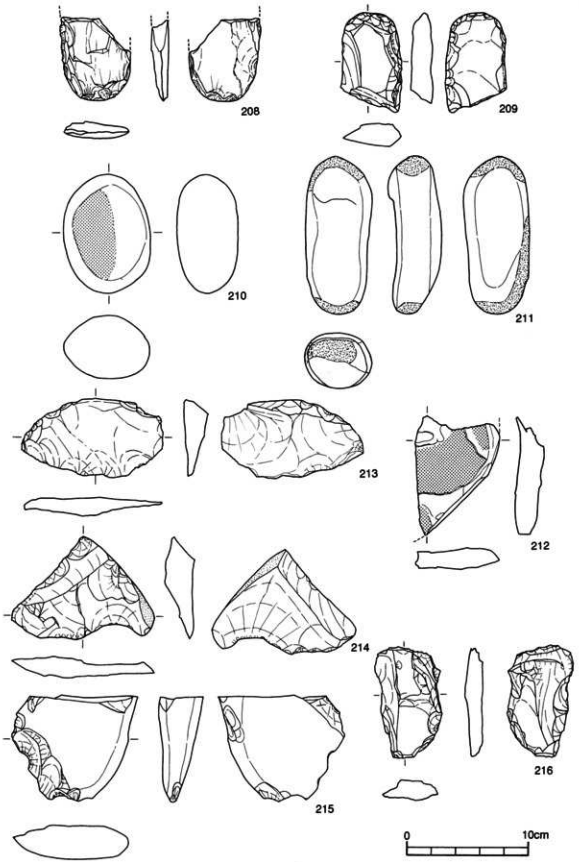
1点出土した。磨面が凹んでいるが，磨滅が均一でなく，長期使用に起因するものではない。破損品である。

④剥片石器（第33図213～214，第34図219～222）

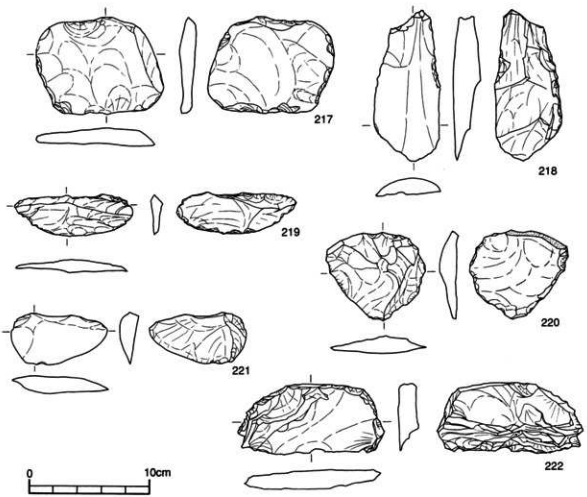
6点出土した。213は，横長剥片を刃器としたもので，調整剥離は確認できない。214は，一部に自然面を残す剥片を素材に，鋭利な側縁部を刃部とする。調整剥離は見られないが，使用痕が顕著である。219は，縦長剥片を横位に使用したもので，刃部に使用痕又は調整痕が確認できる。220は，上部側縁部に自然面を残す剥片であり，縁辺部を刃部とする。221は，片面に自然面を残す剥片を刃器としたもので，使用痕が確認できる。222は，破砕的に取り出された剥片を横位に使用したもので，刃部は自然剥離面を充てている。

⑤礫石器（第33図215～216，第34図217～218）

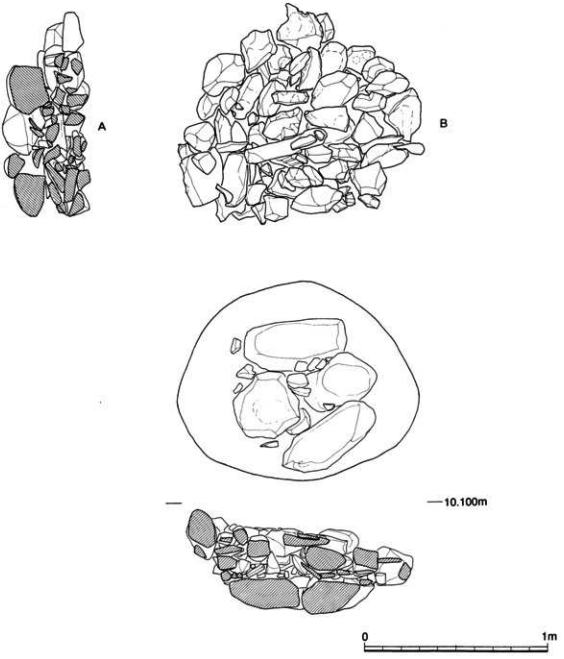
4点出土した。215は，扁平な自然礫を分割したものの一端を，裏面から剥離調整を行い，刃部を作出したものである。216は，破砕礫を素材に，鋭利な側辺を刃部として利用したものである。217は，極扁平な自然礫の側縁部を刃部としたものであり，使用痕が観察できる。218は，自然礫の表面を剥ぎ取り，先端部及び側辺を刃部としたもので，使用痕が残る。



第33図　9～15層出土石器（1）



第34図　9～15層出土石器（2）



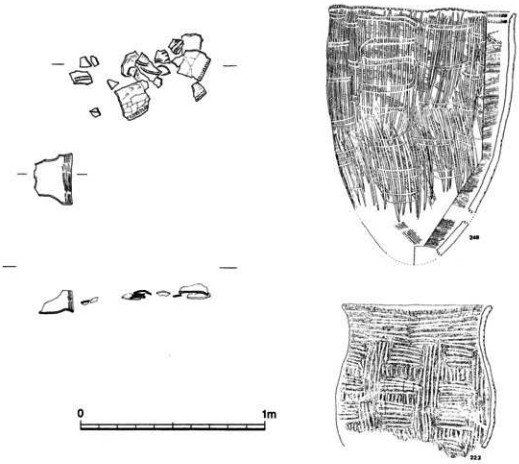
第35図　8層検出．3号集石

第3節　8層の調査

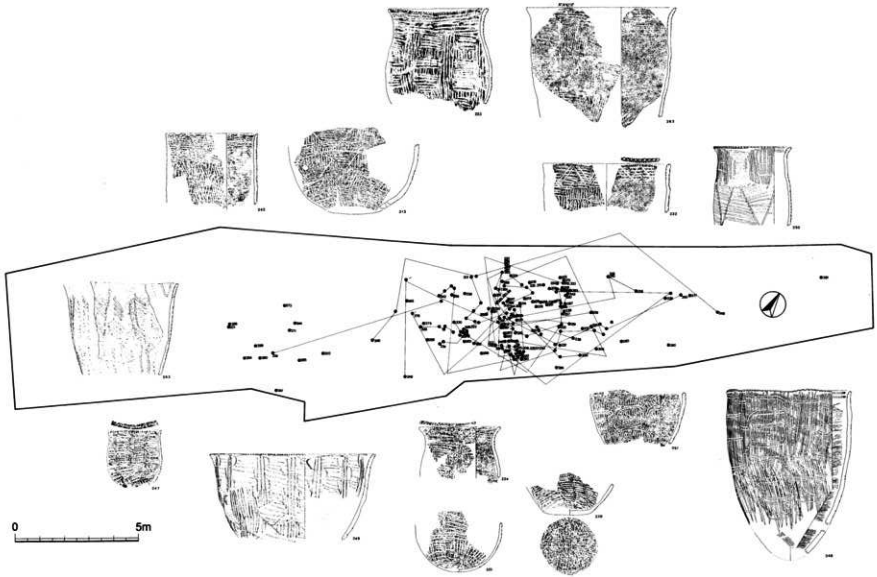
1　遺構等

8層については，暗灰色砂層で10～30cmの堆積をなし，東側へ傾斜している。縄文時代前期としては，最も多量に遺物が出土した。北東部分で3号集石を検出した（第35図）。110cm × 130cmの楕円形の深さ約50cmに掘り込み，その底面に，4個の人頭大の礫をおき，そのうえに径20cm前後の礫が積まれている。各石はほとんどがひび割れや赤化しており，表面に煤の付着したものが多い。粘板岩と花崗岩の円礫によってなる。埋土はカーボンのため黒色である。

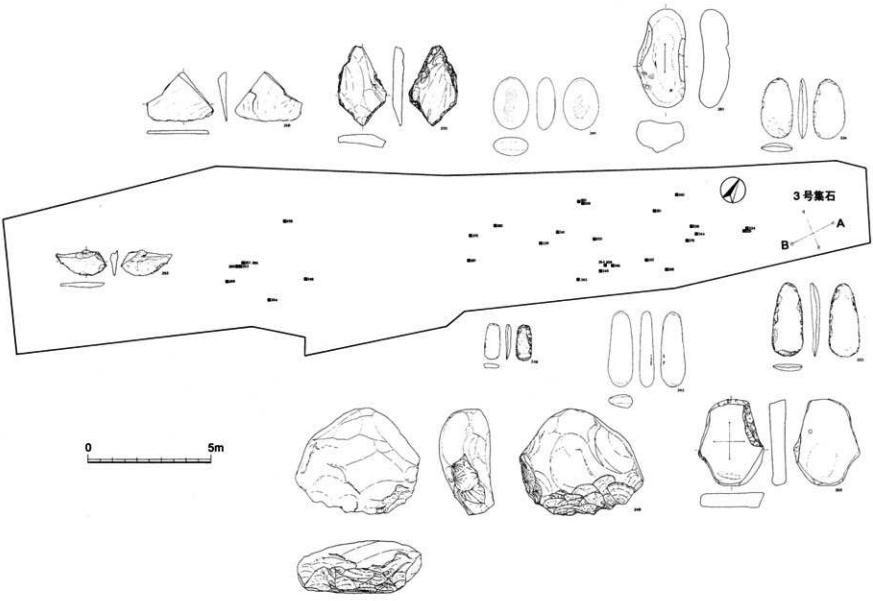
第36図は，223・248の出土状況である（図版17）。共伴と判断される。第37図は8層出土土器の土器出土状況である。おおきな破片と，接合資料が多く，時期的に限定されると考えられる。第38図は石器の出土状況である。土器は調査区の中央部に出土している。



第36図　曽畑式土器（223・248）出土状況



第37図　8層出土土器出土状況



第38図　8層出土石器出土状況

2 遺 物

(1) 土 器

Ⅰ類土器

Ⅰb類は223～247・249～332である。

223～250・254～267が口縁部を含む破片で，251～253・268～323は胴部の破片，324～332は底部の破片である。頸部が締まり胴部が広がる器形（223・224・250）が見られるようになる。244～247・250などの小型鉢も目立ってくる。主文様は三角文でなく，平行線文がふえる。243は縦横方向の区画に，矢羽状の短沈線を充填する。施文具は曽畑式土器特有のものである。249は，口縁部文様帯に，曲線文を上書きするもので，内器面にも同様の施文をおこなう。その下位にX字状の分割線に平行線を充填する。器面はよくナデられている。249・250は口縁部文様帯が，平行線をS字状曲線で切るもので，248との関連性が指摘できる。251・252は曲線文を施す。明確な短沈線が見られなくなり，浅い沈線や幅の狭い沈線を施すものが多い。

Ⅱ類土器 248

Ⅱ類は，17層でも述べたように，出土状況からはⅠ類と共伴している可能性が極めて高い。248は，口縁部に刻目を施し，貝殻条痕の上にヘラ状の工具の往復運動により縦方向の沈線を施した上に2本単位で曲線文を描くものである。内器面は，口縁部に刺突文を2段入れ，貝殻条痕で調整してある。17層で出土した105からの系譜は248に追え，またその影響が232・249・250にあると考えると，曽畑式土器と併行関係にあったとも判断できる。

(2) 石 器

8層からは，打製石斧5点，磨石・敲石11点，石核1点，凹石1点，砥石1点，石皿1点，剥片石器8点，礫石器10点の合計38点の石器が出土した。石器は，前期相当層の調査が実施できなかったA地点及び遺物の出土が見られなかったC地点を除き，調査区のほぼ全域に分布するが，器種の違いによる分布の偏りは見られない。

石器の石材は，島内で産出する砂石，頁岩，粘板岩，花崗岩，ホルンフェルスが用いられ，黒曜石等の石材は持ち込まれていない。

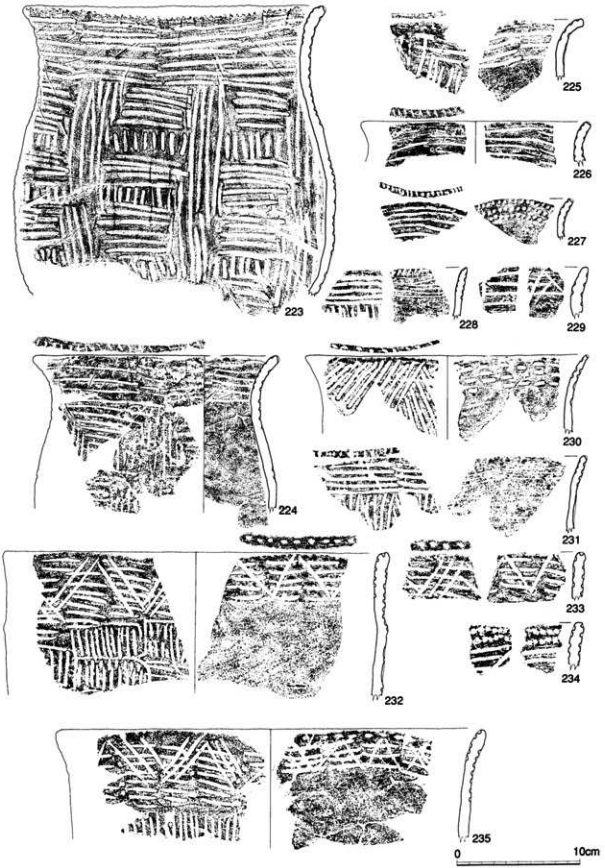
石器の構成をみると，17層と同様の構成を成すが，局部磨製石斧の出土はみられない。

①打製石斧（第49図333～337）

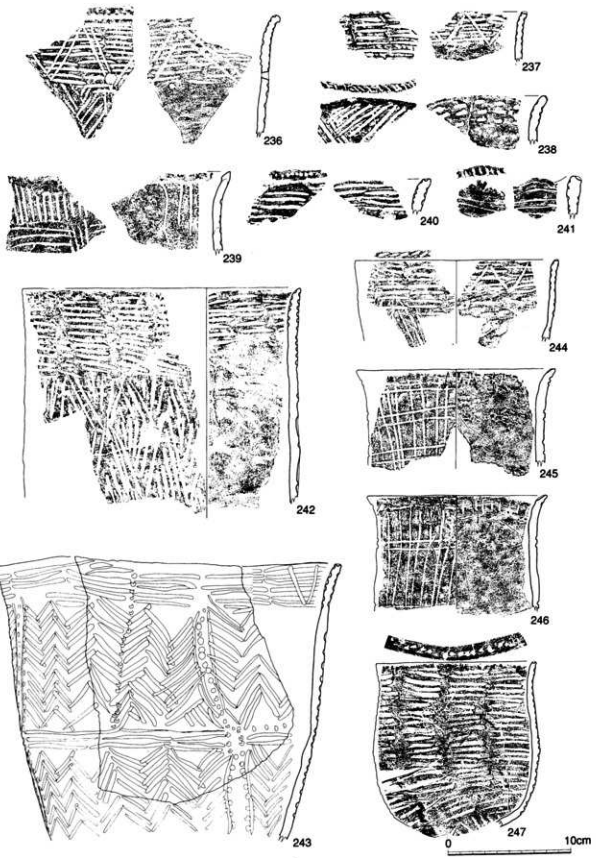
5点出土した。333～336は，円礫の表面を剥離して取り出した縦長の剥片を素材とした石斧である。刃部からの側縁部にかけて，敲打による細かな調整を施す。335，336は，小型の石斧であり，特殊な用途が考えられる。4点ともに，刃部形態は半円に近い形状を呈する。337は，節理面で剥離した石材の素材をそのまま石斧としたものであり，形状的に石斧として位置付けた。刃部相当部分に若干使用痕が観察できる。

②磨石・敲石（第49図338～340，第50図341～348）

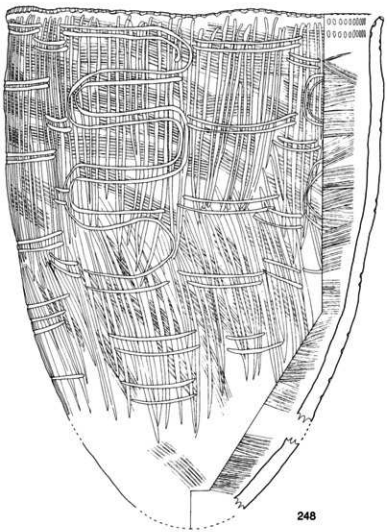
11点出土した。338～341は，磨石である。いずれも自然円礫をそのまま使用したもので，340には，裏面全体に朱が観察できる。一部破損する。342は，磨石・敲石の両機能を持つも

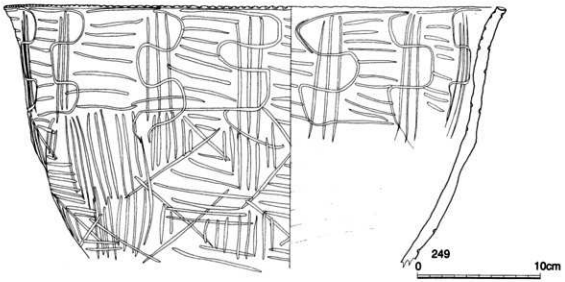


第39図　8層出土曽畑式土器（1）

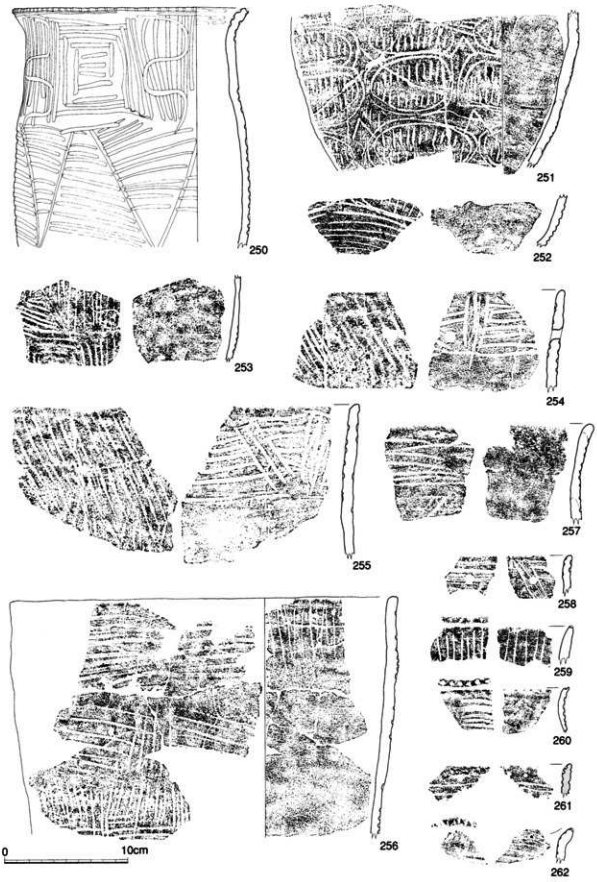


第40図　8層出土曽畑式土器（2）

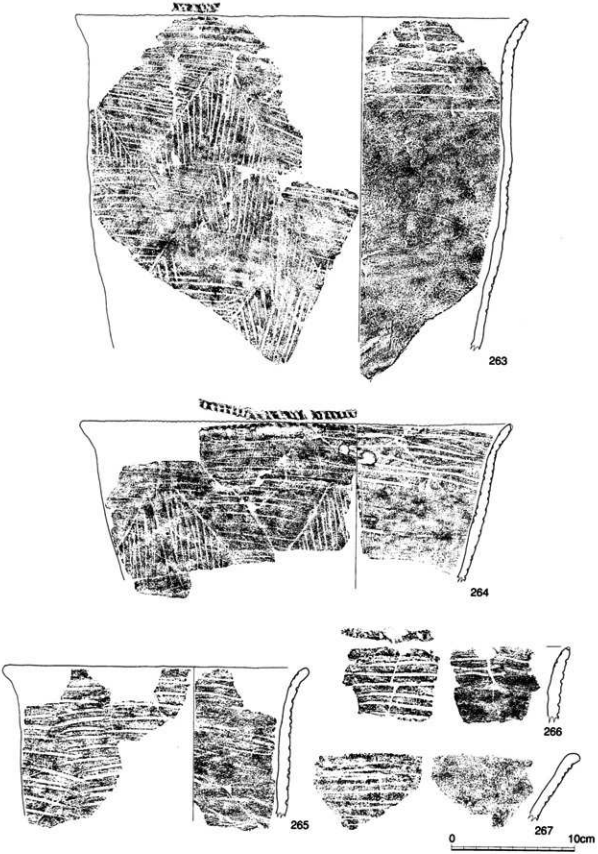




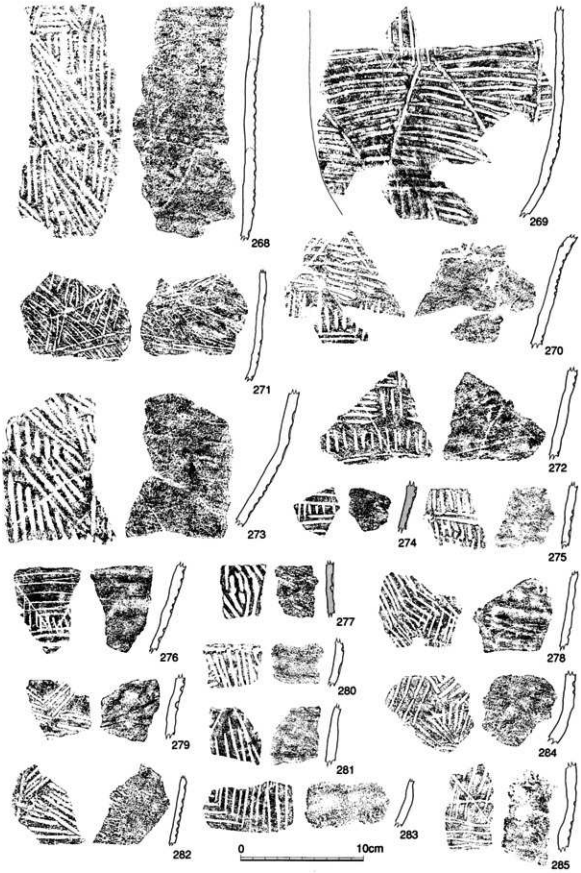
第41図　8層出土曽畑式土器（3）



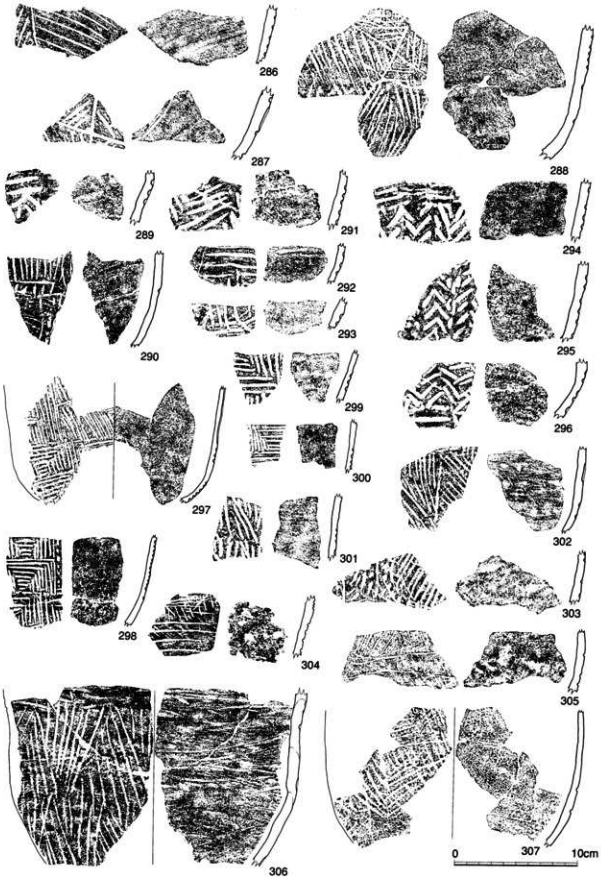
第42図　8層出土曽畑式土器（4）



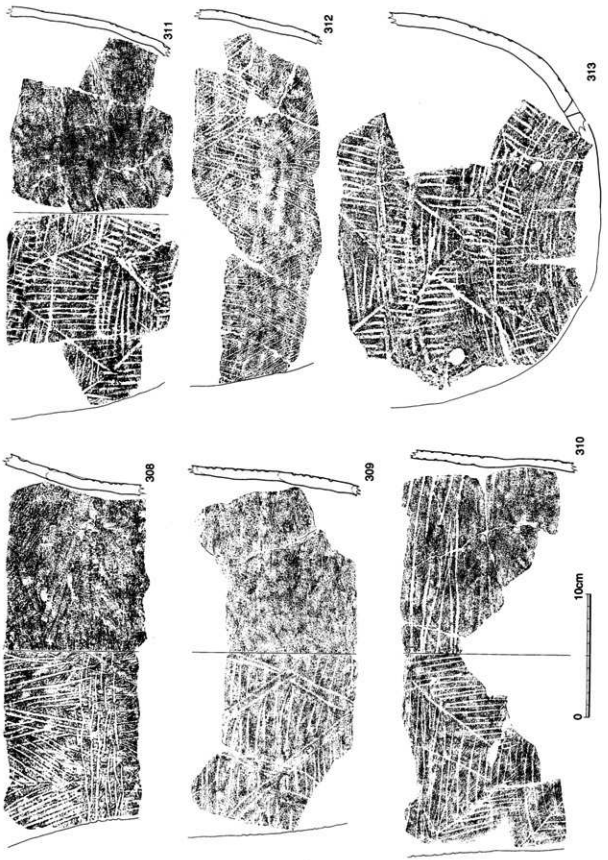
第43図　8層出土曽畑式土器（5）



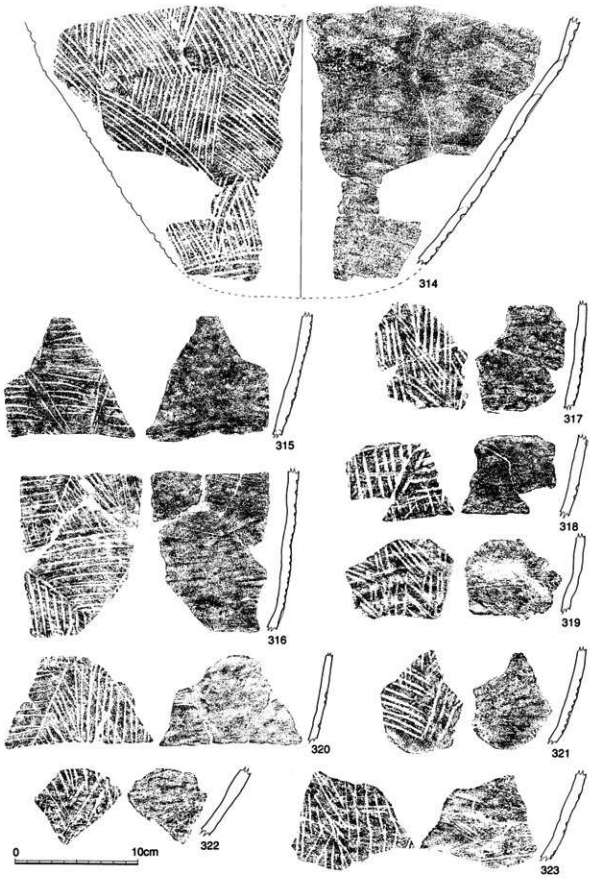
第44図　8層出土曽畑式土器（6）



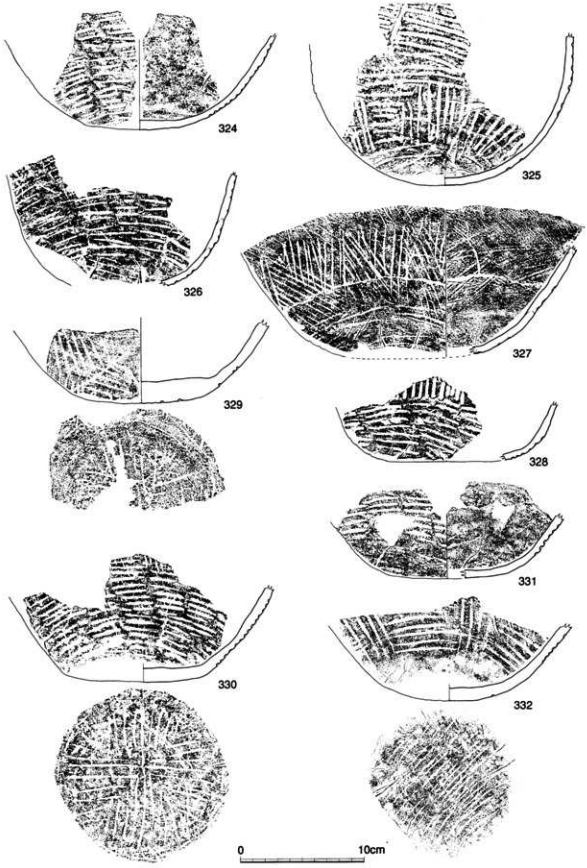
第45図　8層出土曽畑式土器（7）



第46図　8層出土曽畑式土器（8）



第47図　8層出土曽畑式土器（9）



第48図　8層出土曽畑式土器（10）

のである。敲打面は敲打痕は，明瞭に観察される。343～348，366～368は，敲石である。343～345は，棒状の敲石で，先端部にわずかに敲打痕や，敲打による擦痕が観察できる。346は，側縁部に擦痕が観察できるが，敲打痕は不明瞭である。347は，小型，扁平な敲石である。両端に敲打による破損が見られる。側縁部にも敲打痕が残る。348は，敲打痕が顕著である。破損しているが，使用によるものか判断できない。

③石　核（第48図349）

1点出土した。約12kgの重量を測る砂岩製の石核である。固定した一面を打面とし，2カ所において数次に渡って剥離を行っている。観察できるだけで，10回以上の剥離を行っているものと考えられる。

④凹　石（第49図350）

1点出土した。3カ所の凹みを持ち，最も深い部分で約5㎜を測る。

⑤砥　石（第49図351）

1点出土した。中央部に凹みを持ち，石皿状の形状を持つが，磨痕が方向性を持つこと，側面にも磨痕が観察できることから，砥石として位置付けた。全体に煤が付着する。

⑥石　皿（第49図352）

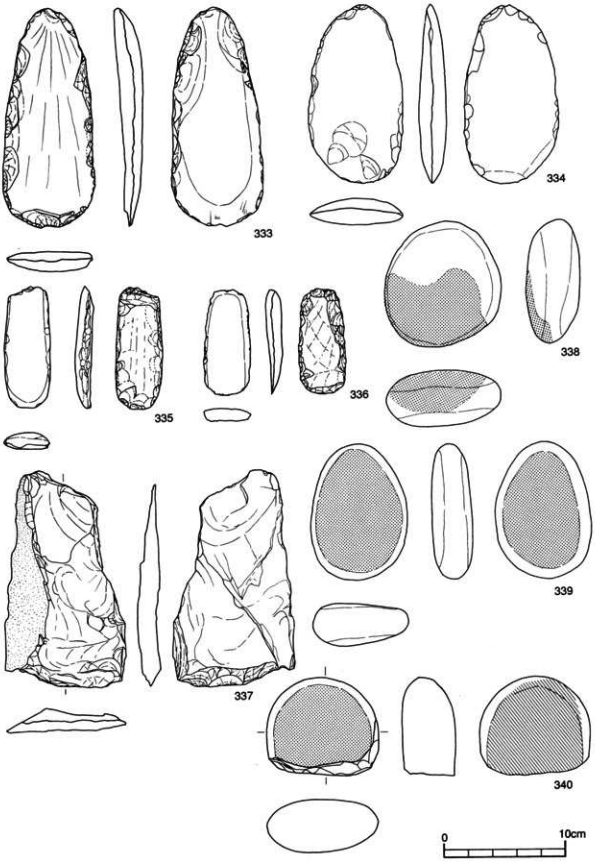
1点出土した。一面だけを磨面とし，側端部との高低差から，数㎜程度の磨滅があるものと考えられる。磨面の反対面に煤が付着する。

⑦剥片石器（第49図353～358，第50図359～360）

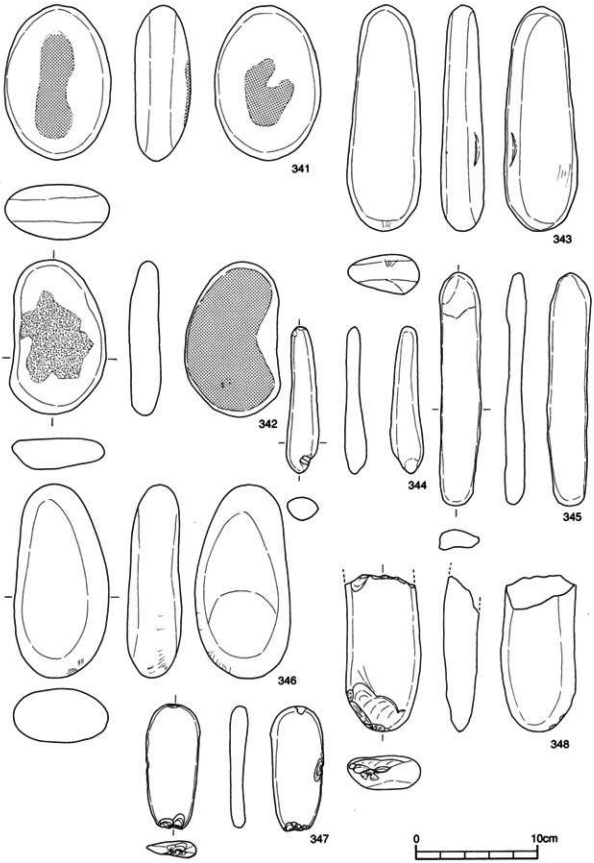
8点出土した。353は，翼状の剥片を横位に用い，長辺部を刃部とする。使用痕が残る。354～357，359～360は，自然面を残す剥片を素材とし，鋭利な側縁部を刃部としている。刃部作出のための調整は無い。358は，節理面で剥離した大型剥片をそのまま用いている。使用痕が明瞭。

⑧礫石器（第50図361～368，第51図369～370）

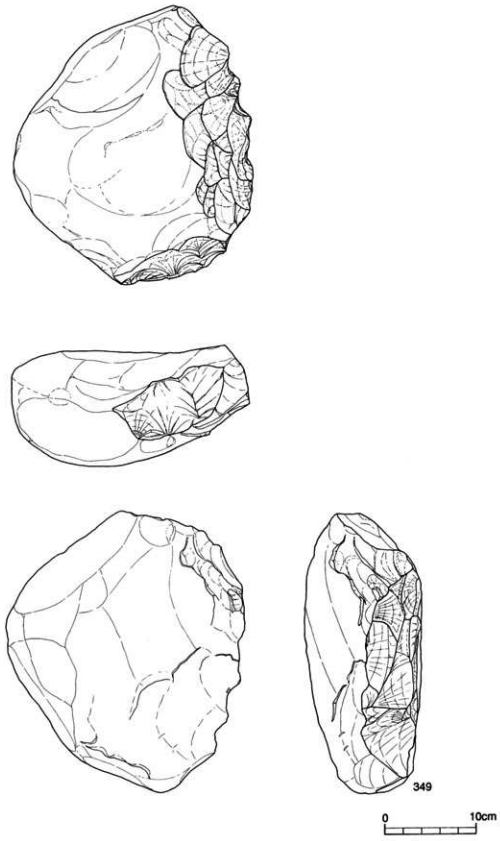
10点出土した。361は，破砕礫の鋭利な側縁部を使用したものと見られる。362は，自然面を残す，第1次剥離による剥片である。363は，三角形状の剥片の一辺を刃部としている。使用痕が残ることから，小型石斧的使用が推定される。364～365は，不定形に分割した礫片を素材に，側縁部を刃部とする。366～367は，自然礫に不規則な一次剥離を施し，厚手の刃部を形成する。368は，側縁中央部及び先端部に剥離が施されるが，刃部形成のための剥離か，敲石の敲打によるものか明確に判断されないが，ここでは礫石器に位置付けた。369～370は，大型礫石器である。自然礫から大きく剥離した剥片を素材とする。370は，2方向から一時剥離を行うが，実際の刃部は，礫からの剥離で生じた，鋭利な側縁部である。371は，自然礫から取り出した剥片の長辺部に，簡単な剥離調整を施して刃部としている。



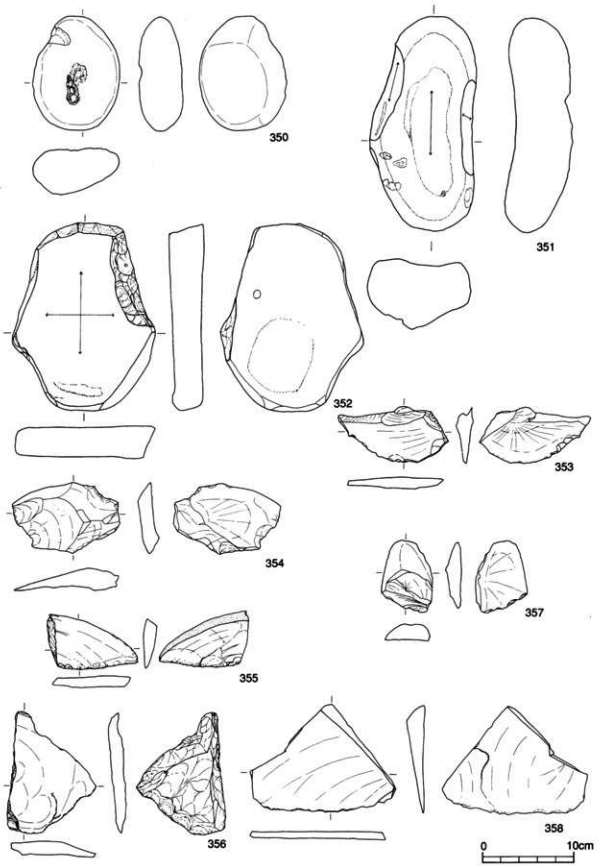
第49図　8層出土石器（1）



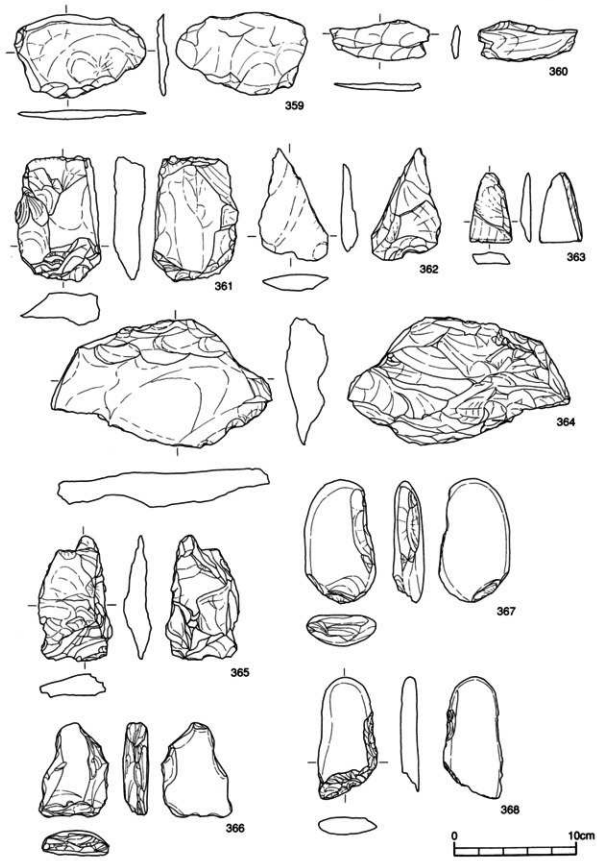
第50図　8層出土石器（2）



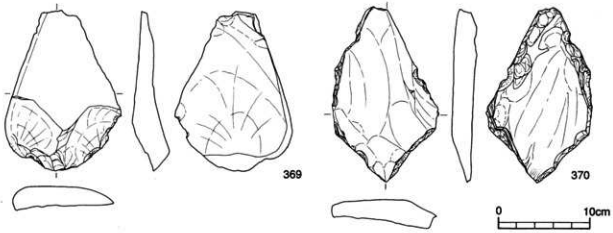
第51図　8層出土石器（3）



第52図　8層出土石器（4）



第53図　8層出土石器（5）



第54図　8層出土石器（6）

第4節　6層の調査

1　出土状況等

5層より色調が明るいが黄褐色砂層である。遺物量は少ない。

2　遺　物

(1) 土　器

出土した土器は，Ⅰb類（372・373）とⅠc類（371）である。371は，三角集線文で口縁部から胴部上半まで3列あり，その下が縦横の平行線文となっている。372は平行線文の下に，見かけ上は四角形だがオリジナルは三角形文を意識した文様を四列底部から上に順を追って施文している。371・372ともに内面に条痕を残す。374は縦の沈線に曲線文を上書きするものである。375は底部である。

(2) 石　器

6層及び7層から，敲石2点，磨石1点，石皿1点の合計4点が出土したが，出土量を考えると5層もしくは8層からの入り込みの可能性がある。これは，遺跡が砂丘に立地していることから，前後の層における遺物の移動が十分考えられるためである。

①敲　石（第54図376～377）

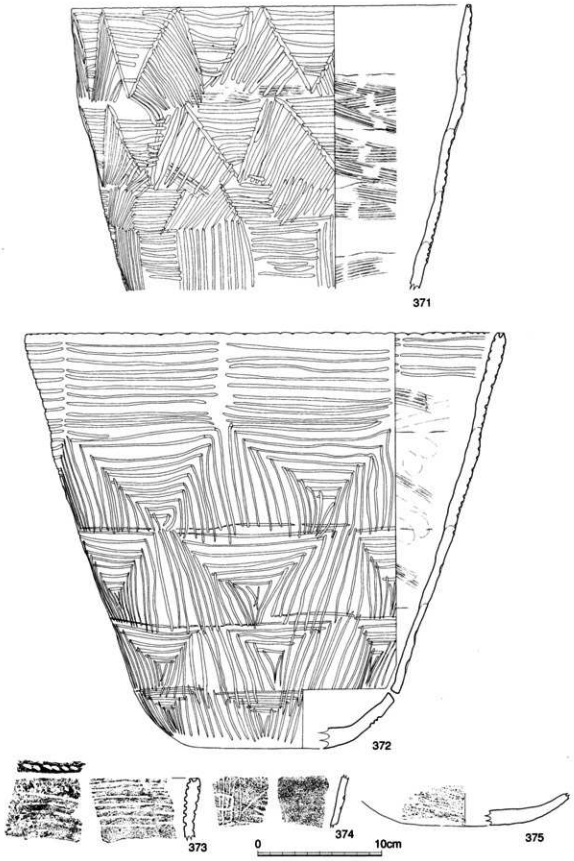
376は，敲石の破損品と位置付けたが，礫石器の可能性もある。377は，両端に敲打痕が見られるが，特に一端は，敲打による破損が激しい。

②磨　石（第54図378）

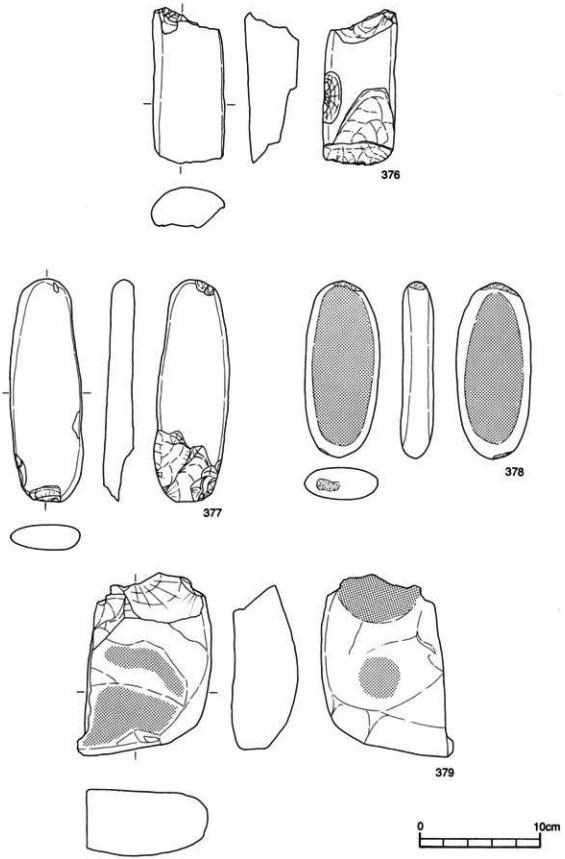
378は，長円形の自然礫を素材とし，両面を磨面とする。先端部には若干敲打痕が残る。

③石　皿（第54図379）

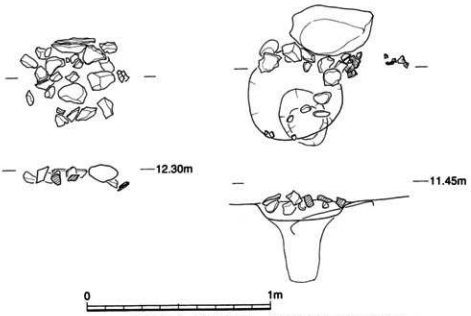
379は，石皿である。磨滅の状態の観察から，破損品であることが推定できる。



第55図　6層出土曽畑式土器



第56図　6～7層出土石器



第57図　5層検出　4号集石及び1号配石

第5節　5層の調査

1　遺構等（第57図～第59図）

茶褐色の砂層で，約30cmの堆積がある。一部撹乱されている。東側にかたよって遺物が出土した。4号集石は，47cm × 60cmの円形に，赤化や破砕等から焼けたと考えられる石が集中する。掘り込みは集石除去後の状況で，顕著にみられなかった。1号配石は28cm × 48cmの礫の北側に，熱破砕した礫が並ぶ。径50cmで，深さ45cmの土坑があり，その北側に石が配してある。404は風化が激しく，周辺の砂が赤化していたことから，「火」の使用が考えられる。煮沸をおこなった可能性がある。

2　遺　物

（1）土　器

Ⅲ類土器　380～386

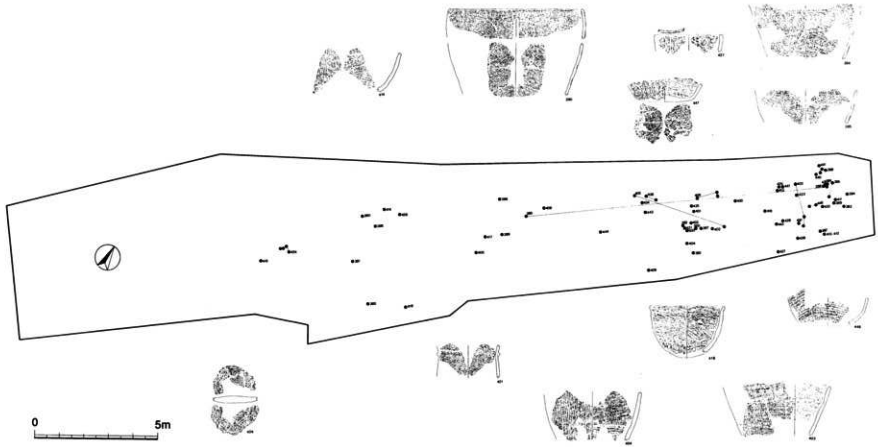
5層から主に出土している。380は口縁部が内湾する器形で，貝殻条痕の地文に貝殻による連続刺突文が施される。口縁部内面にも施文される。387は微隆の刻目突帯を部分で，Ⅲ類には一部分に突帯を伴うことが考えられる。388・389は貝殻でなく，棒状の施文具による連続刺突文で文様を施している。391は微隆の刻目突帯破片である。

Ⅳ類土器　392～424

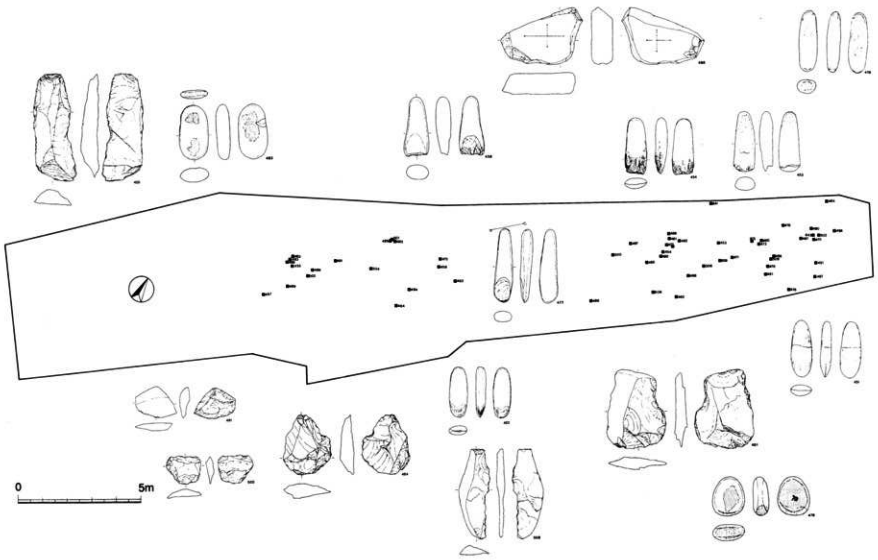
392～395が口縁部で，396～416が胴部，417・424が底部である。外器面には縦方向の条痕が意識化されており，392・394・403・405などは曽畑系沈線文土器のⅤ類と近しい。418・419が小型鉢で，420～423は頸部がしまる器形のものである。420・421は頸部に突帯がまかれる。

Ⅴ類土器　425～450

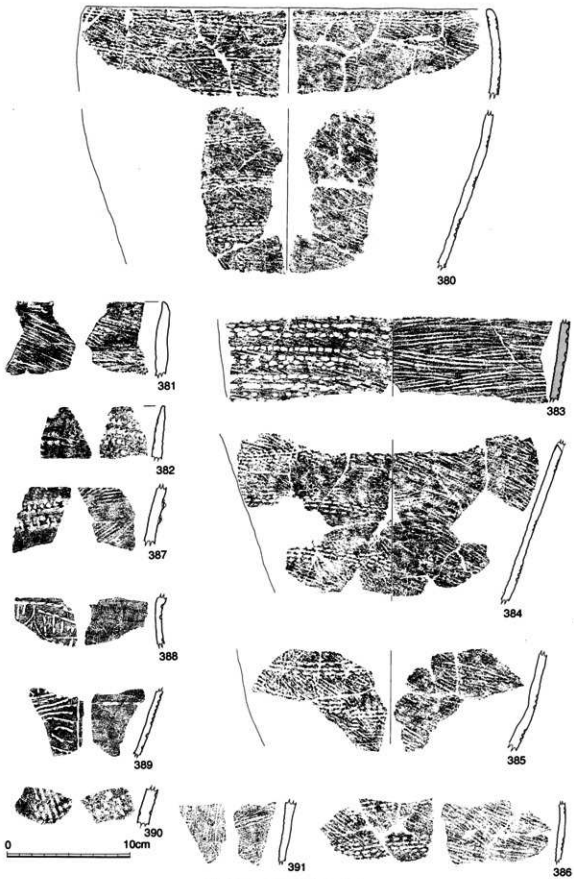
425～433は口縁部，434～444は胴部，445～450は底部である。縦方向の沈線文が主体である。427は口縁端部に沈線を施している。431・433・434・446は曽畑式に近い。



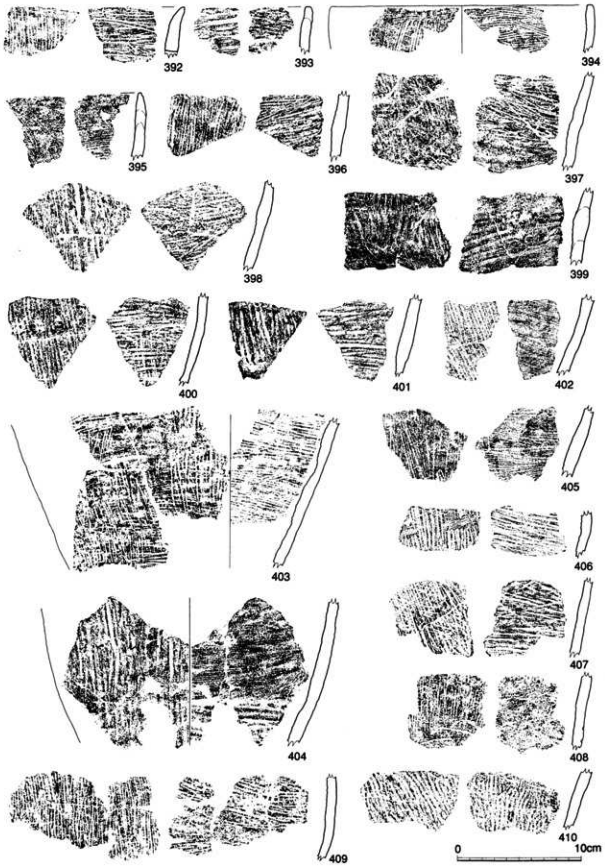
第58図　5層出土土器出土状況



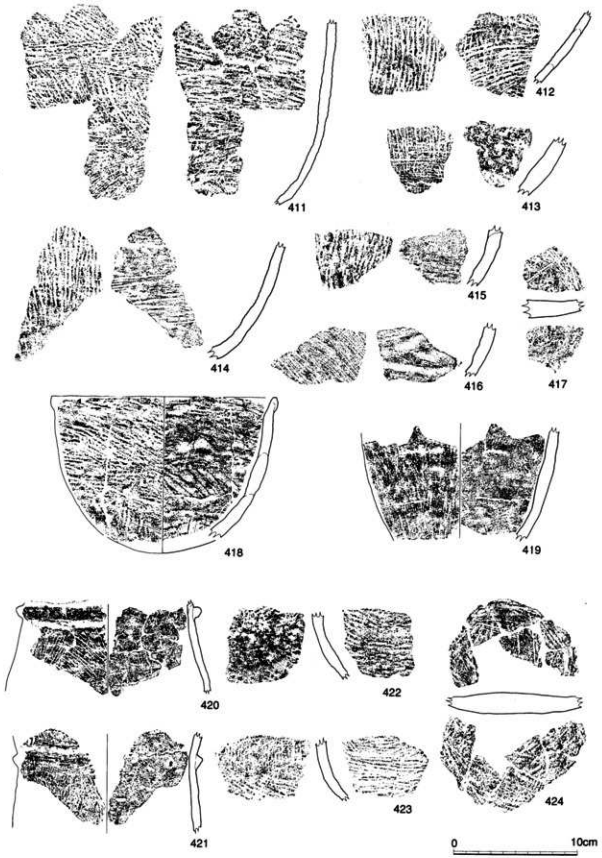
第59図　5層出土石器出土状況



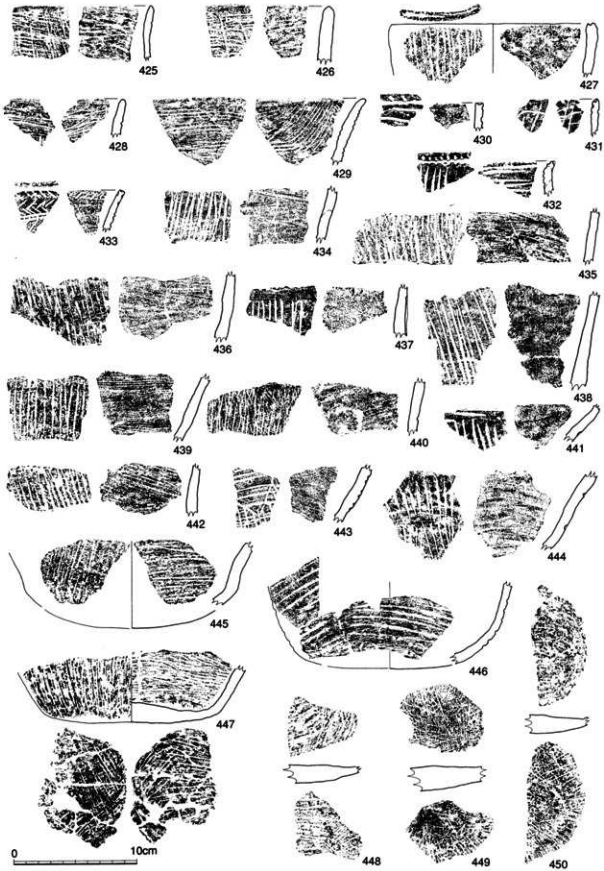
第60図　5層深浦式土器



第61図　5層条痕文土器（1）



第62図　5層条痕文土器（2）



第63図　5層曽畑系土器

(2) 石器

5層からは，磨製石斧1点，局部磨製石斧3点，打製石斧6点，打製石斧未完成品4点，磨石・敲石18点，石皿2点，剥片石器15点，礫石器10点の合計59点の石器が出土した。石器は，平成6年度調査区だけからの出土であり，他の地点では，相当する遺物包含層が残存しなかった。

石器の石材は，他の層と同様に，島内で産出する砂石，頁岩，粘板岩，花崗岩，ホルンフェルスが用いられ，黒曜石等の移入石材は使用されていない。

石器の構成も，他の層と同様の傾向を見せるが，未完成の打製石斧が出土していることが特徴的である。

①磨製石斧（第64図451）

1点出土した。451は，風化のため明確ではないが，器面，刃部ともに研磨が施された，扁平な石斧である。刃部にはわずかに使用痕が認められる。刃部形態は，両刃である。

②局部磨製石斧（第64図452～454）

3点出土した。452は，自然礫を素材に，刃部を研磨して作出している。縦方向にかすかに研磨痕が観察できる。刃部には，使用による刃こぼれが認められる。刃部形態は，両刃である。453は，自然礫を素材に基部と刃部に研磨が見られる。基部の研磨は縦方向に施され，多面体状を呈す。刃部は欠損し，刃部形態は不明だが，両刃に近いものと推定する。454は，自然礫を素材に，刃部に研磨を施している。わずかに縦方向の研磨痕が確認できる。刃部形態は両刃だが，大きく破損している。

③打製石斧（第64図455～457，第65図458～464）

完成品6点，未完成品4点の計10点が出土した。455，456は，一面に稜を持つ剥片を素材に，敲打による調整を施している。刃部に使用痕が観察される。457は，自然礫の表面を剥離して剥片とし，周囲を敲打による調整を行っている。風化による，敲打の状況は不明確だが，刃部に使用痕が確認できる。458は，自然礫の一端を敲打による調整を行って，刃部を作出している。459は，自然礫の表面を縦長に剥ぎ取った剥片を素材に，周辺に敲打調整を施している。460は，円礫の表面を薄く剥離した，扁平な剥片の側縁部に簡単な敲打調整を行っている。461は，表面に自然面を残す大型剥片に敲打調整を行っている。基部左側縁部に大きく，右側に小さく抉りが確認できる。462は，洋梨形の自然礫に大きく敲打による剥離を行って，刃部を形成しようとしている。463は，一面に稜を残す剥片に，わずかに抉りを入れて，成形を行おうとしている。464は，自然面を残す剥片を素材に，敲打調整を行っている。刃部に使用痕が確認できる。

④磨石・敲石（第65図465～467，第66図470～476，第67図477～484）

18点が出土した。465～466は，短冊状の礫の先端部を敲打面とした敲石である。467は，敲打による途中から破損している。470～474は，磨石である。470～471は，自然礫の平坦表面を磨面としている。472は使用により磨面が磨滅し，側縁部との境に稜線が確認できる。473は自然礫の一面を磨面とする。474は，集石遺構内からの出土で黒色化している。475

は，平坦面を磨面としている。476は，平坦面に磨痕，側縁部の一部に敲打痕が残る，磨石，敲石の両機能を持つものである。477～484は，敲石である。477は，棒状の自然礫を素材に，両端を敲打面とする。平坦部に敲打痕と見られる凹みがわずかに確認できる。479は，長円形の自然礫を素材に，両面及び側縁部のほぼ全部を使用している。両端に顕著な敲打痕が残る。480は，扁平な自然石を素材とし，その先端部を敲打面とするが，研磨を施し刃部を形成すると石斧になる形状を有する。481は，扁平な自然石を素材に，先端と側縁部の一部を敲打面とし，衝撃による剥離が観察できる。482は，隅丸方形状の扁平な自然石の側縁部を敲打面とする。483は，両面を敲打面とするが，敲打痕は，中心より先端に偏った位置に残る。484は，やや大きめの花崗岩礫の表面を敲打面とし，敲打痕が確認できる。

⑤石　皿（第67図485～486）

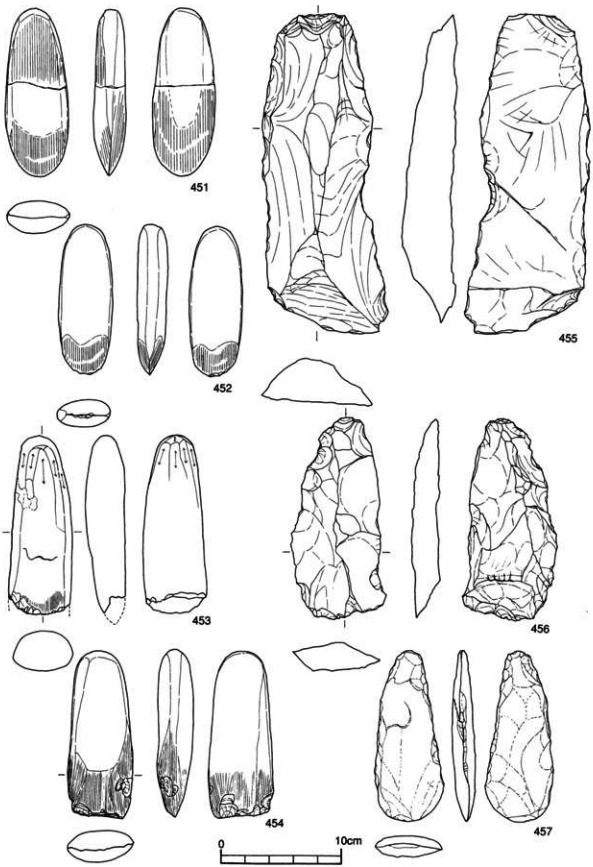
2点が出土した。485は，石皿の一部だが，若干赤色化し，加熱を受けた可能性がある。486は，両面に磨跡が見られる。形状的には，石皿の一部とも考えられるが，端部が磨滅していることから，本来の形であることが推定できる。

⑥剥片石器（第68図487～497，第69図498～499，505，509）

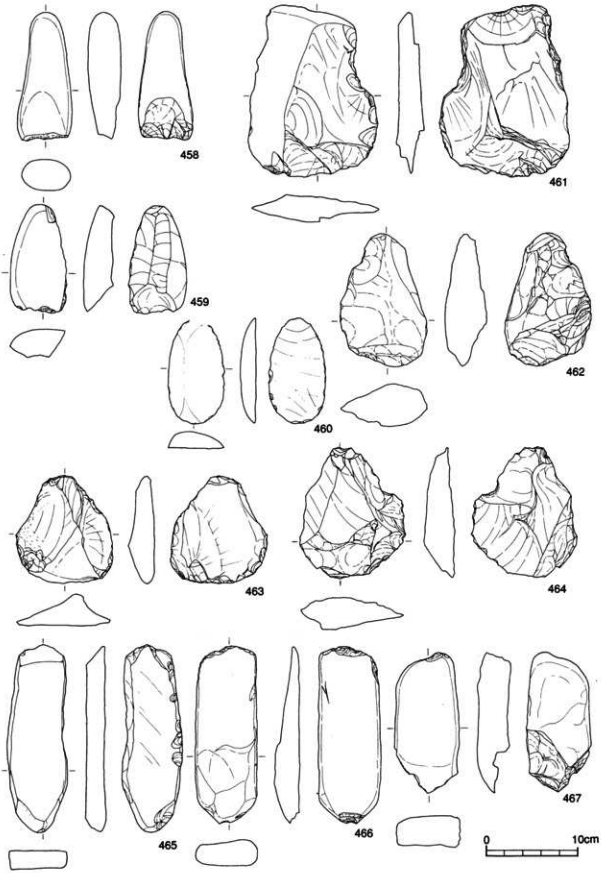
15点が出土した。487～492，496～498，509はいずれも円礫の表面を一回剥離して，扁平な剥片を取り出したものを素材とする。その為，片面は自然面が残る。487は，二つの側縁部に剥離による刃部作出を行う。488は，剥片を縦方向に用い，その一端に簡単な剥離を施して，刃部を形成している。489は，やや厚めの剥片を縦方向に用いるが，刃部作出のための剥離は見られない。490は，ほぼ円形の剥片の，周辺部を刃部としている。刃部形成のための剥離は無く，使用痕が残る。491，492共に，刃部の調整は無く，剥片の鋭利な部分をそのまま刃部としたものと推定する。496は，角張った礫の一面を剥離して素材とする。刃部をわずかに調整する。497は，剥片を縦方向にし，その側部に剥離調整を行って刃を作出している。498は，剥片の側縁部にわずかに刃部形成のための剥離が観察できる。509は，やや大型の剥片の両側縁部を刃部として用い，使用による大きな剥離が見られる。493～495，499，505は，薄目の剥片を素材とするが，自然面は残さない。493～495は，剥片を取り出すための技法に一定感は無いが，いずれも横長の剥片を素材とし，その長辺を刃部とする。499は，刃部作出の為の剥離が顕著に観察できる。505は，使用痕のある剥片である。

⑦礫石器（第66図468～469，第69図500～504，506，508）

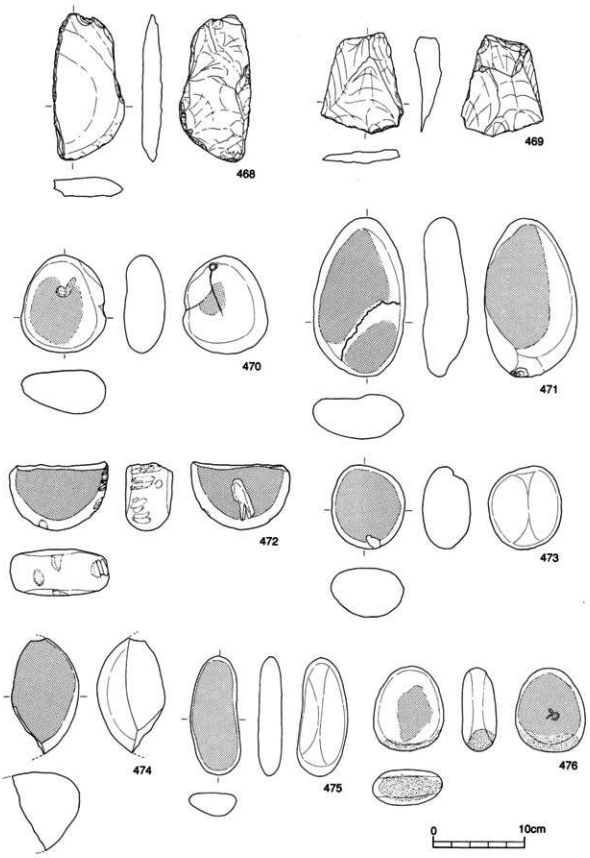
10点が出土した。468は，片面に自然面を残し，側縁部を刃部とするが，明瞭な刃部形成は確認されない。使用痕が残る。469は，厚手の剥片の先端部を刃部とするが，刃部作出の剥離か使用痕か判別できない。500は，自然礫をほぼ半分に折り，その切断面を刃部とする。501～502.504は，破砕礫の鋭利な端部を刃部として利用したものである。503は，大型の自然礫の一端を大きく剥離し，刃部を作出している。506は，自然礫を分割し，その一端に大きく剥離を行って刃部としている。507は，敲石からの転用と推定される。508は，鎌状を呈する剥片の片側側縁部をわずかに調整して，刃部とする。使用痕が残る。



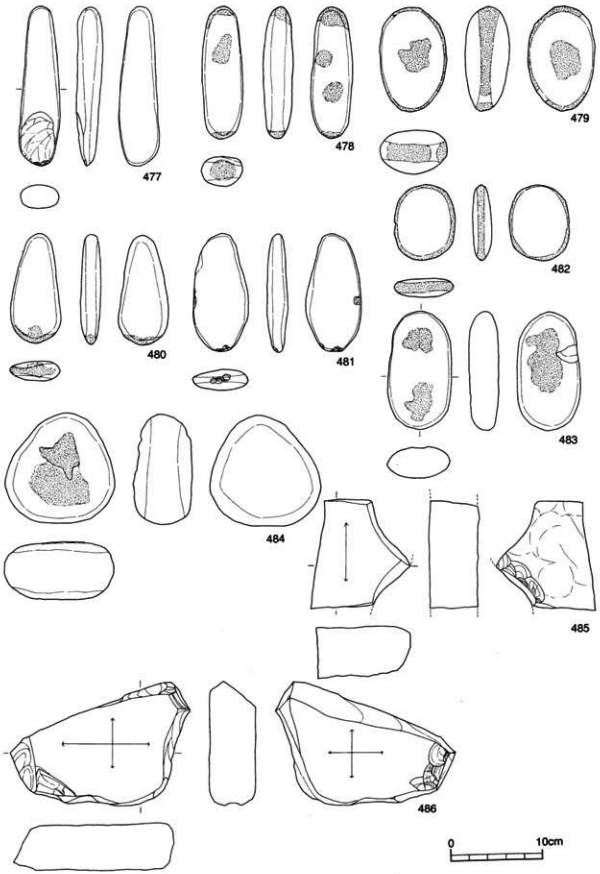
第64図　5層出土石器（1）



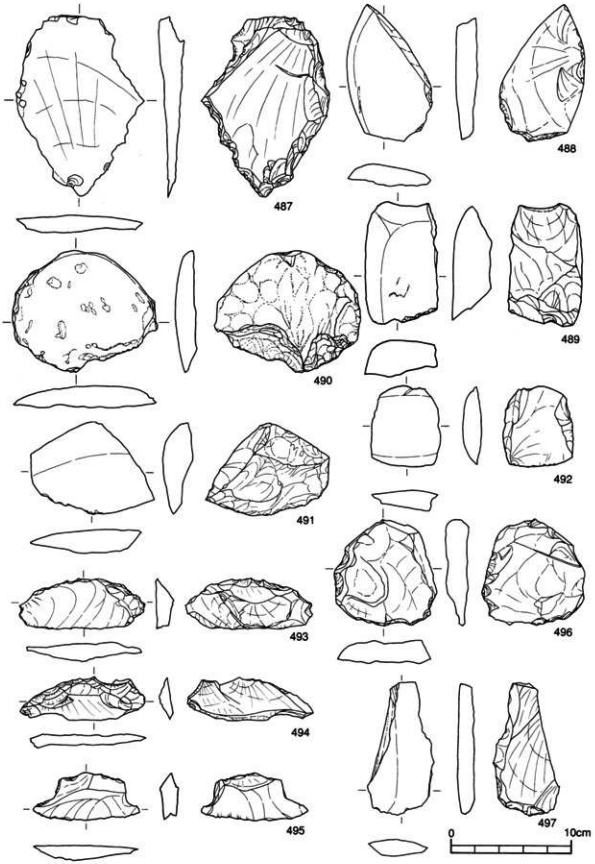
第65図　5層出土石器（2）



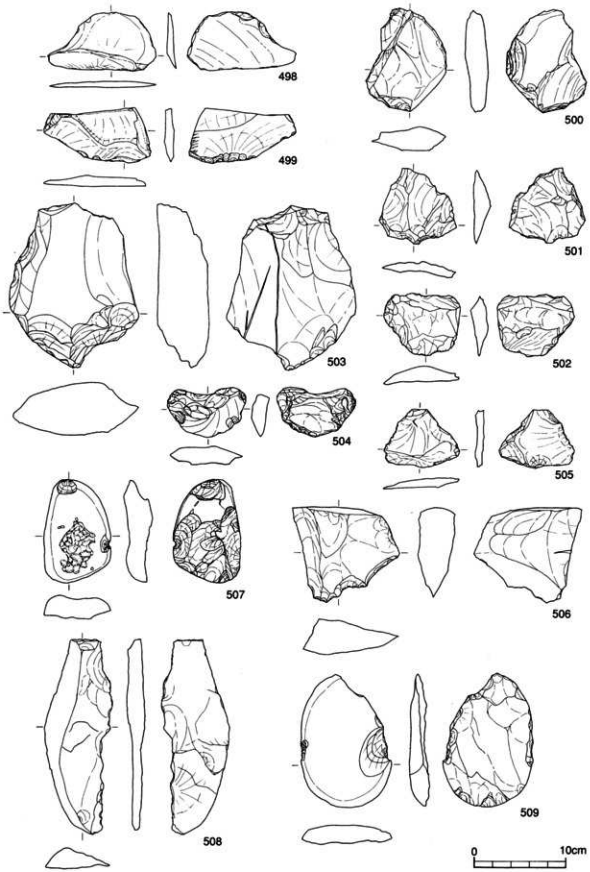
第66図　5層出土石器（3）



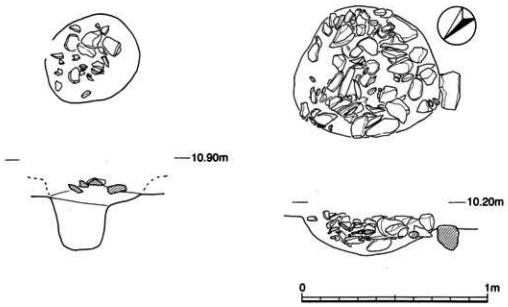
第67図　5層出土石器（4）



第68図　5層出土石器（5）



第69図　5層出土石器（6）



第70図　3層検出，5号集石・6号集石

第6節　3層の調査

1　遺構等（第70図～第72図）

茶褐色の砂層で，30～40cmの堆積の中に，大きな角礫が混入する。2基の集石が検出されている。遺物の出土状況は中央部東側に集中する傾向にある。上位から510・511などのⅥ類土器が，下位から563などのⅥ類土器が出土する。

5号集石は，3層の上層で検出したもので，2層からの掘り込みの可能性がある。径45cmの黒色の黒色砂の落ち込みの上に，赤化や破砕等から焼けたと考えられる礫が集中する。集石は土坑の上部にあるだけで，下部からは検出しなかった。土坑のさらに下位に径30cm・深さ25cmの円形の落ち込みを検出した。

6号集石は3層の下位の4層上面で検出した。72cm×82cmの楕円形で深さ15cmの皿形の掘り込みに，赤化や破砕等から焼けたと考えられる礫が上部から下部まで詰まっていた。埋土は黒色砂で，煤が混入しており，集石取り上げ時には，手が真っ黒になるほどである。

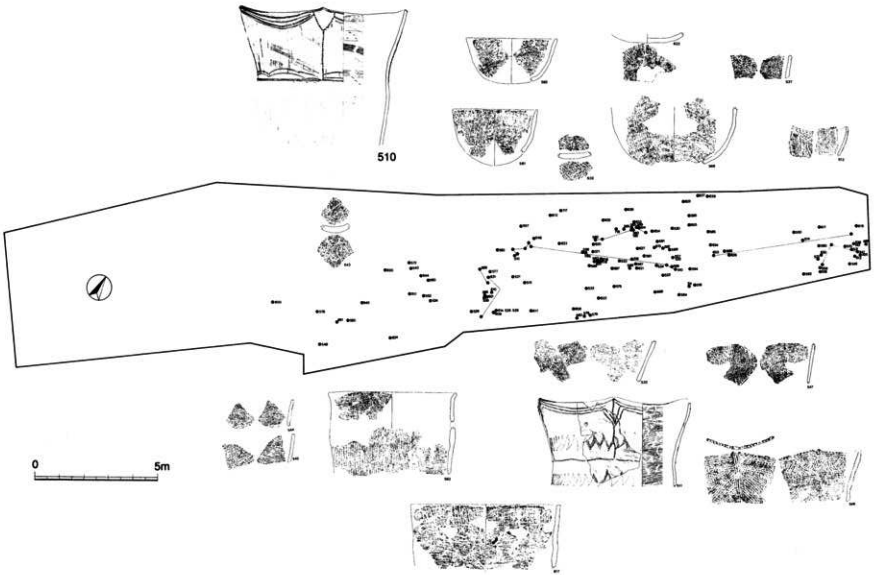
なおC地点の3層該当層については，場所と層位が異なり，512・526など出土土器の土器型式に差があり，時期差がある可能性がある。C地点においては出土量は少ない。

2　遺　物

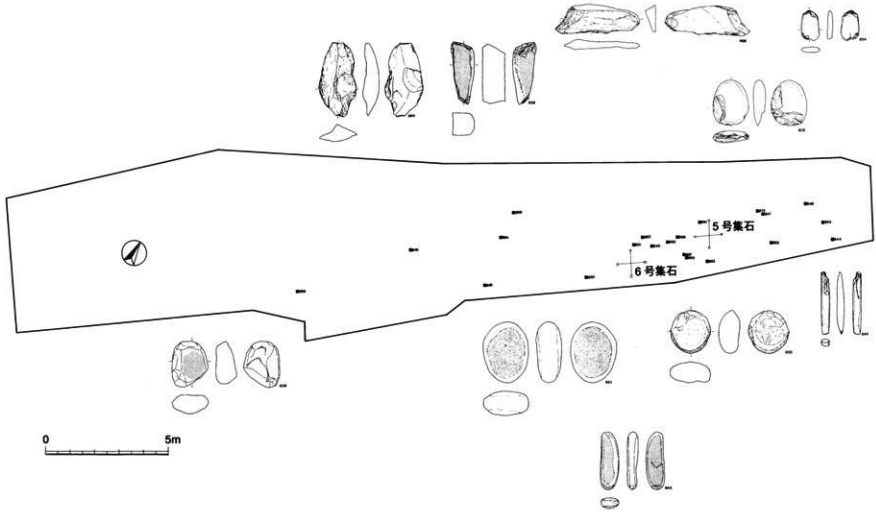
（1）土　器

Ⅵ類土器　510～562

510は，波状口縁で口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部に刻目を施し，口縁下に微隆の刻目突帯を縦横に貼付け，その突帯間に沈線と暗文風の研磨痕を縦方向に施す。焼成が堅緻である。



第71図　3層出土土器出土状況



第72図　3層出土石器出土状況

511は510と同様に，口縁部が内湾する波状口縁で，口縁端部に刻目を施し，口縁下に微隆の刻目突帯を縦横に貼付ける。突帯間には貝殻腹縁による相交弧文を施す。512は，口縁部はやや外反して立ち上がり，突帯と沈線により文様をなすが，刻目突帯の曲線が顕著である。513は波状口縁の波頂部の破片で，縦方向に突帯がのびる。514・520は突帯などはないが，色調と平滑な器面調整からⅥ類とした。526は，刻目突帯の上下に格子目状に沈線様に条痕を施す。543は底部であるが，この部分まで相交弧文が施されている。543までが相交弧文で，544～555が連続刺突文である。

Ⅳ類土器　563～616

563は，深鉢形土器の上半分が出土したが，脆弱で取り上げ時にかなり損壊してしまい，口縁部が接合できなくなってしまった。縦方向に条痕が施される。581からは小型鉢であると考えられる。

Ⅴ類土器　617～634

条痕の地文にヘラ状工具で縦方向の条痕をさらにおこなうもので，617は，内器面に同様の施文がされている。底部は632のように，曽畑式土器の影響が伺われる。

（2）　石器

4層からは，礫石器1点，磨石・敲石5点，すりきり1点，砥石1点，剥片石器1点の合計9点の石器が出土したが，その出土量から，前後の層からの入り込みと考えられる。

今回の調査で唯一すりきりが出土した。

①礫石器（第81図635）

1点出土した。635は，やや扁平な棒状礫を素材にしている。先端部を両方向に剥離することで刃部を作出している。他方にも剥離が見られる。敲石の破損品を転用したものと推定する。

②磨石・敲石（第81図636～640）

5点出土した。636は，平坦面を磨面に，側縁部を敲打面とした，磨石，敲石の両機能を備えたものである。637は，細長い自然礫の突端を敲打面とし，わずかに敲打痕が観察できる。638は，敲石が破損したもので，残存部に敲打痕が観察できる。639は，大型の棒状自然礫をそのまま敲石としたもので，先端部から側縁部にかけて敲打痕が残る。640も大型の棒状自然礫を素材にした敲石である。

③すりきり（第81図641）

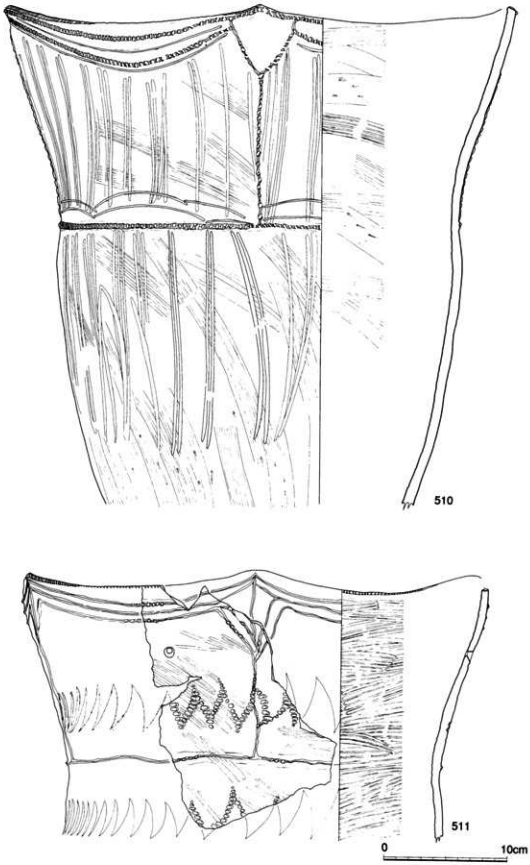
1点出土した。641は，摂理面で薄く剥がれた剥片を素材とし，摺り切り面は，平坦部両方向からの研磨が観察される。すりきりによって加工された遺物は，出土していない。

④砥　石（第81図642）

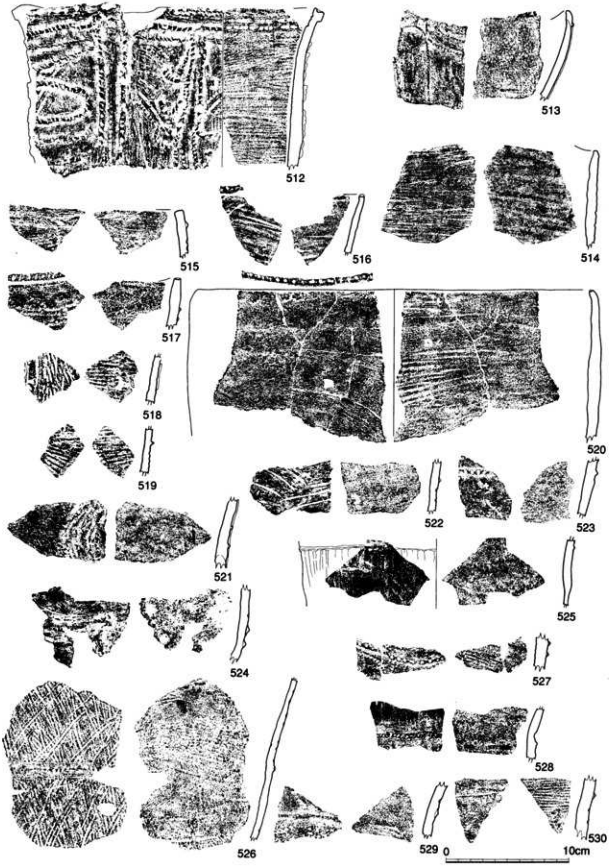
1点出土した。642は，砥石の残存部分である。研ぎによる擦痕は観察できないが，磨滅による平坦化が顕著なことから，砥石に位置付けた。

⑤剥片石器（第81図643）

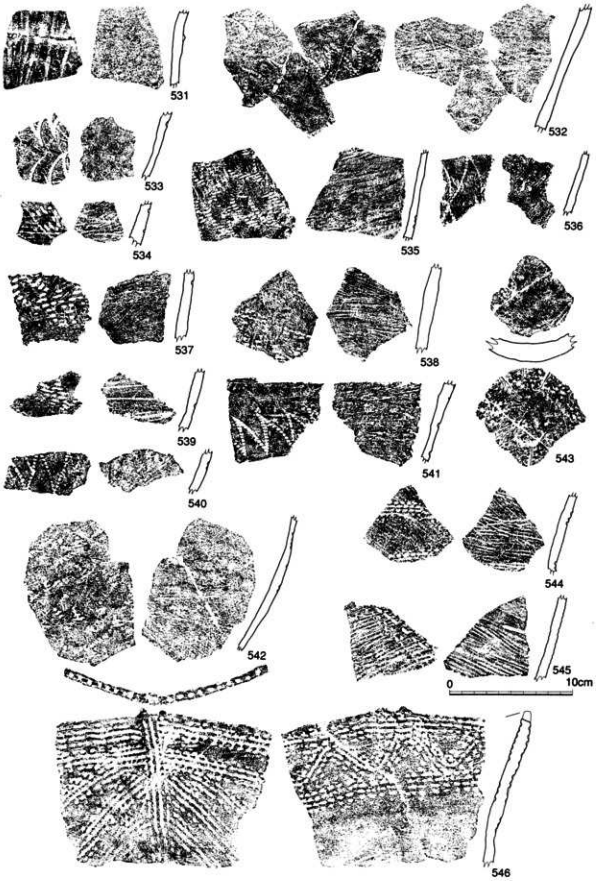
1点出土した。643は，自然礫の表面を剥離し，鋭利な端部を刃部としている。使用痕が観察できる。



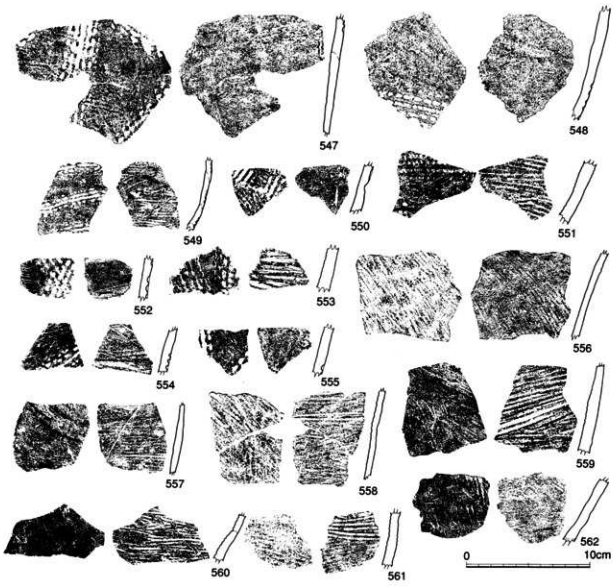
第73図　3層深浦式土器（1）



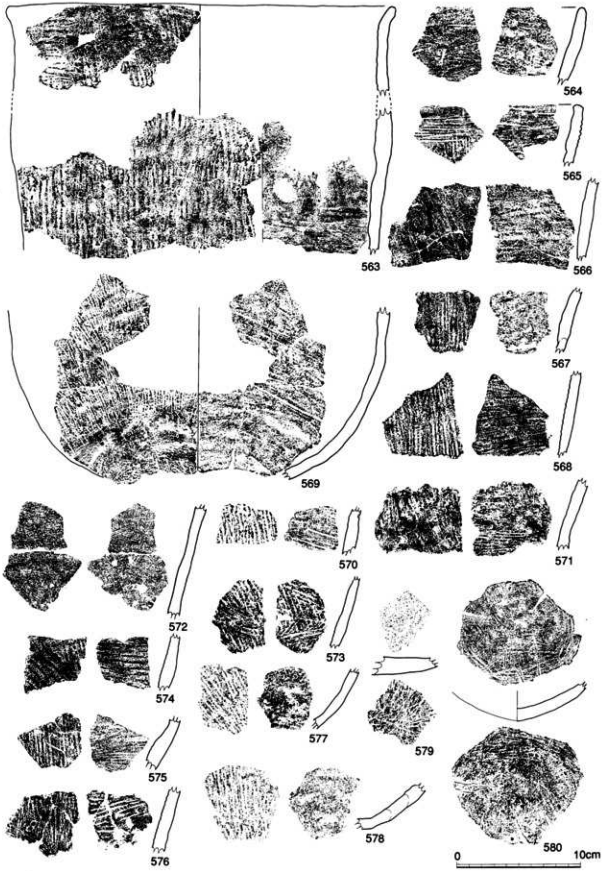
第74図　3層深浦式土器（2）



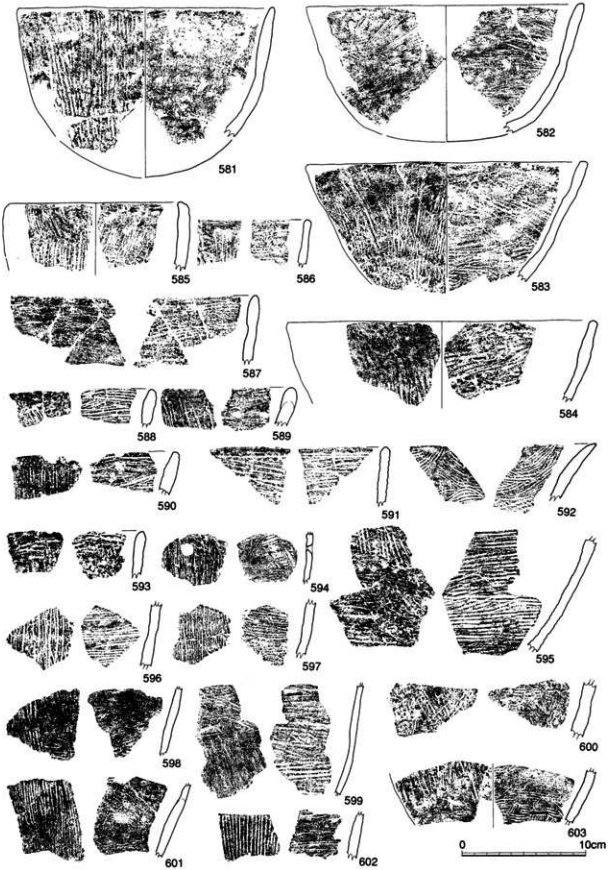
第75図　3層深浦式土器（3）



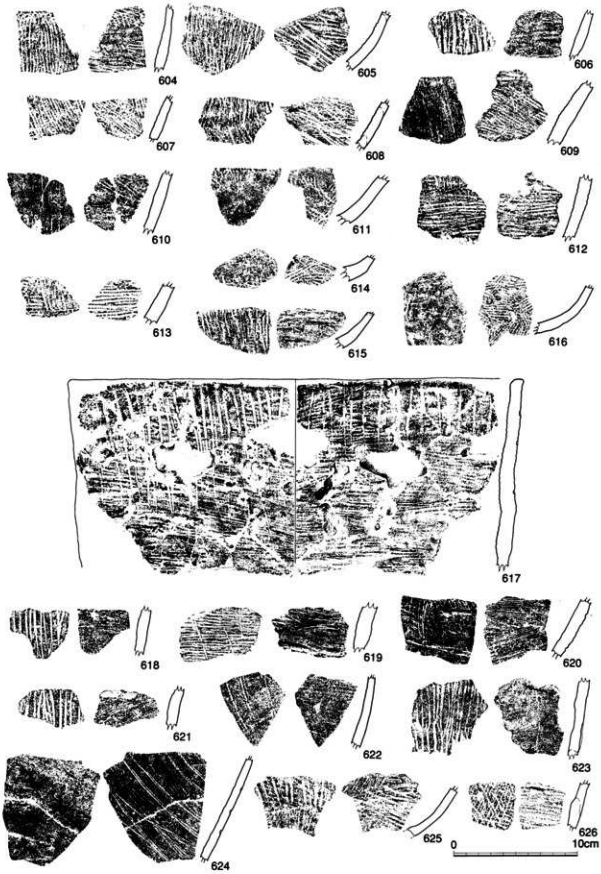
第76図　3層深浦式土器（4）



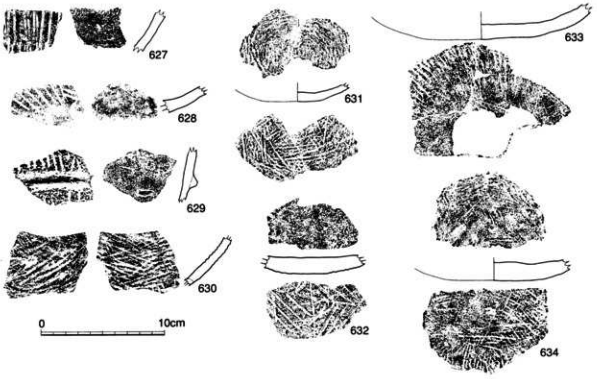
第77図　3層条痕文土器（1）



第78図　3層条痕文土器（2）



第79図　3層条痕文・曽畑系土器（1）



第80図　3層条痕文・曽畑系土器（2）

3層からは，鑿形石斧1点，磨石・敲石13点，凹石1点，石皿3点，剝片石器4点，礫石器8点の合計30点の石器が出土した。石器は，C地点からわずかに出土したほかは，すべて平成6年度調査区からのものである。

石器の石材は，島内で産出する砂石，頁岩，粘板岩，花崗岩，ホルンフェルスが用いられ，他の層との違いは見られない。

石器の構成をみると，石斧が出土がなく，調理加工具・採集用具が主体を成す。なお，鑿形石斧が1点出土しているが，畑地の耕作部分に近い地点で検出された状況を勘案すると，Ⅱ層からの入り込みの可能性もある。

①鑿形石斧（第82図644）

644は，細長い自然礫を素材に，その先端部を両面から研ぎ出して刃部を作出している。刃部には，使用痕と見られる刃こぼれが観察できる。上端は，部分的に欠落するが，風化が激しく，使用に伴う破損か，自然の所作かは判明しない。

②磨石・敲石（第82図645～654，第83図655，657～658）

13点が出土した。645は，扁平棒状の自然礫を用い，両面を磨面とするほか，一端を敲打面とする，磨石・敲石の両方の機能を持つ。646～655は敲石である。646は，両面の磨面の磨滅が激しく，完全に平坦化して，側縁部との境に稜線が形成され，長期の使用が窺われる。647は，両面共に，磨面の磨滅が少ない。648は，一面のみに明瞭な磨滅痕を観察できる。砥石としての機能も考えられる。649は，一面だけを磨面として使用している。650は，自然礫の持つ平坦面を利用して，磨面としている。651は，両面を敲打面としてい

る。652は，扁平な自然礫を素材に，その両端を敲打面としている。敲打痕の近くに，敲打による擦痕がわずかに観察できる。653は，側縁部を敲打面とし，表面にわずかに擦痕が観察できる。654は，小型の扁平な自然礫を用い，両端に敲打による欠損をみる。表裏両面に擦痕が残る。655は，荒目の砂岩の一部を敲打面とする。657は，一面に敲打による凹みを持ち，多面には若干の磨面を持つ，磨石，敲石の機能を持つものである。658は，一面をわずかに使用した磨石である。

③凹　石（第83図656）

1点出土した。656は，平坦面にわずかな凹みを持つが，風化のため，詳細な観察はできない。

④石　皿（第83図659～661）

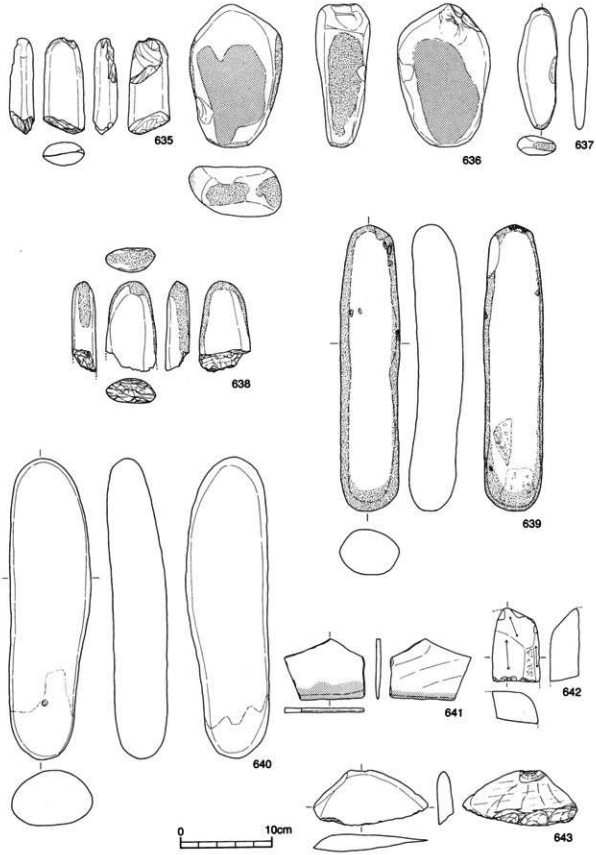
3点出土した。659は，一部だけが残存する。両平坦面を研ぎ面とし，研ぎによる擦痕が観察される。660も一部だけが残存する。研ぎ面は，緩やかな凹みを呈し，長期の使用を窮わせる。661は，扁平な自然礫を素材とし，片面に研ぎによる磨滅面を持つ。

⑤剝片石器（第83図662～665）

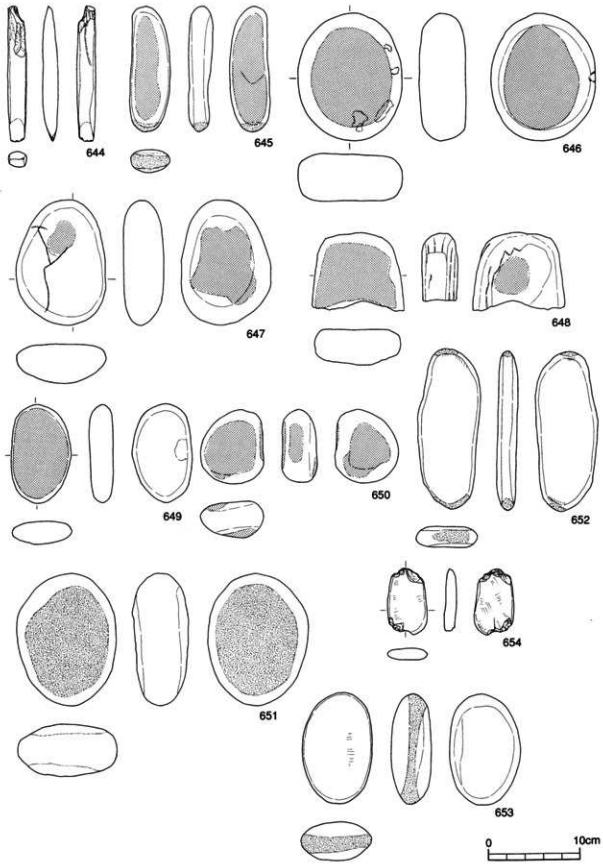
4点出土した。662～665は，いずれも自然礫の一部を剝離し，その鋭利な端部を刃部としている。662には，中ほど両側から抉りが入るが，石斧的使用を意図したものか判明せず，ここでは剝片石器に位置付けた。665は，自然両側にも剝離が認められる。

⑥礫石器（第83図666～667，第84図668～673）

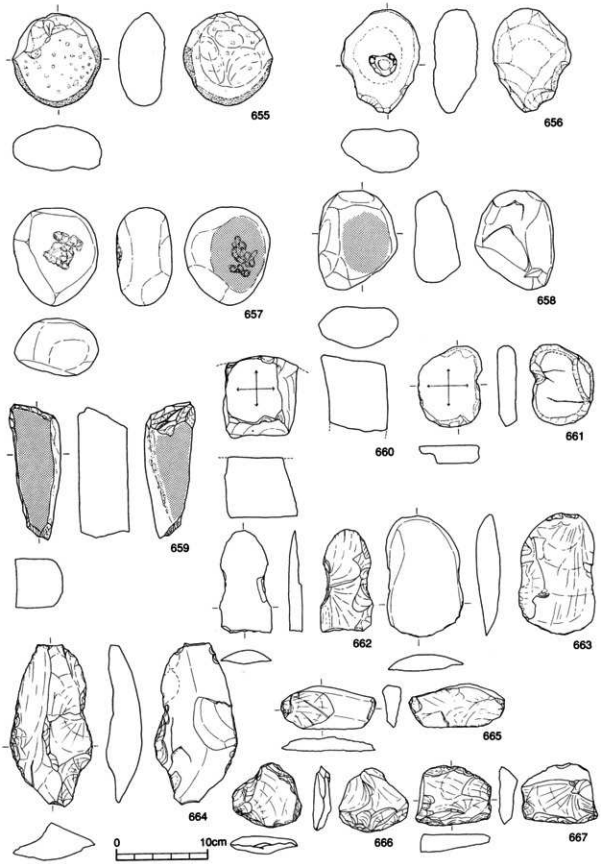
8点出土した。666は，扁平自然礫の側縁部に不規則な剝離を施し，刃部を作出している。667は，自然礫を数次に渡って剝離した一片を素材に，その鋭利な端部を刃部としたものである。刃部に，使用痕または二次調整剝離痕が観察できるが，判別できない。668は，縦長の大型剝片を素材に，鋭利な長辺部を刃部としたもので，刃部に二次的な調整が見られる。669は，自然礫の端部を数次に渡って剝離しただけの刃部形成である。670は，剝片の鋭利な端部を利用して刃部としたもので，使用痕がわずかに観察できるの。671は，円礫の一端を剝離して刃部とするが，両面に擦痕が観察でき，敲石からの転用と推定する。672も，敲石の破損したものを転用して，使用したものと推定する。673は，円礫の表面を剝ぎ取ったものを素材として，端部を刃部としたもので，わずかに使用痕が観察できる。



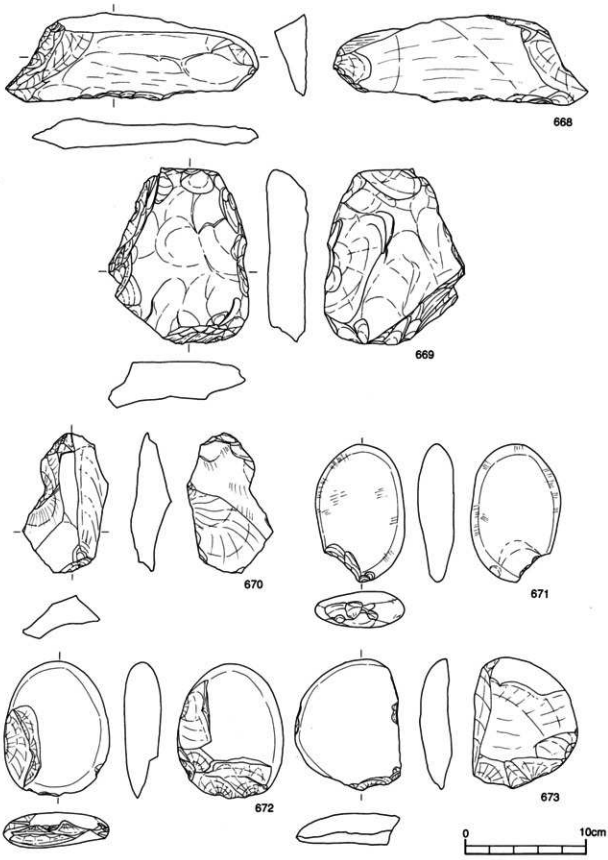
第81図　4層出土石器



第82図　3層出土石器（1）



第83図　3層出土石器（2）



第84図　3層出土石器（3）

第7節　2層の調査

1　遺構等（第85図～第86図）

平成6年度の2層は，黒色砂層で厚さ50cm前後堆積しており，撹乱も多い。そのため遺物は一括でとりあげた。市来式の出土が多かった。

平成7年度については，現道部分のA地点とB地点については，すでに削平されており，C地点のみで確認した。

C地点については，現道部分の砕石を除去後に硬化面を検出した。硬化面は，砂層と土壌層が何層にもわたって交互に形成されており，旧道路跡であると判断した。時期については近代まで使用されていたとのことである。その下に砂層が堆積しており，黒色の層から縄文時代後期の遺物が出土し，これを2層とした。2層掘り中に配石が検出され，掘り下げたところで，黄白色の無遺物層の上面で，第85図の住居跡を検出した。遺物は一部に縄文時代中期の阿高式土器が出土したが，Ⅸ類土器の一湊式土器を主体にしている。

検出した住居跡は，C地点トレンチのほぼ中央部に幅234cmの黒色砂の落ち込みとして検出した。住居跡のほぼ中央部に配石炉跡がある。配石炉跡の周囲には硬化面がみられた。配石炉跡の円礫は磨石であり，712の土器片が中央にあった。712は一湊式土器であり，縄文時代後期末の時期が考えられる。掘り上げた状況で，住居跡の壁際に5個の落ち込みと，住居跡の外に1つの落ち込みがあり，これらについては柱穴と判断される。南側はNTTのケーブル付設の際に撹乱されているが，検出状況からは方形のプランが想定できる。なお南側のトレンチ断面から住居跡の壁の立ち上がりが観察され，西側の一点鎖線は配石検出時に黒色砂の特に濃い部分があり，これが壁の立ち上がりと一致することから，おそらく床面と考えられる幅は260cmとなり，住居跡の掘り込みとしては280cm前後となる。この住居跡の最終の使用時の床面は配石炉跡とほぼ同じ面であるので，掘り終わりの面が掘り込み面とすると，20cmほどの差が生じる。継続的な使用による床面の更新の結果も考えられるが，調査段階では床面と判断される硬化面は観察されず，断面からも埋土は一様に黒色砂であった。

2　遺　物

（2）土　器

Ⅶ類土器　679～685・691・720

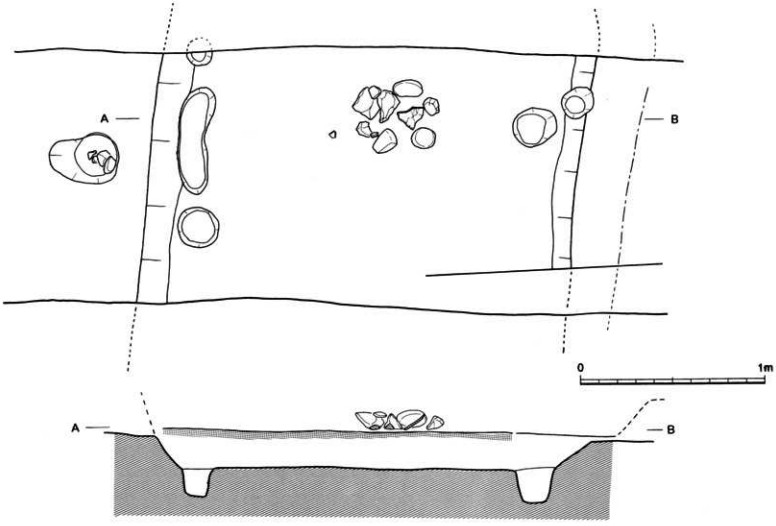
口縁部断面を三角形状に肥厚させ，その外面に沈線や刺突による文様帯をもつもので，器面は貝殻条痕で調整される。679～685は口縁部で，679・680は断面三角形の肥厚口縁で，細別できる。松山式土器として扱われることもある。それ以外は文様帯が拡張されている。691は胴部であり，全体のプロポーションが把握できる。720はⅦ類土器に伴う台付皿形土器であり，ベンガラが付着していた（付章参照）。

Ⅷ類土器　686～690

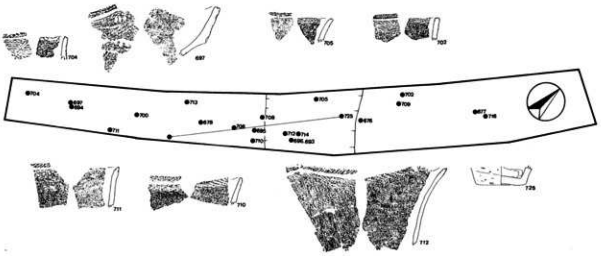
口縁部分は肥厚せず，口縁部断面が「く」の字断面をなすもので，貝殻復縁による羽状の刺突文を基本とする。器面は貝殻条痕により調整される。

Ⅸ類土器　692～715

Ⅸ－a類が692～707・713～715で，Ⅸ－b類が708～712である。



第85図　2層検出1号住居跡

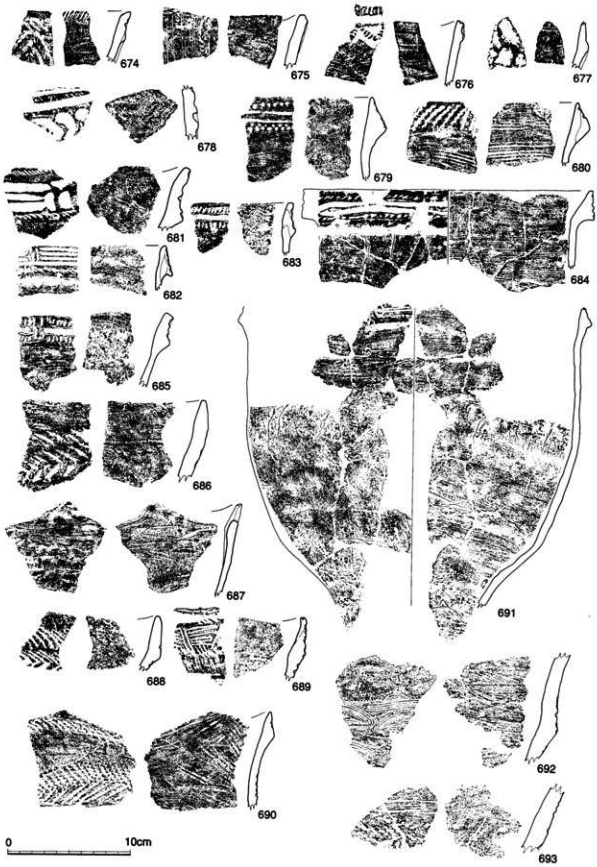


第86図　2層(C地点)縄文後期土器出土状況（1/100）

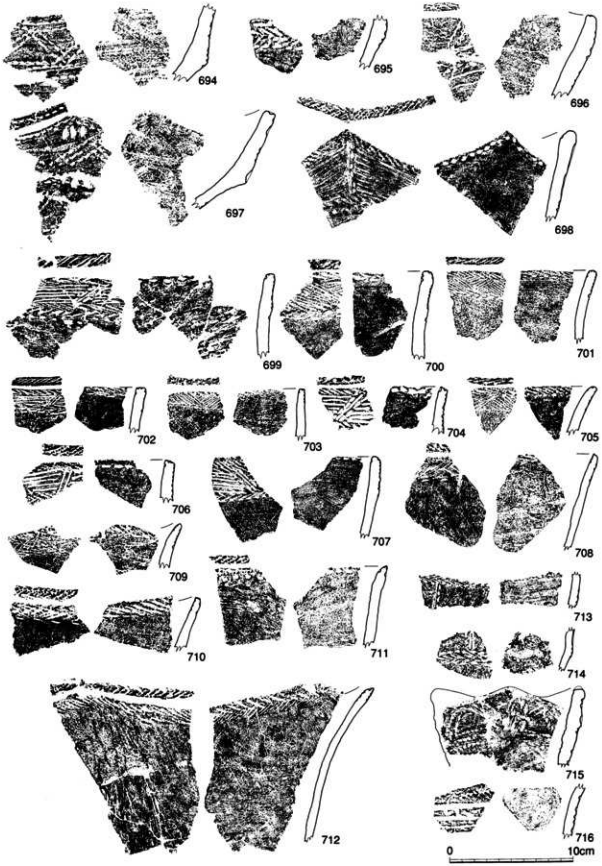
692～697の口縁部が「く」の字断面をなすものと，698～700のようにその痕跡を残すものと，残さずに直立するものがあり，文様ではさらに707までの幅広に文様帯をなすものと，708～712のように平行線文を消失したものがある。これでa類とb類としたが，前者がⅠ式であり，後者が一湊Ⅱ式とされてきたが，a類が，Ⅷ類土器からの漸移形態であるが，特に692～697については，その分類・位置付けについて検討が必要である。692は櫛状の施文具を使用する。694・697は連続刺突により，2本の平行線様の文様を描く。平行線文と刺突文がⅨ類土器の基本文様であり，漸移形態として，一湊式成立前の状況をよくあらわしている。Ⅷ類とⅨ類では，基本的に調整が異なっており，Ⅷ類では条痕であるのに対して，Ⅸ類はナデもしくはミガキによって平滑に仕上げている。文様は口縁部の斜めの貝殻刺突と細沈線による平行線を組み合わせた文様がⅨ類の特徴である。692～697については調整と文様からⅨ類とした。

その他の土器

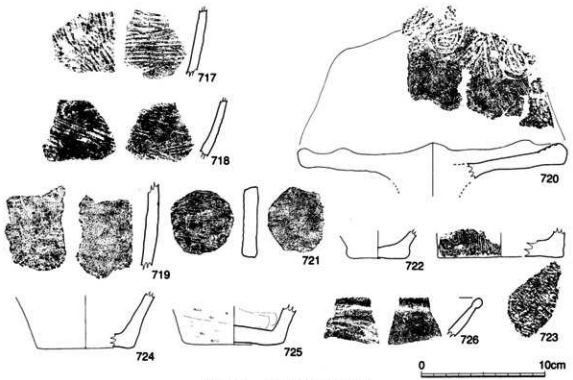
674～676は条痕を地文として，刻目突帯をなす口縁部にあたる。春日式土器に類似する。677・678は，指頭大の凹線文土器で，中期の阿高式土器に該当する。2層内では撹乱が多く見られ，一部下層まで及んでいる可能性があるものの，こうした遺物が3層より上位から少数であるが，出土することは重要である。716は磨り消し縄文の土器である。721は土製円盤で，722～725は底部である。723は底に圧痕があり，鯨骨の脊椎骨の可能性がある。726は黒川式土器である。



第87図　2層出土土器（1）



第88図　2層出土土器（2）



第89図　2層出土土器（2）

（2）石　器

2層からは，打製石斧1点，磨石・敲石18点，砥石3点，礫石器6点，軽石製品1点の合計29点の石器が出土した。石器は，相当層が撹乱または削平を受けずに残存したC地点だけから出土している。

石器の石材に，他の層との違いは見られない。

石器の構成をみると，大部分を調理加工具が占め，他の用途を持つ石器が出土していない。また，砥石3点出土しているが，石器構成上，用途に課題が残る。

①打製石斧（第90図727）

727は，打製石斧の一部と考えられ，刃部は欠損している。全体に剝離調整が見えるが，風化が激しく，全体に磨滅している。

②磨石・敲石（第90図728～第92図745）

728は，表裏両面を磨面とし，側縁部との境にわずかに稜線が見える。一端に敲打痕が残り，付近に若干の擦痕が残る。729は，直方体の自然石を素材とし，両面を磨面とする。表面に縦方向の擦痕が観察される。端部にわずかに敲打痕がある。730は，磨面が明瞭ではなく，端部の敲打による剝離が顕著である。731は，扁平な自然円礫を素材とし，磨面が著しく磨滅している。側縁部に広く敲打痕が残る。732は，やや大型縦長の自然円礫を素材に，両面を磨面とし，側縁部を敲打面とする。磨面は磨滅が全面で観察できる。733は，表裏両面を磨面とし，側縁部との境に稜線が形成される。側縁部に敲打痕が残り，一部では顕著である。734は，両面を磨面とするが，磨滅の範囲はやや狭い。周囲のほぼ全体に敲打痕が残り，敲石としての機能が主と見られる。735は，小型の自然礫を用い，両面を磨面，周囲を敲打面として利用している。磨面にわずかに擦痕が観察できる。736は，やや大型の自然

礫を素材に，表面のみを磨面とし，側縁にわずかに敲打による剝離がある。737は，小型の花筒岩円礫を素材に，裏面のみを磨面，他の面を敲打面としている。敲打痕はいずれも顕著である。738～742，744～745は，敲石である。738は，やや荒目の砂岩を素材に，一面だけを敲打面としている。739は，球状の自然礫を素材に，ほぼ全面に敲打痕が観察できるが，わずかに磨跡が残る。740は，棒状の自然礫の両端を敲打面とする。741は，縦長の自然礫をそのまま用い，両端に敲打による剝離が観察できる。742は，小振りの自然礫の両端から側縁部にかけて敲打面としている。743は，小型の自然礫で，両平坦面及び側縁部の一部に斜め方向の擦痕が残る。744は，扁平な自然礫の先端部の一部を敲打面とする。745は，卵大の自然礫を素材に，6面に敲打痕が観察できる。敲打痕の状態から，使用頻度が高かったものと推定される。

③砥　石（第92図746～748）

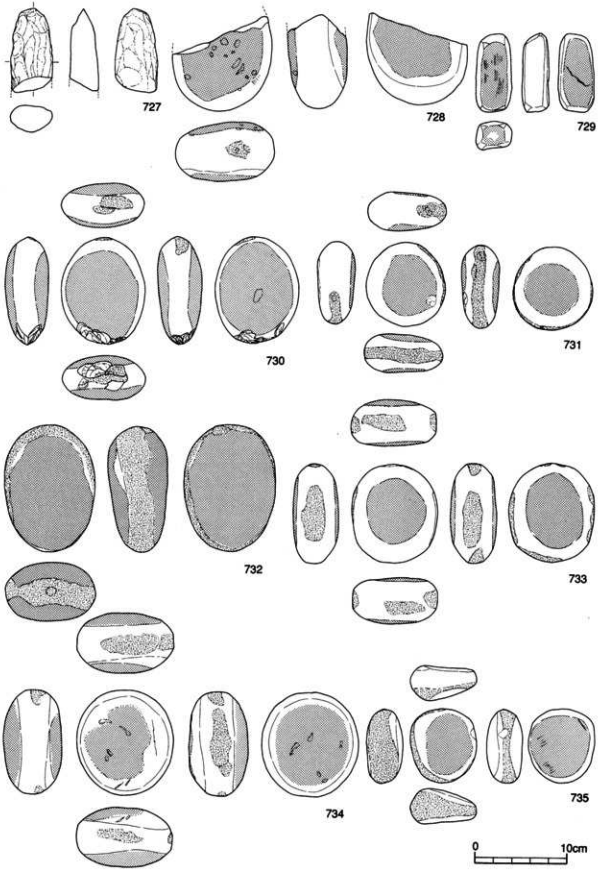
3点出土している。いずれも砂岩製である。746は，棒状の自然礫の一面を研ぎ面とし，平坦化している。半分欠損している。747は，台形状の自然礫の上面を研ぎ面とし，縦方向の擦痕が観察できる。748は，細長い自然礫を素材とするが，表裏両面を研ぎ面とする。両面ともに，磨滅面の幅が狭く，幅の狭いものを研いだことが窺える。

④礫石器（第92図749～754）

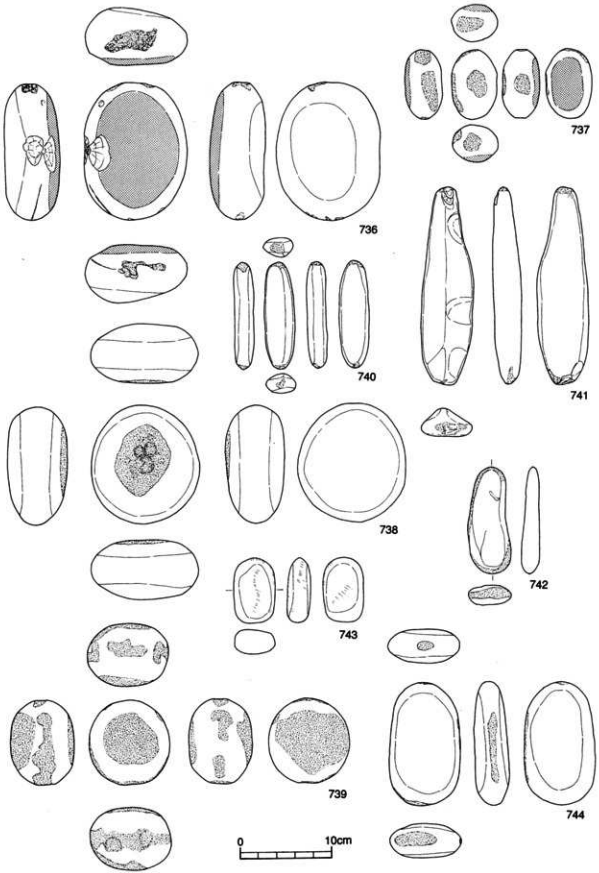
6点出土している。749は，自然礫の一部を剝離して素材とし，周囲に二次的な剝離調整を行って，刃部を作出している。裏面は，自然面が残る。750は，自然礫の側縁部に簡単な調整を行っている。751は，摂理面で剝がれた剝片を素材に，わずかな剝離調整を施して刃部としている。752は，自然円礫の側縁部に一次剝離を行っている。753は，扁平な自然円礫の一端に数次の剝離を施して刃部としている。754は，扁平な自然円礫の一端にわずかな剝離が見られる。

⑤軽石製品（第92図755）

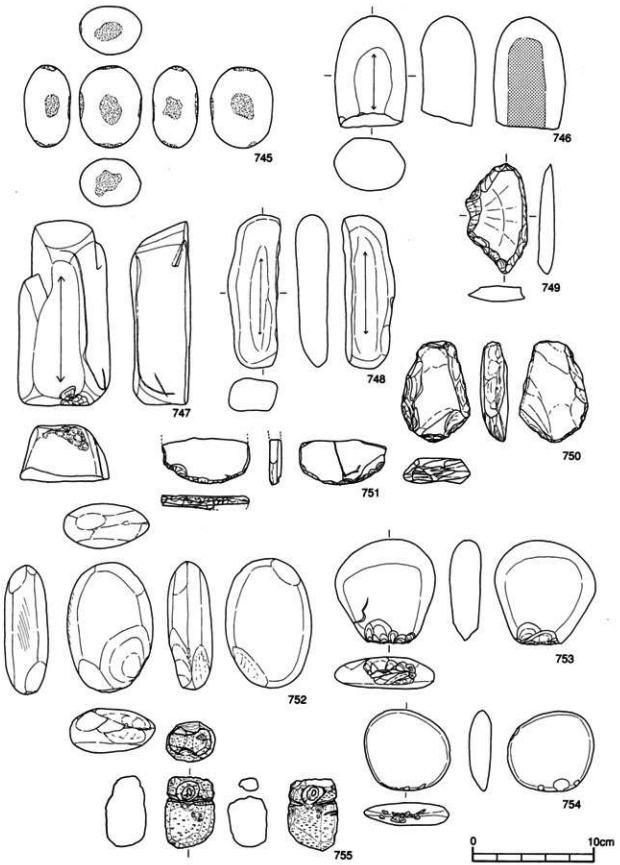
小型の円筒状を呈し，上位近くに抉りを横位に一周廻らす。さらにその上部に，錐状工具による穿孔がつながる部分で最も細くなる。「浮子」と推定される。



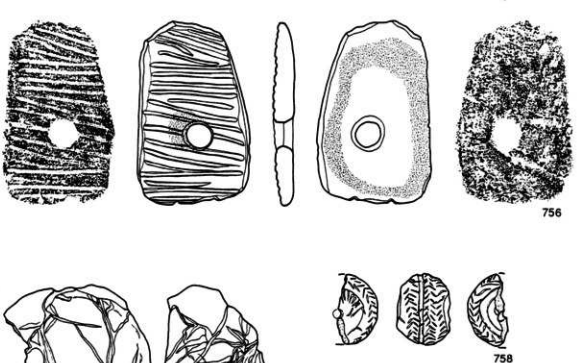
第90図　2層出土石器（1）



第91図　2層出土石器（2）



第92図　2層出土石器（3）



第93図　土製品

第8節　土製品（第93図）

756の平成6年度発掘調査の8層出土の土製垂飾品である。曽畑式土器の胴部の破片の周囲と裏面を研磨して楕円形に仕上げている。そのため裏面の土器器面は見られない。文様からⅠb類の土器の破片の可能性が強い。中央部下方に径1.2cmの孔をうがっており，下方には三角形（V字状）の抉りが2ヵ所に施される。炭化物が表面側の穿孔の左上方と，裏面の周囲に付着している。穿孔と抉りから垂飾品としたが，用途・機能は不明で，周辺には顕著な出土状況や遺構を認めない。

757は平成6年度発掘調査の8層出土の葉痕焼成粘土塊である。葉脈痕が顕著で，2枚の葉で包まれていたものと推定される。1/3を欠損しているものと考えられる。細かな葉脈がみられず，滑らかな葉面をもつ植物と考えられる。胎土に金雲母を含んでおり，地元産の可能性が強い。

758は平成7年度発掘調査のC地点2層出土の有孔紡錘形土製品である。タイヤ状であるが，「有孔紡錘形土製品」としたのは，上野辰雄氏によるが，別の名称があるのか不勉強で承知していない。類例の増加を待って，ふさわしい名称を付すべきであろう。約半分を欠損している。茶褐色で表面は研磨され，中央部の穿孔がある。穿孔は斜め方向に入り，片面側は予定した位置とずれたためか，予定場所にわずかなへこみがある。側面には1条の沈線が入り，羽状の連続刺突が細いヘラ状工具で施されている。一湊式土器と共伴するものと考えられ，縄文時代後期末の時期が考えられる。熊本県の出土例も同時期のものが多く，上野氏の使用した名称をつかった。

第4表　出土土器観察表（1）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 金雲母	胎土 滑石	胎土 砂礫	胎土 分類	焼成	色調 外	色調 内	調整、文様 外器面	文様帯	縦区画	内器面	分類	炭化物付着
11	1	17	○	△	-	◎	○	○	A	○	灰褐色		ナデ、刻み、刺突、弧線、菱形·折帯	(6)	○	ナデ、刺突	I	○
	2		○	△	-	◎	○	○	A	○	灰褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯	(4)		ナデ、刺突·平行線		○
12	3		△	-	-	-	◎	△	A	◎	灰赤褐色		ナデ、刻み、押引き、弧線、三角組合せ	(3)	○	ナデ、平行線		○
	4		-	-	-	-	◎	△	A	◎	暗灰色		ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ		
	5		△	△	-	◎	-	△	B	○	黒褐色	淡褐色	ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯、平行線	(4)		ナデ、刺突、平行線		○
	6		○	○	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色	赤褐色	ナデ、刺突、平行線、充塡	(3)		ナデ		○
	7		△	△	-	○	-	○	B	○	暗褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線	(2)		ナデ、平行線+三角形		
	8		△	△	-	◎	-	○	B	○	暗褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ、刺突		
	9		-	-	-	-	◎	△	A	○	黒褐色		ナデ、刻み、押引き、平行線、折帯	(3)		ナデ、押引き、平行線		○
	10		-	△	-	△	○	△	A	◎	暗褐色		ナデ、刻み、押引き、弧線	(2)		ナデ、押引き、弧線		○
	11		-	-	-	-	◎	△	A	○	灰褐色		ナデ、刺突、平行線	(2)		ナデ、刺突、平行線		
	12		△	△	-	◎	-	○	B	○	灰褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ、刺突		
	13		○	△	-	○	-	○	B	◎	黒褐色		ナデ、刻み、押引き、弧線	(2)		ナデ、刺突		○
	14		○	○	-	○	-	○	B	◎	灰褐色		ナデ、刺突、平行線	(2)		ナデ、刺突		○
	15		△	△	-	△	○	○	A	○	灰褐色		ナデ、刺突、沈線、折帯	(2)		条痕ナデ消し		○
13	16		○	△	○	-	-	◎	B	○	暗赤褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、四角、三角組合せ、平行線	(5)	○	ナデ、刺突、平行線		○
	17		△	△	-	△	◎	○	A	○	黄褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ、刺突		
	18		-	-	-	-	○	△	A	○	灰褐色		ナデ、刺突、平行線	(2)		ナデ、刺突		
	19		△	△	△	△	○	○	A	○	暗褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、三角組合せ	(3)	○	条痕ナデ消し、刺突、平行線		○
	20		○	○	-	○	-	◎	C	○	黒褐色	赤褐色	ナデ、刺突、平行線、斜線	(4)	○	条痕ナデ消し、刺突		
	21		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	茶褐色	ナデ、刻み、刺突、平行線、三角組合せ	(3)		条痕ナデ消し、刺突		
	22		○	◎	-	◎	-	◎	B	○	黒褐色		ナデ、刺突、平行線、四角、折帯	(5)		条痕、刺突、平行線		○
14	23		△	○	-	-	○	○	A	○	黒褐色		ナデ、刻み、刺突、平行線、三角組合せ	(3)		ナデ、刺突、平行線		
	24		△	○	-	○	-	○	C	○	黒褐色	茶褐色	ナデ、羽状刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ、羽状刺突		
	25		-	△	-	-	◎	△	A	○	黒褐色	茶褐色	ナデ、刺突、平行線	(2)		ナデ、刺突		
	26		○	○	-	◎	-	○	C	○	暗赤褐色	淡褐色	ナデ、刻み、羽状刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ、刺突		
	27		○	○	○	○	-	◎	B	○	暗赤褐色	赤褐色	ナデ、刺突、平行線、四角、折帯	(5)	○	条痕、刺突、平行線		○
	28		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	暗赤褐色	ナデ、刺突、平行線、折帯、平行線	(6)		ナデ、刺突		○
	29		○	◎	-	○	-	◎	C	○	黒褐色	暗赤褐色	ナデ、刻み、刺突、平行線、折帯	(4)		条痕ナデ消し		○
	30		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ、平行線、折帯	(2)		条痕ナデ消し、刺突		
	31		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色	赤褐色	ナデ、刺突、刻み、平行線	(2)		条痕ナデ消し、刻み		
	32		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ、平行線、折帯	(2)		条痕ナデ消し、刺突、平行線		○
	33		-	○	-	-	△	○	A	○	赤褐色	黒　色	ナデ、刻み、平行線	(2)		条痕、刻み		
15	34		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ、刻み、平行線、折帯	(4)		ナデ、刺突		○
	35		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ、刺突、平行線、鋸歯	(2)		ナデ、刺突、平行線		○
	36		○	○	○	△	-	○	B	○	黒褐色	淡褐色	ナデ、刺突、平行線〈縦横〉、平行線	(4)	○	条痕ナデ消し、刺突、平行線		○
	37		○	◎	-	○	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ、短沈線〈羽状〉	(1)		条痕ナデ消し、刺突		
	38		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ、刺突、平行線、折帯	(3)		条痕ナデ消し、刺突		○
	39		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ、平行線、短沈線〈羽状〉、平行線	(3)		条痕ナデ消し、刻み、平行線		○
	40		○	○	○	△	-	◎	B	○	黒褐色		ナデ、刺突、平行線	(2)		条痕ナデ消し、刺突		
	41		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ、刻み、平行線、折帯	(4)		条痕ナデ消し、平行線		○
	42		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	暗赤褐色	ナデ、刻み、刺突〈羽状〉、弧線、折帯	(3)		条痕ナデ消し、刺突〈羽状〉		
	43		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	茶褐色	ナデ、刻み、刺突〈羽状〉、平行線	(2)		条痕ナデ消し		○
16	44		○	○	△	○	-	○	B	○	黒褐色		ナデ、刻み、平行線、折帯	(2)		ナデ、平行線		○
	45		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ、刻み、平行線			条痕ナデ消し		○
	46		○	◎	-	○	-	○	C	◎	茶褐色	淡褐色	ナデ、平行線、押引き			ナデ、平行線		
	47		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ、刺突、平行線、曲線、平行線	(4)		ナデ、平行線		
	48		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ、沈線後刺突、平行線			ナデ、平行線		○
	49		○	◎	-	-	-	◎	B	○	黒褐色		ナデ、平行線、刺突〈羽状〉	(3)		ナデ		
	50		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	茶褐色	ナデ、刺突、平行線、折帯	(3)		ナデ		
	51		△	○	○	-	-	○	B	○	黄灰色		ナデ、三角組合せ	(3)	○	ナデ		○
	52		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ、四角、平行線〈縦横〉	(4)		ナデ		
	53		○	◎	○	-	-	◎	B	○	灰褐色		ナデ、平行線、折帯	(3)		ナデ		○
	54		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ、刺突、平行線、折帯	(3)		条痕		○
	55		○	○	-	○	-	○	B	○	灰褐色		ナデ、平行線、折帯	(2)		ナデ		○
17	56		-	-	-	-	◎	△	A	○	褐　色		ナデ、折帯、平行線〈鋸歯〉	(2)		ナデ		○
	57		△	△	-	△	-	○	B	○	灰　色		ナデ、平行線、刺突、平行線	(3)	○	ナデ		
	58		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色		ナデ、平行線〈縦横〉	(2)		ナデ		○

第5表　出土土器観察表（2）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 金雲母	胎土 滑石	胎土 砂礫	胎土 分類	焼成	色調 外	色調 内	調整，文様 外器面	文様帯	縦区画	内器面	分類	炭化物付着
17	59	17	○	◎	○	-	-	◎	B	○	暗褐色		ナデ，三角組合せ			ナデ	I	
	60		○	○	-	○	-	○	C	○	灰褐色		ナデ，平行線，三角組合せ	(2)		ナデ		
	61		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色	茶褐色	ナデ，折帯	(2)		条痕ナデ消し		
	62		○	○	-	◎	-	○	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯			ナデ		○
	63		-	-	-	△	◎	△	A	○	灰褐色		ナデ，三角形	(2)		ナデ		
	64		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，折帯			ナデ		
	65		○	○	-	○	-	○	C	○	褐色		ナデ，折帯	(2)		ナデ		○
	66		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	茶褐色	ナデ，三角組合せ			条痕ナデ消し		○
	67		○	○	-	△	△	○	A	○	黒褐色	茶　色	ナデ，折帯			ナデ		○
	68		△	△	-	△	-	○	B	◎	暗褐色		ナデ，三角組合せ		○	ナデ		○
	69		○	○	-	○	-	○	B	◎	暗黄褐色		ナデ，折帯			ナデ		○
	70		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，三角			ナデ		
	71		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯			ナデ		
	72		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯			ナデ		
18	73		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，三角組合せ	(3)		条痕		○
	74		○	○	-	△	-	○	B	○	暗褐色		ナデ，三角組合せ，平行線	(2)		条痕		○
	75		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条痕ナデ消し，折帯	(2)		条痕ナデ消し		○
	76		-	-	-	-	◎	△	A	○	灰褐色		ナデ，押引き，平行線，折帯	(2)		ナデ		
	77		○	○	-	○	△	○	A	○	褐色		条痕，三角			条痕		
	78		○	○	-	○	-	○	C	◎	暗褐色	黄褐色	ナデ，三角組合せ充塡	(2)		ナデ		
	79		-	△	-	-	◎	△	A	○	灰褐色		ナデ，折帯			ナデ		
	80		△	○	-	○	-	○	C	◎	暗褐色		ナデ，折帯	(2)		条痕		○
	81		△	○	-	○	△	○	A	○	暗褐色	赤褐色	ナデ，三角			条痕		
	82		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯	(2)		条痕		
	83		○	◎	-	-	-	◎	B	○	淡赤褐色		ナデ，平行線，折帯	(2)		条痕		
	84		○	◎	-	-	-	◎	B	○	黒褐色	茶　色	ナデ，羽状刺突		○	条痕ナデ消し		
	85		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，三角		○	ナデ，ケズリ		○
	86		○	○	-	○	-	○	C	◎	暗灰褐色		ナデ，折帯			条痕ナデ消し		○
	87		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	暗赤褐色	ナデ，刺突，短平行線	(2)	○	条痕ナデ消し		
19	88		○	◎	-	◎	△	◎	A	○	茶褐色		ナデ，三角	(3)		条痕ナデ消し		○
	89		○	◎	-	△	-	◎	B	○	暗赤褐色		ナデ，三角組合せ充塡	(2)		条痕ナデ消し		○
	90		○	◎	-	○	△	◎	A	○	暗赤褐色	黄灰色	ナデ，折帯，平行線	(2)		条痕ナデ消し，刺突		○
	91		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ，平行線			ナデ		
	92		○	○	-	○	-	○	C	○	暗褐色	灰褐色	条痕，平行線			条痕ナデ消し		○
	93		◎	◎	-	△	-	◎	B	○	暗赤褐色		ナデ，平行線，羽状	(2)		ナデ		○
	94		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，羽状，平行線	(2)	○	ナデ		
	95		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，平行線〈縦横〉	(2)		ナデ		
	96		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，三角組合せ			条痕		
	97		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，四角			ナデ		
	98		△	○	-	○	-	○	C	◎	灰褐色		ナデ，折帯，平行線	(2)		ナデ		○
20	99		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，折帯，平行線	(2)		条痕ナデ消し，刻み，平行線		○
	100		△	◎	-	△	-	◎	B	○	黒褐色	黄灰色	ナデ，三角組合せ	(2)		ナデ		○
	101		△	○	-	△	-	○	B	◎	暗褐色		ナデ，平行線，刺突	(2)	○	ナデ		
	102		-	-	-	-	◎	△	A	○	黒褐色	黄褐色	ナデ，平行線・三角組合せ	(3)	○	条痕		○
	103		○	◎	-	△	-	◎	B	○	暗赤褐色		ナデ，平行線，三角組合せ			条痕ナデ消し		○
	104		○	◎	-	-	-	◎	B	○	黒褐色		ナデ，平行線，刺突			ナデ		
	105		○	◎	-	○	-	◎	C	○	暗赤褐色	赤褐色	条痕，刻み，平行線+曲線			条痕，曲線	II	○
	106		○	◎	-	○	-	◎	C	○	淡褐色	赤褐色	条痕，平行線，羽状			条痕		○
21	107		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，平行曲線充塡			条痕ナデ消し	I	
	108		△	○	-	○	-	○	C	○	灰褐色		ナデ，平行線+曲線			条痕ナデ消し		
	109		-	△	-	-	◎	△	A	○	黄褐色		ナデ，平行線			ナデ		
	110		-	○	-	△	△	○	A	○	暗褐色	黄褐色	ナデ，平行線			ナデ		○
	111		△	○	-	○	-	○	C	○	黒褐色	灰褐色	ナデ，平行線			ナデ		○
	112		△	○	-	○	-	○	C	○	黄褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	113		-	△	-	△	△	△	A	○	暗赤褐色		ナデ，平行線			ナデ		
	114		-	-	-	-	◎	-	A	○	黄褐色		ナデ，折帯，平行線	(2)		ナデ		○
	115		△	△	-	△	△	△	A	○	黄褐色	灰褐色	ナデ，平行線			ナデ		○
	116		-	-	-	-	◎	-	A	○	灰褐色		ナデ，平行線			ナデ		

第6表　出土土器観察表（3）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	分類	焼成	色調 外	内	調整，文様 外器面	文様帯	縦区画	内器面	分類	炭化物付着
21	117	17	△	○	-	○	-	○	C	○	黄褐色		ナデ，平行線			ナデ	Ⅰ	○
	118		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，四角			ナデ		○
31	178	10〜15	○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，刻み，平行線，三角	(2)		ナデ，平行線		○
	179		△	○	-	△	-	○	C	◎	暗褐色	褐色	ナデ，刻み，平行線，折帯	(2)		ナデ，平行線		○
	180		△	○	-	○	△	○	A	○	黒褐色		ナデ，菱形			ナデ		○
	181		△	○	-	○	△	○	A	○	暗褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	182		△	○	-	△	○	○	A	○	淡褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	183		-	○	-	△	-	○	B	○	暗褐色		ナデ，刻み，刺突，平行線	(2)		ナデ，刺突		○
	184		○	△	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，刻み，平行線〈縦横〉			ナデ，平行線〈縦横〉		
	185		-	○	-	△	○	○	A	○	淡褐色		ナデ，刻み，平行線			ナデ，平行線		○
	186		-	○	-	△	△	○	A	○	暗褐色		ナデ，平行線，折帯	(2)		ナデ		○
	187		-	○	-	△	-	○	B	◎	暗赤褐色		ナデ，平行線，折帯	(2)		ナデ		
	188		-	○	-	△	△	○	A	◎	暗灰褐色		ナデ，平行線，三角組合せ	(2)		ナデ，平行線		○
	189		-	○	-	△	△	○	A	○	灰褐色		ナデ，平行線	(2)		ナデ		○
	190		-	○	-	○	-	○	B	◎	黒褐色		ナデ，平行線〈縦横〉，刺突，平行線			ナデ		○
	191		-	○	-	△	△	○	A	○	赤褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	192		-	○	-	○	-	○	B	◎	褐色		ナデ，平行線，刺突，平行線		○	ナデ		○
	193		-	○	-	△	-	○	B	◎	黒褐色		ナデ，折帯，平行線			ナデ		
	194		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	灰褐色		ナデ，平行線			ナデ		
32	195	9	△	○	-	△	△	○	A	○	黒褐色	黄灰色	ナデ，刺突，平行線〈鋸歯〉，折帯			ナデ，平行線〈鋸歯〉		○
	196		-	◎	-	△	-	◎	B	○	暗赤褐色	淡褐色	ナデ，刻み，折帯			ナデ，平行線		○
	197		△	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	淡褐色	ナデ，刻み，平行線〈縦横〉			ナデ，平行線〈鋸歯〉		○
	198		-	○	-	○	-	○	C	○	黄灰色		ナデ，刺突，平行線，三角組合せ充塡			ナデ		○
	199		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色	赤褐色	ナデ，刺突，平行線，折帯	(3)	○	ナデ，平行線		
	200		-	△	-	△	◎	△	A	○	暗褐色		ナデ，刻み，刺突			ナデ		
	201		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，折帯			ナデ		○
	202		△	○	-	○	-	○	C	◎	暗褐色		ナデ，平行線〈四角〉充塡			ナデ		
	203		-	○	-	○	-	○	C	○	褐色		ナデ，三角〈曲線充塡〉			条痕		
	204		-	○	-	○	-	○	C	○	褐色		ナデ，曲線			条痕		
	205		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，三角組合せ充塡			ナデ		
	206		-	○	-	○	-	○	C	○	灰褐色		ナデ，四角			ナデ		○
	207		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ，四角〈X字区画〉			条痕ナデ消し		○
39	223	8	○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，平行線，平行線〈縦横〉	(3)	○	ナデ，平行線		○
	224		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，平行線，四角〈X字区画〉	(3)		ナデ，平行線		
	225		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，刺突，四角			ナデ，平行線		
	226		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，刻み，平行線			ナデ，平行線		○
	227		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，刻み，平行線			ナデ，刺突		○
	228		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	淡灰褐色	ナデ，刻み，平行線，折帯	(2)		ナデ，平行線		○
	229		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	赤褐色	ナデ，平行線			ナデ，平行線〈鋸歯〉		○
	230		-	○	-	○	-	○	C	○	暗赤褐色		ナデ，刺突，折帯			ナデ，刺突		○
	231		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，刻み，平行線，折帯	(2)		条痕ナデ消し，平行線		
	232		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，刺突，平行線〈鋸歯〉，四角充塡	(2)		ナデ，平行線〈鋸歯〉		○
	233		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，刺突，平行線〈鋸歯〉			ナデ，平行線〈鋸歯〉		
	234		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	暗赤褐色	ナデ，刺突，平行線			ナデ，刺突，平行線		
	235		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，平行線〈鋸歯〉，平行線〈横・縦〉+刺突	(3)		ナデ，刺突，平行線〈鋸歯〉		○
40	236		△	◎	-	-	-	◎	B	○	褐色		ナデ，刻み，平行線〈鋸歯〉，折帯	(2)		ナデ，平行線〈鋸歯〉		
	237		△	◎	-	-	-	◎	B	○	黒褐色	赤褐色	ナデ，刻み，平行線			ナデ，平行線〈鋸歯〉		
	238		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	黒褐色		ナデ，刻み，折帯			ナデ，刺突		○
	239		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ，刻み，平行線〈縦〉，平行線	(2)	○	ナデ，平行線〈縦〉		○
	240		○	◎	-	-	-	◎	B	◎	黒褐色	暗赤褐色	ナデ，刻み，平行線			ナデ，平行線		
	241		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，刺突，平行線			ナデ，平行線		
	242		△	○	-	○	-	○	C	◎	暗赤褐色		ナデ，平行線，三角組合せ	(2)		ナデ，平行線		○
	243		△	○	-	○	-	○	C	◎	暗褐色	暗赤褐色	ナデ，刻み，平行線，平行線〈羽状〉+刺突	(3)	○	ナデ，平行線〈V字〉		○
	244		△	○	-	○	-	○	C	○	黒褐色		ナデ，刻み，平行線，折帯	(2)		ナデ，平行線〈鋸歯〉		
	245		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	黒褐色		ナデ，刻み，平行線〈縦横〉			ナデ		○
	246		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	黒褐色		ナデ，刻み，平行線〈縦横〉			ナデ		○
	247		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	淡褐色		ナデ，刻み，平行線			ナデ		○
41	248		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条痕，縦平行線，曲線+横平行線			条痕	Ⅱ	○

第7表　出土土器観察表（4）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 金雲母	胎土 滑石	胎土 砂礫	胎土 分類	焼成	色調 外	色調 内	調整、文様 外器面	文様帯	縦区画	内器面	分類	炭化物付着
41	249	8	○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉+曲線, 平行線〈X字区画〉	(3)		ナデ, 平行線〈縦横〉+曲線	1	○
	250		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	暗褐色		ナデ, 平行線〈縦横·四角〉+曲線, 平行線〈鋸歯区画〉	(2)		ナデ, 平行線		○
	251		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ, 曲線充填			ナデ		○
	252		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 曲線充填, 平行線			条痕ナデ消し		○
	253		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線〈四角〉			ナデ		○
	254		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線〈斜め〉			条痕ナデ消し, 平行線〈縦横〉		○
	255		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ, 平行線〈斜め〉			条痕ナデ消し, 平行線〈鋸歯〉		○
42	256		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線, 縦平行線, 平行線	(3)		ナデ, 縦平行線		○
	257		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線, 折帯	(2)		ナデ		○
	258		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗灰褐色		条痕, 平行線			ナデ, 平行線		
	259		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 刻み, 縦平行線			ナデ, 縦平行線		○
	260		-	○	-	○	-	○	C	◎	黒褐色		ナデ, 刻み, 平行線			ナデ		○
	261		-	△	-	◎	○	◎	A	○	暗褐色	淡褐色	ナデ, 平行線			ナデ, 刺突, 平行線		○
	262		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 刻み, 平行線			ナデ, 平行線		○
	263		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 刻み, 平行線, 三角〈平行線充填〉	(4)		ナデ, 平行線		○
	264		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色	赤褐色	ナデ, 刻み, 平行線, 三角〈平行線充填〉	(2)		ナデ, 平行線		
43	265		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗灰褐色		ナデ, 平行線			ナデ, 平行線		
	266		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 刻み, 平行線			ナデ, 平行線		
	267		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 平行線			ナデ		○
	268		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色	黒褐色	ナデ, 三角〈平行線充填〉	(2)		条痕		
	269		○	◎	-	-	-	◎	B	○	灰褐色		ナデ, 平行線, 三角〈平行線充填〉, 平行線〈縦横〉	(3)		ナデ		○
	270		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 鋸歯, 平行線, 縦平行線, 平行線	(3)		条痕ナデ消し		
	271		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	茶褐色	ナデ, 三角〈平行線充填〉			条痕		
	272		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉, 縦平行線, 平行線	(3)		ナデ		
	273		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線〈縦·斜め〉			条痕		
	274		○	△	-	◎	○	◎	B	○	暗褐色		ナデ, 平行線			ナデ		○
	275		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線			ナデ		○
	276		○	◎	-	◎	-	◎	B	○	暗赤褐色		ナデ, 三角〈平行線充填〉, 平行線			条痕ナデ消し		
44	277		○	○	-	○	△	○	A	○	黒褐色	赤褐色	ナデ, 曲線充填			ナデ, ケズリ		
	278		-	○	-	-	-	○	B	○	黒褐色		ナデ, 平行線			条痕ナデ消し		○
	279		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 平行線			ナデ		
	280		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黄褐色		ナデ, 平行線			条痕ナデ消し		○
	281		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ, 三角〈平行線充填〉			ナデ		
	282		△	○	-	△	-	○	B	◎	黄灰色		ナデ, 折帯			工具ナデ		○
	283		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ, 四角			条痕ナデ消し		○
	284		△	○	-	△	-	○	B	○	赤褐色	暗褐色	ナデ, 平行線			ナデ		
	285		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 三角〈平行線充填〉, 平行線			ナデ		
	286		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ, 三角〈平行線充填〉			ナデ		○
	287		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ, 平行線〈X字区画〉			ナデ		○
	288		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	淡褐色	黒褐色	ナデ, 平行線〈X字区画〉			ナデ		
	289		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 平行線, 羽状平行線			ナデ		
	290		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉			ナデ		
	291		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐色		ナデ, 平行線, 羽状平行線			ナデ		
	292		-	○	-	○	-	○	C	◎	暗灰褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉			ナデ		○
	293		-	○	-	○	-	○	C	◎	灰褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉			ナデ		
	294		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ, 平行線, 羽状平行線	(2)		ナデ		
	295		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ, 羽状平行線		○	ナデ		
45	296		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 羽状平行線, 平行線			ナデ		○
	297		-	△	-	△	-	△	C	◎	灰褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉, 四角充填			ナデ		○
	298		-	△	-	△	-	△	C	◎	暗灰褐色		ナデ, 四角充填		○	ナデ		○
	299		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	赤褐色	ナデ, 四角充填			ナデ		○
	300		-	△	-	△	-	△	C	◎	灰褐色		ナデ, 平行線〈縦横〉			ナデ		○
	301		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ, 平行線			ナデ		
	302		△	○	-	△	-	○	C	◎	灰褐色		ナデ, 平行線			ナデ		○
	303		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色		ナデ, 平行線, 刺突			条痕ナデ消し		
	304		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	赤褐色	ナデ, 平行線			ナデ		○
	305		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	黒褐色		ナデ, 三角, 平行線			条痕ナデ消し		○
	306		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	褐　色	ナデ, 三角平行線充填			条痕		

第8表　出土土器観察表（5）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 金雲母	胎土 滑石	胎土 砂礫	胎土 分類	焼成	色調 外	色調 内	調整，文様 外器面	調整，文様 文様帯	調整，文様 縦区画	調整，文様 内器面	炭化物付着 分類	炭化物付着
45	307	8	○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗灰褐色		ナデ，平行線			ナデ	Ⅰ	
	308		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯，平行線，折帯		(3)	条痕ナデ消し		○
	309		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉			ナデ		○
46	310		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉			ナデ，平行線		○
	311		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉			条痕ナデ消し		○
	312		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯			ナデ		○
	313		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉，平行線		(2)	ナデ		○
	314		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯，平行線		(2)	条痕ナデ消し		○
	315		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉			条痕ナデ消し		○
	316		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉		(2)	条痕ナデ消し		○
	317		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	淡褐色		ナデ，折帯		(2)	ナデ		○
47	318		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色		ナデ，三角〈平行線充填〉		(2)	ナデ		○
	319		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色	灰褐色	ナデ，折帯		(2)	条痕ナデ消し		○
	320		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒褐色	赤褐色	ナデ，三角〈平行線充填〉		(2)	ナデ		○
	321		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色		ナデ，折帯		(2)	工具ナデ		○
	322		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	323		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色		ナデ一部条痕，折帯			条痕		
	324		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	325		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	灰褐色	ナデ，平行線，四角		(2)	ナデ		○
	326		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	茶褐色		ナデ，平行線			ナデ		○
	327		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，折帯，平行線		(2)	条痕		○
48	328		○	◎	－	○	－	◎	C	○	赤褐色		ナデ，平行線〈縦〉，平行線		(2)	ナデ		○
	329		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色		ナデ，四角〈X字区画〉			ナデ		○
	330		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，平行線		(2)	ナデ		○
	331		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗灰褐色		ナデ，平行線			条痕ナデ消し		○
	332		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色		ナデ，平行線		○	ナデ		○
	371	6	○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		ナデ一部条痕，三角組合せ充填，平行線〈縦横〉		(2)	ナデ，条痕ナデ消し，刺突		○
	372		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色		ナデ，刺突，平行線，四角		(2)	ナデ，平行線，条痕ナデ消し		○
55	373		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	茶褐色		ナデ，刺突，平行線			ナデ，平行線		○
	374		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒褐色		ナデ，曲線			ナデ		○
	375		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		ナデ			ナデ		○

第9表　出土土器観察表（6）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 金雲母	胎土 滑石	胎土 砂礫	胎土 分類	焼成	色調 外	色調 内	調整，文様 外器面	調整，文様 内器面	炭化物付着 分類	炭化物付着
60	380	5	○	◎	○	－	－	◎	B	○	暗褐色		貝殻条痕，列点〈貝〉	貝殻条痕	Ⅲ	○
	381		○	○	－	○	－	○	C	○	暗褐色		貝殻条痕	貝殻条痕		
	382		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒色	暗褐色	貝殻条痕	ナデ，連続刺突		○
	383		○	○	－	△	○	○	A	○	暗赤褐色		貝殻条痕，連続刺突	貝殻条痕		○
	384		△	△	－	△	－	△	B	○	灰褐色	黒褐色	貝殻条痕，連続刺突	貝殻条痕		
	385		△	△	－	△	－	△	B	○	灰褐色	黒褐色	貝殻条痕，連続刺突	貝殻条痕		
	386		○	○	－	△	－	○	B	○	褐色		貝殻条痕，連続刺突	貝殻条痕		
	387		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	淡褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉，刻目突帯	貝殻条痕		
	388		○	◎	－	◎	－	◎	C	◎	灰褐色		ナデ，連続刺突	工具ナデ		
	389		○	◎	－	◎	－	◎	C	◎	暗褐色		ナデ，連続刺突	ナデ		
	390		○	◎	－	△	－	◎	B	○	黒色	暗褐色	ナデ，連続刺突	ナデ，連続刺突		○
	391		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色		条痕，刻目突帯	貝殻条痕		
61	392		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		条痕〈ハケ目状〉	条痕	Ⅳ	
	393		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		条痕	貝殻条痕		
	394		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒褐色	灰褐色	条痕〈横〉，条線	条痕		
	395		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒褐色	青灰色	ナデ，条痕	条痕		○
	396		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		貝殻条痕	貝殻条痕		○
	397		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色		条痕	貝殻条痕		○
	398		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色		貝殻条痕	貝殻条痕		
	399		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		条痕	条痕		
	400		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		貝殻条痕	貝殻条痕		
	401		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色		貝殻条痕	貝殻条痕		○

第10表　出土土器観察表（7）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	岩片	砂礫	分類	焼成	色調 外面	色調 内面	調整、文様 外器面	調整、文様 内器面	分類	現化特付層
	402	5	○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	赤褐色	条痕		Ⅳ	○
	403		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗灰褐色		条痕，沈線(縦→ヘラによる折り返し)			○
	404		○	◎	-	◎	-	◎	A	○	黄褐色		条痕(縦→ヘラによる折り返し)			
	405		○	○	-	-	-	○	B	○	灰褐色		条痕			
61	406		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条痕			
	407		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	茶褐色		条痕			
	408		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		条痕，沈線			
	409		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒　色	茶褐色	条痕			
	410		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗茶褐色		貝殻条痕			
	411		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色	褐　色	条痕			
	412		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗茶褐色		貝殻条痕			
	413		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黄灰色		条痕			○
	414		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗黄褐色		条痕，ナデ			
	415		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		条痕			○
	416		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		条痕			
62	417		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黄褐色		条痕後ナデ			
	418		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黄褐色		条痕			○
	419		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色		条線			
	420		○	○	-	-	-	○	C	○	黒褐色		条痕(ハケ目)後沈線，突帯			○
	421		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条痕(ハケ目)後沈線，突帯			
	422		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		貝殻条痕，ナデ			○
	423		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	淡黄褐色	条痕，ナデ			○
	424		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条痕，ナデ			
	425		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色		条痕，沈線(縦→ヘラによる折り返し)		Ⅴ	
	426		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条痕，沈線(縦→ヘラ)			
	427		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，沈線			○
	428		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黄褐色		条痕，ナデ後沈線			
	429		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		条線			○
	430		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	淡赤褐色		ナデ，刻目，平行線			
	431		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ，沈線			
	432		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒　色	茶褐色	ナデ，刻目，沈線(縦)			
	433		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		ナデ，沈線(羽状)，平行線			
	434		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，沈線			
	435		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色		ナデ，沈線			
	436		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，沈線			
63	437		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	黄褐色	ナデ，沈線			
	438		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，沈線			
	439		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		ナデ，沈線			
	440		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色		ナデ，沈線			
	441		○	○	-	○	-	○	C	○	褐　色		ナデ，沈線			
	442		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色		ナデ，沈線			
	443		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ，沈線			
	444		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	淡褐色		ナデ，沈線			
	445		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ，沈線			
	446		○	○	△	○	-	○	B	○	褐　色		ナデ，平行線			
	447		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		ナデ，沈線			
	448		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色		条痕			
	449		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色		ナデ，沈線			
	450		○	○	-	○	-	○	C	○	褐　色		ナデ，沈線			
	510	3	○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗灰色		条痕後ナデ消し，刻目，微隆刻目突帯，沈線，ヘラミガキ様暗文	貝殻条痕	Ⅳ	○
73	511		○	◎	-	◎	-	◎	C	◎	暗茶褐色		貝殻条痕後ナデ消し，刻目，微隆突帯，相交弧文(貝)	貝殻条痕		○
	512		○	◎	-	△	-	◎	C	○	黒褐色		条痕，刺突，刻目突帯	貝殻条痕，連続刺突		
	513		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色		工具ナデ(縦)ナデ，突帯	ナデ		○
	514		○	○	-	△	-	○	B	○	暗褐色	灰褐色	条痕	工具ナデ後ナデ		
74	515		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒褐色		条痕，突帯，相交弧文(貝)	条痕		
	516		○	○	-	-	-	○	B	○	黒褐色		貝殻条痕，刻目	貝殻条痕後ナデ		○
	517		○	◎	○	◎	-	◎	B	○	黒　色	茶褐色	ナデ，刻目，微隆刻目突帯	ナデ		
	518		○	○	-	△	-	○	B	○	暗褐色		貝殻条痕，刻目突帯，沈線	貝殻条痕		

第11表　出土土器観察表（8）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土						焼成	色調		調整，文様		炭化物付着	
			石英	長石	雲母（黒）	雲母（金・銀）	赤褐粒	砂粒	分類	外面	内面	外器面	内器面	分類	
74	519	3	○	○	-	△	-	○	B	○	暗褐色	貝殻条痕，連続刺突，微隆刻目突帯	貝殻条痕	VI	○
	520		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色　黄灰色	ナデ，刻目	貝殻条痕後ナデ		○
	521		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色　茶褐色	ナデ，微隆突帯	工具ナデ，相交弧文（貝）		○
	522		○	○	○	○	-	○	B	○	淡褐色	ナデ，微隆突帯，沈線	工具ナデ		
	523		○	○	-	○	-	○	C	◎	暗褐色	ナデ，微隆刻目突帯	ナデ		
	524		○	○	○	◎	-	◎	C	○	黒褐色　茶褐色	ナデ，沈線，突帯	工具ナデ		
	525		○	○	○	-	-	○	B	◎	赤褐色	ナデ，突帯，条痕〈ヘラ状〉	ナデ		
	526		○	○	◎	-	◎	◎	C	○	茶褐色	条痕，条線，刻目突帯	条痕		
	527		○	○	-	○	-	○	C	○	黒褐色　茶褐色	ナデ，微隆刻目突帯	貝殻条痕		
	528		○	○	△	-	-	○	B	○	黒　色　黄褐色	条痕，微隆刻目突帯	ナデ		
	529		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黄灰色	ナデ，微隆刻目突帯，相交弧文〈貝〉	ナデ		
	530		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	淡褐色	ナデ，微隆刻目突帯，相交弧文〈貝〉	ナデ		
75	531		○	◎	-	-	-	◎	B	○	黄褐色　灰褐色	条痕，微隆突帯	ナデ		
	532		○	○	-	○	-	○	C	○	黒褐色　茶褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	貝殻条痕		
	533		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	淡褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	534		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色　茶褐色	条痕後ナデ消し，帯状列点，貝殻腹縁押圧	条痕		
	535		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色　黄褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	貝殻条痕後ナデ消し		
	536		○	○	-	○	-	○	C	◎	暗褐色　黒　色	ナデ，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	537		○	○	○	-	-	○	B	◎	赤褐色　灰褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	条痕〈ハケ目状〉		
	538		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	黒　色　茶褐色	工具ナデ，貝殻腹縁押圧，相交弧文〈貝〉	工具ナデ，貝殻条痕		○
	539		○	○	○	○	-	○	C	◎	黒褐色　赤褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	540		○	◎	-	-	-	◎	C	○	黒褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	541		○	-	-	-	-	○	B	○	黒褐色　灰褐色	ナデ，沈線，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	542		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	543		◎	◎	◎	-	-	◎	B	○	茶褐色　黒褐色	ナデ，相交弧文〈貝〉	工具ナデ		
	544		○	○	○	-	-	○	B	○	暗褐色　茶褐色	工具ナデ，帯状列点	貝殻条痕		
	545		○	-	-	-	-	○	B	○	暗褐色	貝殻条痕，貝殻腹縁押圧，列点	貝殻条痕		○
	546		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色　茶褐色	ナデ，刺突，帯状列点	ナデ，帯状列点		○
76	547		○	○	○	○	-	○	B	○	黒褐色	条痕ナデ消し，帯状列点	工具ナデ，ナデ		
	548		△	-	-	-	-	○	B	○	黄褐色	ナデ，帯状列点	条痕		
	549		○	○	○	○	-	○	B	○	褐　色	ナデ，帯状列点	貝殻条痕		
	550		○	○	-	-	-	○	B	○	灰褐色	条痕，帯状列点	ナデ		
	551		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色	条痕ナデ消し，帯状列点	条痕		
	552		○	○	-	-	-	○	B	◎	黒　色　暗赤褐色	ナデ，帯状列点	ナデ		
	553		○	○	-	-	-	○	B	○	赤褐色	ナデ，貝殻腹縁押圧，帯状列点	貝殻条痕		
	554		○	○	-	○	-	○	C	○	茶褐色　暗褐色	ナデ，帯状列点	条痕ナデ消し		
	555		○	○	○	○	-	○	B	○	茶褐色	ナデ，帯状列点	工具ナデ		
	556		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色	貝殻条痕	貝殻条痕		
	557		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	淡褐色	ナデ	貝殻条痕		
	558		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	灰褐色	貝殻条痕	貝殻条痕		
	559		○	◎	-	○	-	○	C	○	黒　色　赤褐色	工具ナデ	貝殻条痕		○
	560		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	赤褐色　灰　色	貝殻条痕	貝殻条痕		
	561		○	○	-	-	-	○	B	○	淡褐色	貝殻条痕	貝殻条痕		
	562		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色	貝殻条痕ナデ消し	貝殻条痕ナデ消し		
77	563		○	◎	-	◎	-	◎	C	△	暗赤褐色	条痕	条痕	IV	○
	564		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗赤褐色	工具ナデ	条痕ナデ消し		
	565		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色	ナデ，条線	条痕ナデ消し		
	566		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	工具ナデ〈ヘラミガキ様〉	工具ナデ		○
	567		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	条痕	工具ナデ		
	568		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	貝殻条痕	貝殻条痕		○
	569		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色	条痕，条痕ナデ消し	工具ナデ		
	570		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	条痕	ナデ，条痕		
	571		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	条痕	貝殻条痕		
	572		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	条痕〈ハケ目状〉	条痕ナデ消し		
	573		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕		
	574		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色	貝殻条線	貝殻条痕		○
	575		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	褐　色	条痕	条痕		
	576		○	◎	-	◎	-	◎	C	○	暗褐色	条痕	貝殻条痕		○

第12表　出土土器観察表（9）

挿図番号	遺物番号	出土層	胎土 長石	胎土 石英	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 赤褐粒	胎土 砂粒	焼成	色調 外面	色調 内面	調整、文様 外器面	調整、文様 内器面	脱化物付着 分類
	577	3	○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色　黒色	条痕		Ⅳ
77	578		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色　黒色	条痕		
	579		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色	条痕	ナデ	
	580		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色	貝殻条痕ナデ消し	貝殻条痕ナデ消し	
	581		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕ナデ消し	
	582		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	貝殻条痕	
	583		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	ナデ、条線	条痕	
	584		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗茶褐色	条痕	条痕	
	585		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕ナデ消し	
	586		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色　黒褐色	条線	工具ナデ	
	587		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕	
	588		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	貝殻条痕	
	589		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕〈ハケ目状〉	
	590		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒色　茶色	条痕	貝殻条痕	
	591		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	貝殻条痕	
78	592		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	茶褐色	条痕、刻目	条痕	
	593		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黄灰色	条痕	工具ナデ〈ケズリ〉	
	594		○	○	－	－	－	○	B	○	赤褐色	条痕	条痕	
	595		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色　黒褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	596		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黄褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	597		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕	
	598		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	貝殻条痕	条痕〈ハケ目状〉	
	599		○	◎	－	◎	－	◎	C	◎	暗褐色	貝殻条痕〈カキアゲ〉	貝殻条痕	
	600		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒褐色　茶色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	601		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒色　淡褐色	条痕	工具ナデ	
	602		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	黒色　茶褐色	条痕	条痕ナデ消し	
	603		○	◎	－	◎	－	◎	C	◎	暗褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	604		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	条痕ナデ消し	
	605		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	606		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	茶褐色	条痕	条痕ナデ消し	
	607		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	608		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色　暗褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	609		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	貝殻条痕	
	610		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	貝殻条痕	ナデ	
	611		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰色　黒色	条痕	貝殻条痕	
	612		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色　茶褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	
	613		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	淡赤褐色　暗褐色	条痕	貝殻条痕	
	614		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	淡褐色　黒褐色	条痕	条痕	
79	615		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	淡褐色　黒褐色	条痕	工具ナデ	
	616		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色　黒色	条痕	貝殻条痕	
	617		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕ナデ消し、沈線	条痕〈ハケ目状〉	Ⅴ
	618		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色	条痕ナデ消し、沈線	工具ナデ	
	619		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕ナデ消し、沈線	条痕ナデ消し	
	620		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	灰褐色	条痕ナデ消し、沈線	条痕〈ハケ目状〉	
	621		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕ナデ消し、沈線	工具ナデ	
	622		○	◎	○	－	－	◎	B	○	暗赤褐色　茶褐色	条痕ナデ消し、沈線	貝殻条痕	
	623		○	◎	△	◎	－	◎	C	○	暗褐色　淡褐色	条痕ナデ消し、沈線	工具ナデ	
	624		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色　褐色	ナデ、沈線	工具ナデ	
	625		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	褐色	条痕	条痕	
	626		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗黄褐色	条痕	貝殻条痕	
	627		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗褐色	条痕	工具ナデ	
	628		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色	条痕ナデ消し、沈線	ナデ	
	629		○	◎	－	－	－	◎	C	◎	黒褐色	条痕ナデ消し、沈線、突帯	工具ナデ	
80	630		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	赤褐色　淡褐色	条痕	条痕	
	631		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色	条痕ナデ消し、沈線	貝殻条痕	
	632		○	◎	○	◎	－	◎	C	○	灰　色	条痕ナデ消し、沈線	不明	
	633		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	暗赤褐色	条痕	ナデ	
	634		○	◎	－	◎	－	◎	C	○	淡褐色	条痕	条痕	

第13表　出土土器観察表（10）

掲図番号	通番番号	出土層	胎土						焼成		色調		調整、文様			炭化物付着
			石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	分類		外面	内面	外器面	内器面	分類	
	674	2	◎	○	◎	○	◎	C	○		灰白色		ナデ、刷目突帯、ヘラ刺突	ナデ	V	
	675		○	○	○	○	○	C	○		黄白色		ナデ、沈線、微隆突帯	ケズリ		
	676		○	◎	◎	○	◎	C	○		黄褐色		条痕、刷目突帯	条痕		
	677		△	○	○	○	○	B	○		暗灰褐色		ナデ、凹線	条痕		
	678		△	○	○	○	○	B	○		灰褐色		ナデ、凹線	ナデ		
	679		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、条痕、刺突、凹線	貝殻条痕	Ⅶ	
	680		○	◎	△	◎	○	C	○		茶褐色		貝殻条痕、貝腹縁刺突	貝殻条痕		
	681		○	◎	○	◎	◎	C	○		淡褐色		ナデ、連続刺突、凹線	工具ナデ		
	682		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、凹線、連続刺突	工具ナデ		
87	683		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗赤褐色		ナデ、凹線、連続刺突	不明		
	684		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、連続刺突、凹線	貝殻条痕		
	685		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色		条痕、刺突	貝殻条痕		
	686		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色	灰褐色	ナデ、三角、平行線	ナデ	Ⅶ	
	687		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗赤褐色		工具ナデ〈ミガキ様〉、一部条痕	工具ナデ〈ミガキ様〉		
	688		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、沈線	ナデ		
	689		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗茶褐色		ナデ、沈線、貝腹縁刺突、連続刺突	工具ナデ		
	690		○	○	○	○	◎	C	○		黒褐色		ナデ、貝腹縁刺突〈羽状〉	貝殻条痕		
	691		○	◎	○	◎	◎	C	○		茶褐色		貝殻条痕	貝殻条痕	Ⅶ	
	692		△	○	○	○	○	B	○		黒褐色	赤褐色	ナデ、貝殻条痕	貝殻条痕	Ⅸ	
	693		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、細沈線、貝腹縁刺突	ナデ		
	694		○	◎	△	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、連続刺突	貝殻条痕		
	695		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗赤褐色		ナデ、連続刺突、貝腹縁刺突	ナデ		
	696		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色	茶褐色	ナデ、貝腹縁刺突	ナデ		
	697		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、連続刺突、貝腹縁刺突	条痕		
	698		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	ナデ、刺突		
	699		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	条痕、刺突		
	700		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	ナデ、刺突		
	701		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色	茶褐色	ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	条痕、貝腹縁刺突		
	702		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、貝腹縁刺突、連続刺突	ナデ、貝腹縁刺突、刺突		
	703		○	◎	○	◎	◎	C	○		茶褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	条痕		
	704		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	ナデ、刺突		
88	705		○	◎	○	◎	◎	C	○		茶褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	ナデ、貝腹縁刺突、刺突		
	706		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線	ナデ、刺突		
	707		○	◎	○	◎	◎	C	○		黄褐色		ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、貝腹縁刺突、連続刺突	条痕、刺突		
	708		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色	赤褐色	ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	ナデ、条痕、貝腹縁刺突、刺突		
	709		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色	赤褐色	ナデ、貝腹縁刺突、細沈線、連続刺突	ナデ、貝腹縁刺突、刺突		
	710		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突、連続刺突	ナデ、貝腹縁刺突		
	711		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色	茶褐色	ナデ、貝腹縁刺突、刺突	条痕、刺突		
	712		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色	茶褐色	ナデ〈胴部下へラミガキ様〉、貝腹縁刺突	貝殻条痕、貝腹縁刺突		
	713		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突	条痕		
	714		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、細沈線、貝腹縁刺突、連続刺突	ナデ		
	715		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		ナデ、貝腹縁刺突	工具ナデ		
	716		○	◎	○	○	◎	B	○		黄褐色		ヘラミガキ様、沈線	ナデ		
	717		○	○	○	○	○	B	◎		灰褐色		貝殻条痕	貝殻条痕		
	718		○	○	○	○	○	B	◎	暗赤褐色	灰色		貝殻条痕	貝殻条痕		
	719		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		条痕、細沈線	条痕、貝腹縁刺突		
	720		○	◎	○	◎	◎	C	○		暗褐色		条痕、沈線	条痕	Ⅶ	
89	721		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		条痕	条痕		
	722		○	◎	○	◎	◎	C	○		黒褐色		ナデ	ナデ		
	723		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		条痕、圧痕	ナデ		
	724		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		ナデ	ナデ		
	725		○	◎	○	◎	◎	C	○		赤褐色		工具ナデ	工具ナデ		
	726		○	○	○	○	○	B	◎		黒色		ヘラミガキ	ヘラミガキ		○

第14表　17層出土石器計測表（1）

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第22図	119	局部磨製石斧	頁岩	12.8	6.0	2.2	210.0		―マ
	120	局部磨製石斧	頁岩	18.0	7.6	2.3	580.0		―マ2014
	121	局部磨製石斧	頁岩	10.6	5.2	1.4	118.0		―マ1984
	122	局部磨製石斧	ホルンフェルス	9.1	5.6	2.5	180.0		―マ2412
	123	打製石斧	頁岩	12.2	5.2	2.0	124.0		―マ1986
	124	打製石斧	ホルンフェルス	10.8	5.8	1.6	140.0		―マ
	125	打製石斧	頁岩	12.8	5.2	1.7	174.0		―マB217
	126	打製石斧	砂岩	12.0	4.2	1.9	124.0		―マ2037
	127	打製石斧	頁岩	10.7	5.6	1.7	152.0		―マB148
	128	打製石斧	ホルンフェルス	10.8	6.4	3.6	375.0		―マ2264
第23図	129	打製石斧	頁岩	14.8	8.1	2.4	370.0		―マ2148
	130	打製石斧	頁岩	13.4	7.8	1.6	225.0	未完成品	―マ2100
	131	打製石斧	砂岩	8.6	7.2	1.9	165.0	未完成品	―マ2153
第24図	132	磨石・敲石	砂岩	13.2	8.2	5.2	830.0		―マB181
	133	磨石・敲石	砂岩	10.4	7.0	4.2	400.0		―マB344
	134	磨石・敲石	砂岩	11.2	5.1	3.6	314.0		―マ2506
	135	磨石	砂岩	9.4	8.7	4.5	530.0		―マ2215
	136	磨石	砂岩	7.2	5.1	2.0	117.0		―マ2492
	137	磨石	花崗岩	10.8	9.4	6.0	885.0		―マ2063
	138	磨石	砂岩	7.8	5.2	3.3	201.0		―マ2237
	139	敲石	砂岩	9.6	6.6	4.6	415.0		―マ2204
	140	敲石	頁岩	6.2	5.2	4.5	188.0		―マ西
第25図	141	敲石	粘板岩	11.2	4.4	2.2	130.0		―マ1997
	142	敲石	砂岩	10.3	3.6	1.5	78.0		―マ1919
	143	敲石	頁岩	7.3	3.0	1.5	48.0		―マB104
	144	敲石	ホルンフェルス	14.0	5.4	1.4	144.0		―マ1985
	145	敲石	頁岩	10.2	5.1	1.1	113.0		―マ2342
	146	敲石	頁岩	10.3	4.7	2.5	195.0		―マB189
	147	敲石	粘板岩	9.8	5.6	1.9	128.0		―マB294
	148	敲石	ホルンフェルス	12.2	5.3	3.5	290.0		―マ1920
	149	敲石	花崗岩	9.6	8.0	5.8	635.0		―マ2159
	150	敲石	砂岩	9.6	4.0	2.9	167.0		―マ1925
第26図	151	石皿	砂岩	42.0	38.6	9.2	20.8kg		―マB240
第27図	152	砥石	砂岩	12.0	9.4	5.4	675.0		―マB139
	153	凹石	砂岩	7.8	5.0	1.8	137.0		―マ西
	154	剥片石器	頁岩	12.4	10.8	1.6	207.0		―マ2269
	155	剥片石器	頁岩	12.9	6.8	1.5	120.0		―マ2394
	156	剥片石器	砂岩	11.2	7.2	1.5	84.0		―マB184
	157	剥片石器	頁岩	6.8	8.4	1.0	82.0		―マ1998
	158	剥片石器	頁岩	5.0	5.4	1.5	50.0		―マ2469
	159	剥片石器	砂岩	5.4	8.2	1.3	66.0		―マ2231
第28図	160	礫石器	砂岩	9.1	16.6	3.4	545.0		―マ2156
	161	礫石器	頁岩	12.4	10.2	3.4	390.0		―マB151
	162	礫石器	頁岩	11.4	13.4	2.8	365.0		―マB264
	163	礫石器	頁岩	9.2	9.9	1.7	250.0		―マ1958
	164	礫石器	砂岩	10.8	11.0	2.0	240.0		―マ2226
	165	礫石器	頁岩	6.6	14.4	1.1	123.0		―マ1962
	166	礫石器	砂岩	7.4	8.8	1.5	150.0		―マ1974
	167	礫石器	頁岩	7.0	9.5	1.1	90.0		―マ2253
	168	礫石器	砂岩	16.4	13.4	2.6	375.0		―マ西
	169	礫石器	頁岩	16.4	6.4	1.8	163.0		―マB190

第15表　17層出土石器計測表（2）

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第29図	170	礫石器	砂岩	14.8	9.8	2.7	405.0		ーマ2261
	171	礫石器	砂岩	10.0	7.2	2.8	230.0		ーマ245
	172	礫石器	砂岩	6.4	8.2	2.2	135.0		ーマ223
	173	礫石器	粘板岩	9.1	7.2	2.0	125.0		ーマ2230
	174	礫石器	粘板岩	7.7	11.0	2.9	300.0		ーマ2380
	175	礫石器	砂岩	8.1	5.0	3.2	173.0		ーマ西
	176	軽石製品	軽石	13.1	7.0	3.8	68.0		ーマ2108
	177	礫石器	砂岩	5.8	8.2	1.1	32.0		ーマ1977

第16表　9～15層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第33図	208	打製石斧	粘板岩	7.0	5.8	1.5	69.0	15層	ーマ
	209	打製石斧	頁岩	8.3	5.0	1.8	100.0	15層	ーマ1894
	210	磨石	砂岩	9.8	7.2	5.0	510.0	15層	ーマB
	211	敲石	砂岩	13.1	5.3	4.4	485.0	15層	ーマ西
	212	石皿	粘板岩	9.9	6.8	2.3	159.0	15層	ーマB
	213	剥片石器	砂岩	6.6	11.4	2.0	119.0	15層	ーマ1882
	214	剥片石器	砂岩	8.6	12.0	2.4	182.0	15層	ーマ1885
	215	礫石器	砂岩	8.7	10.4	3.5	355.0	15層	ーマ1898
	216	礫石器	頁岩	9.2	5.4	1.5	83.0	15層	ーマ2376
第34図	217	礫石器	頁岩	8.0	10.5	1.4	153.0	15層	ーマ中央
	218	礫石器	頁岩	12.5	5.4	2.2	150.0	11層	ーマ1532
	219	剥片石器	頁岩	3.4	9.8	1.0	28.0	15層	ーマ中央
	220	剥片石器	砂岩	7.4	7.8	1.5	83.0	10層	ーマ1531
	221	剥片石器	砂岩	4.2	8.0	1.5	51.0	9層	ーマ1739
	222	剥片石器	粘板岩	5.8	11.2	1.5	135.0	9層	ーマ1483

第17表　8層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第49図	333	打製石斧	砂岩	18.0	7.5	2.3	370.0		ーマ
	334	打製石斧	砂岩	14.8	7.8	2.2	315.0		ーマ2284
	335	打製石斧	砂岩	10.1	3.8	1.5	78.0		ーマ2282
	336	打製石斧	砂岩	8.7	3.9	1.3	50.0		ーマ1046
	337	打製石斧	粘板岩	17.8	10.0	1.4	345.0		ーマB
	338	磨石	ホルンフェルス	10.3	9.6	4.5	680.0		ーマ2273
	339	磨石	砂岩	11.3	7.8	3.4	420.0		ーマ1078
	340	磨石	ホルンフェルス	8.2	9.0	4.4	520.0	裏面に朱	ーマ2275
第50図	341	磨石	砂岩	12.9	8.8	4.5	725.0		ーマ2117
	342	磨石・敲石	砂岩	12.8	7.9	2.6	410.0		ーマ中央
	343	敲石	砂岩	18.6	5.9	3.6	580.0		ーマ1129
	344	敲石	砂岩	12.2	2.7	1.8	69.0		ーマ2272
	345	敲石	粘板岩	19.1	3.6	1.7	189.0		ーマ1087
	346	敲石	砂岩	16.0	7.6	4.5	835.0		ーマB
	347	敲石	砂岩	10.3	4.4	1.4	77.0		ーマB
	348	敲石	頁岩	13.0	6.2	2.9	395.0		ーマ1753
第51図	349	石核	砂岩	30.6	25.8	12.6	11.7kg		ーマ1118

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第52図	350	凹石	砂岩	13.5	9.4	4.8	685.0		ーマ1075
	351	砥石	砂岩	23.2	11.7	7.3	2300.0		ーマ
	352	石皿	砂岩	20.5	15.2	3.8	1630.0		ーマ
	353	剥片石器	砂岩	6.2	12.0	1.8	99.0		ーマ1855
	354	剥片石器	砂岩	4.8	11.8	2.3	154.0		ーマ1350
	355	剥片石器	砂岩	6.0	9.5	1.4	90.0		ーマ1356
	356	剥片石器	粘板岩	13.2	9.7	1.8	80.0		ーマA802
	357	剥片石器	砂岩	7.8	5.5	1.7	82.0		ーマ1857
	358	剥片石器	砂岩	11.8	15.7	2.0	220.0		ーマ1810
第53図	359	剥片石器	砂岩	6.8	10.8	0.8	70.0		ーマ1350
	360	剥片石器	粘板岩	2.3	8.2	0.6	17.0		ーマ1860
	361	礫石器	粘板岩	10.4	7.2	2.5	262.0		ーマ1774
	362	礫石器	頁岩	9.3	5.8	1.4	48.0		ーマ1384
	363	礫石器	頁岩	5.8	3.5	0.9	17.0		ーマ
	364	礫石器	粘板岩	10.6	18.3	3.4	580.0		ーマ1841
	365	礫石器	粘板岩	10.3	6.1	2.3	107.0		ーマ1857
	366	礫石器	頁岩	7.8	5.8	2.0	120.0		ーマB
	367	礫石器	頁岩	10.3	5.8	2.5	226.0		ーマB
	368	礫石器	頁岩	10.0	4.8	1.5	90.0		ーマ
第54図	369	礫石器	砂岩	17.4	12.6	4.1	555.0		ーマ1867
	370	礫石器	頁岩	18.5	11.4	2.5	610.0		ーマ1779

第18表　6～7層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第56図	376	敲石	頁岩	12.8	6.0	4.4	455.0	7層	ーマ2271
	377	敲石	頁岩	12.3	5.8	2.4	400.0	6層	ーマ東969
	378	磨石	ホルンフェルス	14.6	6.2	2.7	430.0	6層	ーマ東
	379	石皿	砂岩	15.3	10.0	5.5	1105.0	6層	ーマ1661

第19表　5層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第64図	451	磨製石斧	頁岩	14.0	5.2	2.7	273.0		ーマ1107
	452	局部磨製石斧	ホルンフェルス	12.4	4.5	2.5	220.0		ーマ1685
	453	局部磨製石斧	頁岩	14.8	5.3	3.3	400.0		ーマ860
	454	局部磨製石斧	ホルンフェルス	14.0	5.4	2.8	300.0		ーマ712
	455	打製石斧	粘板岩	26.4	10.4	4.4	1100.0	未完成品	ーマ1597
	456	打製石斧	粘板岩	16.7	7.9	2.3	355.0	未完成品	ーマ418
	457	打製石斧	粘板岩	14.2	5.6	2.0	169.0		ーマ775
第65図	458	打製石斧	砂岩	14.0	5.8	3.4	395.0		ーマ1584
	459	打製石斧	砂岩	11.8	6.2	3.0	295.0		ーマ西
	460	打製石斧	砂岩	11.5	6.1	1.7	142.0		ーマ899
	461	打製石斧	粘板岩	18.6	14.1	3.0	780.0		ーマ595
	462	打製石斧	砂岩	14.6	9.4	4.5	615.0	未完成品	ーマ1569
	463	打製石斧	砂岩	11.8	10.4	2.8	415.0	未完成品	ーマ1598
	464	打製石斧	粘板岩	14.2	11.5	3.4	460.0	未完成品	ーマ1622
	465	敲石	頁岩	20.4	6.6	2.2	510.0		ーマ835
	466	敲石	頁岩	19.4	6.6	2.6	505.0		ーマ2287
	467	敲石	砂岩	15.2	7.0	3.4	590.0		ーマ1589

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第66図	468	礫石器	粘板岩	16.0	7.6	2.2	395.0		ーマ東
	469	礫石器	砂岩	11.0	9.0	3.0	234.0		ーマ1660
	470	磨石	砂岩	10.7	9.2	4.4	650.0		ーマ877
	471	磨石	砂岩	17.3	9.8	4.8	1140.0		ーマ682
	472	磨石	砂岩	7.6	10.8	5.1	610.0		ーマ1586
	473	磨石	砂岩	9.2	7.9	5.3	420.0		ーマ788
	474	磨石	砂岩	12.6	7.4	7.4	745.0		ーマ
	475	磨石	ホルンフェルス	12.9	5.6	2.4	280.0		ーマ789
	476	磨石・敲石	砂岩	9.2	7.6	3.7	410.0		ーマ881
第67図	477	敲石	砂岩	17.4	4.4	3.3	300.0		ーマ715
	478	敲石	ホルンフェルス	14.2	4.5	3.5	325.0		ーマ870
	479	敲石	砂岩	11.4	7.3	4.8	550.0		ーマ2285
	480	敲石	砂岩	12.0	5.6	2.1	212.0		ーマ1104
	481	敲石	砂岩	12.8	6.0	2.4	256.0		ーマ1545
	482	敲石	頁岩	8.2	6.5	2.0	185.0		ーマ717
	483	敲石	砂岩	13.0	6.8	3.3	510.0		ーマ1649
	484	敲石	花崗岩	12.0	12.0	6.4	1340.0		ーマ2291
	485	石皿	砂岩	11.8	10.5	5.4	1080.0		ーマ東
	486	石皿	砂岩	13.6	17.8	5.0	1840.0		ーマ1417
第68図	487	剥片石器	粘板岩	15.0	11.5	2.1	264.0		ーマ875
	488	剥片石器	砂岩	11.2	7.0	1.8	159.0		ーマ796
	489	剥片石器	砂岩	10.2	6.0	3.0	293.0		ーマ1643
	490	剥片石器	砂岩	10.0	12.0	1.7	230.0		ーマ
	491	剥片石器	ホルンフェルス	7.6	9.2	2.5	158.0		ーマ1606
	492	剥片石器	頁岩	6.6	5.7	1.5	78.0		ーマ1448
	493	剥片石器	頁岩	4.2	9.6	1.5	61.0		ーマ1636
	494	剥片石器	頁岩	3.6	9.6	1.1	41.0		ーマ1314
	495	剥片石器	頁岩	4.0	8.9	1.5	50.0		ーマ1638
	496	剥片石器	砂岩	8.8	7.8	1.8	151.0		ーマ1462
	497	剥片石器	頁岩	11.0	5.4	1.4	104.0		ーマ699
第69図	498	剥片石器	頁岩	6.3	11.8	1.0	80.0		ーマ東
	499	剥片石器	頁岩	6.0	11.5	1.1	90.0		ーマ1596
	500	礫石器	頁岩	11.2	8.8	2.4	262.0		ーマ1538
	501	礫石器	粘板岩	8.0	8.3	1.8	112.0		ーマ1637
	502	礫石器	粘板岩	6.8	8.3	1.7	101.0		ーマ1644
	503	礫石器	砂岩	18.2	14.1	5.6	1600.0		ーマ1105
	504	礫石器	頁岩	5.4	5.4	8.5	80.0		ーマ1615
	505	剥片石器	粘板岩	6.3	8.2	1.0	47.0		ーマ西
	506	礫石器	砂岩	10.4	11.4	4.0	500.0		ーマ821
	507	礫石器	頁岩	12.3	9.3	3.0	270.0		ーマ西
	508	礫石器	頁岩	21.3	7.0	2.0	305.0		ーマ842
	509	剥片石器	頁岩	14.6	9.9	2.2	385.0		ーマ743

第20表　4層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第81図	635	礫石器	頁岩	10.5	4.5	2.6	168.0		ーマC956
	636	磨石・敲石	砂岩	15.5	10.0	5.8	1150.0		ーマC941
	637	敲石	頁岩	13.2	4.2	2.0	133.0		ーマ162
	638	敲石	頁岩	9.9	5.4	2.6	188.0		ーマ
	639	敲石	頁岩	31.1	6.4	5.8	1740.0		ーマ159
	640	敲石	砂岩	32.4	8.8	6.2	2710.0		ーマ
	641	すりきり	砂岩	6.8	8.5	0.5	49.0		ーマ949
	642	砥石	砂岩	8.0	5.0	3.2	203.0		ーマC943
	643	剥片石器	砂岩	6.0	12.3	1.7	140.0		ーマC951

第21表　3層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第82図	644	整形石斧	頁岩	14.7	2.0	1.7	80.0		ーマ138
	645	磨石・敲石	砂岩	13.6	4.2	2.5	233.0		ーマ64
	646	磨石	砂岩	14.8	11.2	5.0	1300.0		ーマ
	647	磨石	頁岩	13.6	9.6	4.3	940.0		ーマ102
	648	磨石	砂岩	8.5	9.9	3.9	485.0		ーマ西
	649	磨石	砂岩	10.6	6.6	2.6	380.0		ーマ635
	650	磨石	砂岩	8.1	6.8	3.8	337.0		ーマ104
	651	敲石	砂岩	14.4	10.8	6.2	1210.0		ーマ1515
	652	敲石	頁岩	17.4	6.7	2.2	475.0		ーマ668
	653	敲石	頁岩	12.1	7.6	4.2	565.0		ーマ79
	654	敲石	頁岩	7.1	4.3	1.2	44.0		ーマ634
第83図	655	敲石	砂岩	10.2	9.6	5.0	640.0		ーマ636
	656	凹石	砂岩	11.3	8.3	4.8	410.0		ーマ
	657	磨石	花崗岩	10.6	9.2	6.0	795.0		ーマ1487
	658	磨石	砂岩	10.8	8.5	4.9	610.0		ーマ1238
	659	石皿	頁岩	14.9	5.5	5.4	650.0		ーマ658
	660	石皿	砂岩	8.5	7.8	7.2	780.0		ーマC77
	661	石皿	砂岩	8.8	6.5	2.0	185.0		ーマ99
	662	剥片石器	砂岩	11.0	5.6	1.5	118.0		ーマ9311
	663	剥片石器	砂岩	13.5	8.2	2.6	332.0		ーマ1494
	664	剥片石器	砂岩	17.7	9.0	3.8	500.0		ーマ236
	665	剥片石器	頁岩	4.6	10.2	2.6	96.0		ーマ168
	666	礫石器	砂岩	7.0	7.3	1.9	102.0		ーマC53
	667	礫石器	頁岩	6.4	8.2	2.0	127.0		ーマ
第84図	668	礫石器	砂岩	7.4	20.8	2.6	490.0		ーマ1491
	669	礫石器	砂岩	14.6	11.2	3.2	800.0		ーマ
	670	礫石器	頁岩	11.6	6.4	3.4	213.0		ーマ1316
	671	礫石器	頁岩	11.4	7.4	2.8	340.0		ーマC
	672	礫石器	ホルンフェルス	11.2	8.8	3.0	375.0		ーマ103
	673	礫石器	砂岩	10.8	8.8	2.6	314.0		ーマ西

第22表　2層出土石器計測表

挿図	番号	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	注記番号
第90図	727	打製石斧	砂岩	9.1	4.6	3.1	167.0		ーマC860
	728	磨石	砂岩	10.2	10.8	6.3	800.0		ーマC959
	729	磨石	砂岩	8.6	4.0	2.9	171.0		ーマC
	730	磨石・敲石	砂岩	11.6	9.1	4.8	730.0		ーマC894
	731	磨石・敲石	砂岩	9.1	8.6	4.0	400.0		ーマC868
	732	磨石・敲石	砂岩	13.8	9.8	6.4	1290.0		ーマC748
	733	磨石・敲石	砂岩	10.8	9.2	4.9	1350.0		ーマC703
	734	磨石・敲石	砂岩	11.4	10.5	6.3	1120.0		ーマC906
	735	磨石・敲石	砂岩	8.0	7.2	4.0	111.0		ーマC
第91図	736	磨石・敲石	砂岩	15.0	11.2	6.0	1710.0		ーマC796
	737	磨石・敲石	花崗岩	7.6	5.0	3.9	219.0		ーマC604
	738	敲石	砂岩	13.0	11.6	6.5	1450.0		ーマC960
	739	敲石	花崗岩	9.3	8.8	6.8	785.0		ーマC843
	740	敲石	頁岩	11.7	3.2	2.1	131.0		ーマC847
	741	敲石	砂岩	21.4	5.5	3.0	850.0		ーマC926
	742	敲石	砂岩	11.6	4.7	2.0	149.0		ーマC
	743	敲石	頁岩	7.2	4.4	2.4	136.0		ーマC850
	744	敲石	砂岩	13.4	7.8	3.6	590.0		ーマC680
第92図	745	敲石	砂岩	6.7	5.0	6.5	194.0		ーマC850
	746	砥石	砂岩	9.2	5.8	4.4	355.0		ーマC962
	747	砥石	砂岩	15.2	7.6	5.0	850.0		ーマC510
	748	砥石	砂岩	12.7	4.0	2.6	204.0		ーマC423
	749	礫石器	砂岩	9.2	4.7	1.2	68.0		ーマC862
	750	礫石器	頁岩	8.4	5.5	2.2	134.0		ーマC846
	751	礫石器	砂岩	3.7	7.2	0.9	34.0		ーマC802
	752	礫石器	砂岩	10.7	7.1	3.6	395.0		ーマC914
	753	礫石器	砂岩	8.5	8.2	4.6	260.0		ーマC829
	754	礫石器	砂岩	6.4	7.0	1.8	297.0		ーマC
	755	軽石製品	軽石	6.0	4.0	3.2	5.0		ーマC663

第Ⅴ章　考　察

第１節　時期区分と各時代の遺構について

土器については次節で記述しているが，17層から8層は Ⅰ 類の曽畑式土器を中心に出土し，5層で深浦様式の大龍タイプ（Ⅲ類）と条痕文土器（Ⅳ類）と曽畑系土器（Ⅴ類）が出土している。3層からは深浦式土器（Ⅵ類）を中心に，条痕文土器（Ⅳ類）とわずかに曽畑系土器（Ⅴ類）が出土した。Ⅵ類については，曽畑系土器のⅤ類や条痕文の系統のⅢ類とⅣ類との土器様式差が大きく，土器編年上からは17層から5層までと，3層で区分できる。なおⅢ類については水ノ江氏のいうところの尾田式とほぼ同じである[1]。石器組成からも，17層から5層までは大量に出土していた礫石器が3層で減少し，石斧も見られなくなる。

^{14}C年代については，試料名は発掘調査時の整理前の名称であり，No１の2号炉跡は17層の1号集石であり，No２の5号集石は8層の3号集石で，No３の2号土坑は5層の1号配石である。No４はそのまま17層である。5層まで5,000年前を越える年代である。

これらのことから，時期区分については，発掘調査当初はⅢ類土器を中期として考えていたが，5層までを前期とし，3層を中期，2層を後期として位置付けたい。

遺構は縄文時代の前期の曽畑式土器に伴って集石遺構が3基と石斧の集積遺構が検出された。集石遺構については特に8層で検出した3号集石が規模が大きかった。集石遺構についても形状にかなりの差があり，使用段階の違いか，機能の違いかは明確でない。同じ曽畑式土器の時期の長崎県長崎市深堀遺跡で石組炉跡として2基検出されている遺構[2]は，3号集石の底面の構造と類似する。曽畑式文化に伴う遺構の可能性が高い。

石斧の集積遺構については，縄文時代早期の上野原遺跡で5本を一単位としたものが数基検出されている。同じ時期で，牧園町高天原遺跡で4本の石斧[3]，加世田市椎ノ原遺跡で3本の石斧[4]，そのほかに縄文時代中期の春日式土器に伴って松山町前谷遺跡で3本[5]の集積遺構が検出されている。同じく前期とした5層からは1基の集石遺構と1基の配石遺構が検出されている。

縄文時代中期では2基の集石遺構が検出された。

縄文時代後期については，平成6年度の調査区については，撹乱が激しく，遺構を把握できなかった。市来式土器を中心に遺物が出土しており，平成7年度のC地点の一湊式土器を中心とする2層とは時期が異なる。それぞれの時期で遺跡の中心部が異なっていることが予想される。C地点では，全掘はしていないけれども，一湊式土器の時期の竪穴住居跡を検出した。この時期の竪穴住居跡は類例がなく，中央に石囲いの炉跡をもつものであった。掘り込みについては，貼り床や床面の更新とは別に，砂層の有機物による汚染の結果である黒色砂層を掘り下げた可能性もある。最終床面が石囲い炉と同一面であることは間違いない。鹿児島県では全般的に縄文時代の住居跡の検出例が時期によって限られており，住居跡の変遷を考えるうえでも貴重な資料である。なお南九州の縄文時代後期の竪穴住居跡は，方形から円形への推移が考えられており，草野式土器期には円形となっている。本遺跡出土の竪穴住居跡は方形のプランが考えられ，変遷や地域性を論じるうえで貴重な資料である。

なお各層の出土状況については，実測図を掲載した遺物のみをドットした。各層の全体での遺

物の出土状況は，それぞれで示した分布状況と同様の分布で，有意の差を認める分布状況を見いだせなかった。作業過程の中で全体の分布状況をおとしてあるが，本報告書では割愛した。

註

1)水ノ江和同　1990「西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡』同志社大学文学部文化学科

2)長崎市教育委員会　1984『長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告』長崎市教育委員会

3)牧園町教育委員会　1989『高天原遺跡』牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

4)加世田市教育委員会　1977『村原（椎ノ原）遺跡』加世田市埋蔵文化財調査報告書1

5)松山町教育委員会　1986『前谷遺跡』松山町埋蔵文化財調査報告書（1）

6)前迫亮一　1991「縄文時代の竪穴式住居－鹿児島県本土発見の試料集成－」『南九州縄文通信』No5
南九州縄文研究会

第2節　土器について

分類した出土土器を従来の土器型式に対応させると

Ⅰ類－曽畑式土器がこれにあたる。中村愿氏編年[1]に従うと，Ⅰa類は曽畑Ⅰ式土器，Ⅰb類は曽畑Ⅱ式土器，Ⅰc類は曽畑Ⅲ式土器となる。17層出土土器は中村愿氏編年のⅠ式，水ノ江和同氏編年[2]のⅠ式新，木村幾多郎氏編年[3]のⅠ式とⅡ式が混在する。8層出土土器は中村愿編年のⅡ式，水ノ江編年のⅡ式新，木村編年のⅢ式中心である。

Ⅱ類－田中良之氏[4]によって，再設定された轟C－D式がこれにあたろう。

Ⅲ類－日木山式土器[5]のなかで，認識されているが，その後深浦式土器に同様の施文があることから，土器の破片については深浦式土器として扱われることがあった。最近は尾田式土器との関係が注目されている。

Ⅳ類－従来轟系として扱われた土器である。

Ⅴ類－曽畑系土器　水ノ江編年のⅢ式で曽畑式土器の解体過程の土器として位置付けられている。

Ⅵ類－深浦式土器

Ⅶ類－市来式土器

Ⅷ類－丸尾式土器[6]

Ⅸ類－一湊式土器で，丸尾式からの変遷が追える資料として位置付けられる。Ⅸa類が一湊Ⅰ式にあたり，Ⅸb類が一湊Ⅱ式にあたる[7]。

曽畑式土器の伝播と同化とその解体過程について

曽畑式土器についての編年案は杉村彰一氏[8]・江坂輝弥氏[9]・中村愿氏・水ノ江和同氏・木村幾多郎氏・中村友博氏[10]の各氏が呈示し，また田中良之氏・田島龍太氏[11]・渡辺康之氏[12]・柴畑光博氏[13]が発掘調査の土器分析を通して，あるいは当時の地域の出土状況を概観して述べている。研究史的な論述は目的外であるので，ここでは今日最も活用されている，中村愿氏（1983）・水ノ江和同氏(1988)・木村幾多郎氏（1989）の3氏の編年について触れ，本遺跡出土の土器分類が何に拠ったか説明したい。以下，便宜上それぞれ中村愿編年，水ノ江編年，木村編年と呼ぶこととしたい。

中村愿氏は，型式変化を文様帯が時間的な変遷とともに，上の部分が省略されて，順次繰り上がり，器面調整が粗雑化していくととらえる。土器観察とともに遺跡の共伴関係や層位関係を検証し，表象的な部分について具体的な編年の目安を確立した。水ノ江氏は文様の区画に注目して，割り付けのあり方により編年を行っている。従来の文様の精粗を客観化し，その施文パターン・文様単位からの分析によって，朝鮮半島との関係を明らかにした。この編年は木村・栗畑両氏も基本的に支持するところである。文様観察から，技術的な分析へと，分析の深化がはかられている。中村編年への水ノ江氏の投げかけた課題については，水ノ江氏自身が解決を見いだしているが，あえて付け加えるならば，「第Ⅰ文様帯がなにゆえ編年の基準になるのか」「文様のせりあがりと文様の整然さの消失との関係が不明瞭である。」[4]については，文様のデホルメが主文様帯において行われ，転写されていくもので，それに伴って「文様のくずれ」つまりは割り付け線が省略されていくものと考えられている。このように考えると。主文様の分析から編年した中村友博氏の視点も重要であろう。「層位的に分離できるとはいいがたい。」については，本遺跡を含めて層位的な事例が今後裏付けていくものであろう。また「地域性」については，発掘事例の増加は絶えずその見直しを要求するものであり，最近の鹿児島県の発掘調査からは，その地域性より一体感をより強く感じるのである。解釈は研究の進展によって付加されるものであり，水ノ江氏の中村愿編年への批判は弁証法的意味で理解できる。なお曽畑式土器の起源については，朝鮮半島に起源をもとめるものと，九州の縄文土器群に起源を求めるのとに，対立的にとらえる見方があるが，両者ともにそれぞれの影響や系譜の融合については認識するところで，その主体性を問題としていることは明らかであり，水ノ江氏の「このことから，曽畑式文化はその成立に際し朝鮮半島からの外来的影響を受けてはいるが，あくまで日本列島における普遍的な縄文文化をその基盤としているといえよう。つまり曽畑式文化の成立と発展は，内在的要素が主体であり，外来的要素は従であったと性格づけることができ，稲作農耕受容期の状況ときわめて類似した状況が想定されているのである。」[5]に集約されよう。

本遺跡の分類は中村愿編年を基本としながら，区画線の在り方を考慮に加えるものである。

層位的な出土状況は，中村愿編年が見事に合致する。木村編年はさらに細分されているため，各層で混同がみられる。水ノ江編年では，曽畑式の後に編年された轟C－D式が，水ノ江編年の曽畑Ⅰ式土器・曽畑Ⅱ式土器と同じ層から出土している。条痕文系の土器である轟式土器から曽畑式を経て，ふたたび条痕文土器に変遷することは，型式学的な系統に矛盾する点もあったが，一湊松山遺跡では，曽畑式土器に条痕が残るものも多く，Ⅱ類とした轟C－D式が継続して製作されている。Ⅱ類は条痕系土器と曽畑式土器の融合型式ともいえ，つまり土器の製作技法は保存され続けたことを意味している。

17層出土土器に曽畑式土器の古い様相の滑石混入のⅠa類と，それを写した地元産のⅠa類のなかに，搬入品のⅠb類が混入し，9層でも地元産のⅠb類に，搬入品のⅠc類が出土している。8層では，ほとんどが地元産となっている。これは，島津義昭氏[6]のいうように伝播が波及的であったことを示しているものとも考えられる。曽畑式の古い段階で，オリジナルがはいり，これを写した土器がつくられ，それが使用されている時期に，つぎの新しい型式Ⅰb式が同一文化圏内（九州南西部）の搬入品としてあらわれる。伝播した土器の在地化と，それぞれの定着がわずかな時

間差をもっていたことが，胎土分析の結果判明した。曽畑式が在地化し，その文化が定着するや在地の土器が，同一文化圏の土器型式と同一歩調をとって展開して行くすがたが8層である。これら17層の状況は，田島氏が述べたように「主文様の簡略化が文様の多様性より後出の現象とみなされ，規画性のある完成された，なおかつ多様な文様要素が，成立期の狭義の曽畑式土器に存在していた」[17]ものと考えられ，この解体過程も，5層や3層の状況から，田島氏が「また胴部下半の沈線文が，粗い条痕状つまり，条痕状の地文に変化する現象が認められる。この条線化こそが，全面施文の曽畑式の基本的な消滅であり，……略」[18]のすがたが見られるのである。

曽畑式土器のセンターを西九州とした場合，すでに述べて来たような状況が想定されるが，曽畑式土器の初現型式あるいはもっと古い段階の土器型式は南九州でも出土しており，一体化した土器変遷も想定できる。その場合，曽畑式土器文化のセンターは土器の変遷とともに，九州の東シナ海沿岸に拡散したことが考えられる。

栗畑氏は，杉村氏が曽畑式土器のなかで新しく位置付けた日勝山遺跡出土のものについて，古いものとしてⅠ期に位置付けている[19]。大口盆地内に，古手の曽畑式土器が出土し，さらに天降川水系の横川町星塚遺跡[20]のより古相の曽畑式土器につながる土器群の存在は，単に曽畑式土器文化が波及し，在地化したばかりでなく，西南九州が一体化して，土器文化を形成していたことは明白であろう。金峰町阿多貝塚[21]，東市来町上二月田遺跡[22]，金峰町木落D・E地点[23]，頴娃町折尾遺跡[24]，横川町星塚遺跡，大口市日勝山遺跡などは，栗畑氏が，南九州を概観した時に「Ⅰ期のものは，今後南九州各地で発見される可能性があり，その伝播と定着は意外に早かったものと推察される。」[25]と指摘したが，それ以前からより一体的に展開したものと考えられ，伝播論的な発想だけでは説明しがたい状況が今日の発掘調査の成果で伺われるのである。

宮本一夫氏が指摘したように，東アジアにおける当該期の温暖で湿潤な環境が，外洋性漁労の活性化を招き，地域間交流を促した[26]。その範囲は西北九州と朝鮮半島の範囲だけでなく，九州の西南部も含めた広い範囲で，少なくとも一湊松山遺跡が南のセンターとして機能していたものと考えられる。一湊松山遺跡は，昭和32・33年の発掘調査時にも，今回調査地区の約30m海岸側の調査で，2枚の曽畑式土器の包含層から多量の遺物が出土しており[27]，今回の200㎡強の発掘調査で出土した遺物量からも，遺跡規模はかなり大きいものと判断できる。

深浦式について

深浦式土器は，小林久雄氏らが花渡川遺跡出土の縄文土器第3類の特徴を「黒褐色厚手の土器で硬く，裏表共に研磨され，勿論条痕はない。(中略) 隆起線上の一点より三条の同様隆起線を放射状に描き，其等の線上には刻目を附し，尚此隆起線間には細小な直線を併行して埋めて居る。」と説明し，枕崎市深浦遺跡において始めて出土したことから深浦式とした[28]。また河口貞徳氏によって型式が再設定されているが，その概念は「器形は口縁部は外反し，胴部は直線的に下り，ゆるやかに湾曲して丸底に終わる形で，口縁部の内湾するものも見られる。文様は刻目のある隆帯と沈刻線からなり，三角形・菱形・放射状などの形に隆帯文を貼付け，その間の空間を同様な細い沈刻線で埋めるもので，その間に環状の隆帯文をあしらったものもある。この他に，貝殻縁によって連点状の鋸歯文を加えたものもある。器面は内外ともに研磨されたものと，貝殻縁によって調整さ

れたものがある。[29]とされ，文様・器形の類似から阿多貝塚出土のV類土器続き，北手牧遺跡の層位関係から春日式に先行すると位置付けた。破片による型式設定が，その後の調査によりさらに諸属性が付加されたものである。現在では，轟Ⅲ式と曽畑式の影響下で花ノ木遺跡出土土器をあげ，深浦式は轟Ⅳ式の後続として，轟式から直接系譜を引くものとして前期後半に位置付けている。その後の発掘調査では，枕崎市鞍谷遺跡[30]で，山川町成川遺跡と同じく相交孤文の土器群と突帯・沈線の土器群の両者を深浦式として扱っている。筆者は深浦式と轟式の問題点や，深浦式についての型式認識が広がって．その後の土器分類に使用されたこと，相交孤分の土器群については，深浦式から分離させるべきであること等については以前指摘した[31]。柴畑氏は，中期前葉の土器群を大きく3つに分類し，Ⅰ類を曽畑式系統の沈線文系土器，Ⅱ類を押引き・刺突文系土器，Ⅲ類を突帯文系土器として．文様構成からⅠ類からⅢ類の順で変遷するとした。またⅡ類とⅢ類の系統については，曽畑式土器より後出することから，轟式土器から系譜を引くのは困難としている[32]。ただこうして分類したⅠ類からⅢ類を型式名で呼んでおらず，従来の型式名をグルーピングしたにとどまっている。一方で「片野タイプ」として口縁部に数条の刻目突帯を巡らせる押引き・刺突文系土器を呼んでいる。とすると，Ⅱ－A，Ⅱ－B，Ⅲ－A，Ⅲ－B，Ⅲ－Cの細分は，それぞれ「瀬ノ上タイプ」「星塚タイプ」「片野タイプ」「姪原タイプ」「深浦タイプ」「成川タイプ」として，編年観をしめせるのではなかろうか。ただしそれぞれの細分で，斜め方向の文様や曲線文などでA類とB類と細分することは，困難ではないだろうか。Ⅱ類にすでに文様のヴァリエーションができているので，Ⅲ類については相交弧文の有無などの文様との組み合わせや調整での細分が適当である。

本遺跡出土のⅢ類が桑畑氏のⅡ－A類で，V類は桑畑氏のⅢ類が相当する。5層から連続刺突文の土器が出土し，3層から突帯と相交孤文を施した土器が出土し，両者の層位的関係が明確にされた。相交孤文が新しい文様であると判断される。3層出土の連続刺突文を施文した土器群については，外器面が平滑に調整されており．Ⅲ類とは異なり，深浦式の連続刺突文の部分の破片であろう。

本遺跡の土器編年上の成果は次のとおりである。

- 条痕文土器の系統が曽畑式土器と併行して存在して行くこと。
- 曽畑式土器→曽畑系条痕文土器と展開するが，曽畑系条痕文土器と条痕文土器が併行する可能性がある。曽畑式土器の解体過程の1パターンが明確化したこと。
- 条痕文土器群が曽畑式土器に後続する段階が存在すること。
- 深浦様式については細分されること。

分類した土器群の縄文時代前期から中期にかけての編年は以下のとおりと考える。

前期　　中期

Ⅰa類⇨Ⅰb類⇨Ⅰc類⇨V類⇨　⇨

Ⅱ類　⇨　Ⅳ類　⇨　Ⅲ類　⇨　Ⅵ類

註

1）中村　慎　1982「曽畑式土器」『縄文土器の研究3』雄山閣

2）水ノ江和同　1988「曽畑式土器の出現」『古代学研究』第117号

3）木村幾多郎　1989「曽畑式土器様式」『縄文土器大観』1　小学館

4) 田 中 良 之　1982「曽畑式土器の展開」「末盧国」六興出版
5) 樋 口 清 之・乙 益 重 隆
1938「鹿児島県加治木町日木山洞窟遺跡の研究」「史前学雑誌」第10巻第2号
6) 前 迫 亮 一　1992「異系統土器文化の一接点」「南九州縄文通信」№6 南九州縄文研究会
7) 上 村 俊 雄　1986「一湊式土器の編年位置について」「南島考古」№10 沖縄考古学会
8) 杉 村 彰 一　1965「曽畑式土器論考」「九州考古学」24 九州考古学会
9) 江 坂 輝 弥　1967「縄文土器 九州編(5)(6)」「考古学ジャーナル№12・13」ニューサイエンス社
10) 中 村 友 博　1993「曽畑式土器の紋飾変遷について」「論苑考古学」
坪井清足さんの古希を祝う会編 天山舎
11) 田 島 龍 太　1982「業畑遺跡縄文時代～中期の土器群の編年と様相」「業畑」唐津市
12) 渡 辺 康 之　1984「第Ⅳ章 考察 Ⅱ 遺物の分布について」「Ⅲ 第Ⅲ群土器について」
「長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告」 長崎市教育委員会
13) 栄 畑 光 博　1987「南九州における曽畑式系土器群の動態とその背景」
「鹿大考古」6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
栄 畑 光 博　1993「南九州の曽畑式土器とその前後」「考古学ジャーナル365」ニューサイエンス社
14) 木ノ江和同　1990「西九州の曽畑式土器」「伊木力遺跡」同志社大学文学部文化学科
15) 註12) のp35
16) 島 津 義 昭　1993「曽畑式土器の世界」「考古学ジャーナル365」ニューサイエンス社
17) 註11)のp536
18) 註11)のp537
19) 註13)
20) 鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993『星塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査
報告書(7) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
21) 金峰町教育委員会　1978『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財調査報告書(1) 金峰町教育委員会
22) 東市来町教育委員会　1988「上二月田遺跡」東市来町埋蔵文化財調査報告書(1) 東市来町教育委員会
23) 金峰町教育委員会　1991「木落D-E地点」金峰町埋蔵文化財調査報告書(1) 金峰町教育委員会
24) 註13) のp23
25) 栄 畑 (1993) のp10
26) 宮 本 一 夫　1990「海峡を挟む二つの地域－山東半島と遼東半島，朝鮮半島南部と西北九州，
その地域性と伝播問題」「考古学研究」37-2 考古学研究会
27) 国 分 直 一・盛 園 尚 孝・重 久 十 郎　1967「鹿児島県屋久島一湊遺跡の発掘調査概報」
「考古学雑誌」第53巻第2号 日本考古学会
28) 小 林 久 雄・佳 谷 正 節　1940「薩摩国枕崎町花渡川遺跡」「考古学」第11巻第3号
29) 河 口 貞 徳　1980「縄文式土器」「石嶽遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(12) 鹿児島県教育委員会
1988「日本の古代遺跡38 鹿児島」保育社
30) 東　和 幸　1990「第Ⅳ章 第3節 土器」「第Ⅵ章 まとめ」「鞍谷遺跡」
枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 枕崎市教育委員会
31) 堂 込 秀 人　1991「まとめ」「羽山遺跡・姪原遺跡」横川町埋蔵文化財調査報告書(2) 横川町教育委員会
32) 栄 畑 光 博　1993「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉の土器について」
「鹿児島考古」第27号 鹿児島県考古学会

第3節　その他の遺物について

本遺跡の石器の特徴は，石鏃が出土していないことである。石匙などの小型の剥片石器もほとんどない。石斧・磨石・敲石・礫器・石皿の組成による石器群である。石斧の素材は円礫の礫面を残すものが多く，礫器も同様に礫面を残しているものが多い。円礫を打ち割ってできた鋭い周縁を活用して石斧や掻・削器の刃部をつくりだしている。石材は島内の粘板岩・頁岩や砂岩を用いている。5層まで礫器が目立つ。黒曜石については，小剥片が8層で2点出土しているが，それ以外に出土がなく，海洋性の文化のわりに石器素材の持ち込みはない。

深堀遺跡では曽畑式土器の時期に礫器・石錘・凹石など大形石器が目立つ。掻・削器類が卓越し，何らかの漁業に関係する作業場的な在り方を遺跡の特徴としている[1]。本遺跡の礫器についても同様の可能性を指摘し，今後類例の増加とともに一般化したいと考える。

個別の資料について，340のベンガラが付着した磨石について，第Ⅵ章第2節で土器付着例がないことから疑問点が呈示されているが，遺跡の一部の発掘調査であり，土器のみに使用を限定する必要もなく，縄文時代早期から使用が確認されている現在，曽畑式期の使用の可能性を示すものとして評価したい。349は石核としたが，チョッパーの可能性もある。746～748の砥石については，石器の説明で「用途に課題が残る」としたが，2層の後期においては擦り切り技法と石鋸などの研磨石器が存在することから，こうした石器が研がれたものと判断できる。

755は浮子とした軽石製品であるが，実用品であるかの検討が必要である。757の焼成粘土塊は，平成6年発掘調査された鹿児島県鹿屋市神野牧遺跡でやはり曽畑式土器に伴ってシダ類葉痕の焼成粘土塊が出土している。粘土の運搬や保存が幅広の葉っぱに包んでなされていたことがうかがわれる。土器の胎土分析で搬入・地元産の別を示したが，こうした土器づくりの具体的なイメージを呼び起こしてくれる遺物である。758は，有孔紡錘形土製品といわれるもので，上野辰雄氏によって熊本県の飽託郡北部町四方寄遺跡や熊本市龍田町陳内遺跡，竹ノ後遺跡などで採集されている[2]。後期末から晩期前半の遺跡で発見されており，研磨され沈線を施すなどの類似点が多い。

動物遺体については，砂丘遺跡でもあり，かなり良好に残存していると考えていたが，破片が多かった。縄文時代前期の資料としては重要であり，イノシシが小型で若い個体のものが多く，人間の関与が想像されなくもない。

この報告書をまとめるにあたり，以下の方々に資料収集で御協力いただいた。協力者として記名して感謝にかえたい。

熊本県文化課　江本直，長崎県文化課　高野晋司・川道寛，小値賀町教育委員会　塚原博，福江市教育委員会　松崎義治，長崎市教育委員会　宮下雅史，福岡県文化課　水ノ江和同

註

1)長崎市教育委員会　1984『長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告』
長崎市教育委員会

2)上野辰雄・富田紘一　1986『上野辰雄蒐集考古資料図録』第1集『縄文時代特殊遺物』編
肥後上代文化研究会

第Ⅵ章　同定・分析

第１節　上屋久町一湊松山遺跡出土の動物遺体

西中川　駿・吉野　文彦
（鹿児島大学獣医学科）

1. はじめに

鹿児島県下では，麦之浦，市来および草野貝塚や黒川洞穴など数多くの遺跡から動物遺体が検出されている。また，薩南諸島の種子島からは一陣長崎鼻や苦浜貝塚などからイノシシ，シカの出土は報告されている。しかし，屋久島からの動物遺体の出土は，1980年の調査では，クジラやウミガメ，魚類の報告をみるにとどまる。現在，屋久島にはヤクジカやヤクザルなどが生息しており，これらがいつ頃から生息しているかは全く明らかにされていない。

一湊松山遺跡は，鹿児島県熊毛郡上屋久町一湊にあり，県道拡幅工事に伴い，平成６年５月～７月に県埋文センターの堂込，肱岡両氏の指導の下に発掘調査され，縄文前期～晩期の遺構，遺物が検出されている。

今回調査を依頼された動物遺体は，発掘後当研究室に持ち込まれたもので，２cm位の長さに小さく砕かれた骨片で，これらから動物種や骨の種類を同定するのは極めて困難であった。ここでは，同定が可能であった遺物について，その概要を報告する。

2. 出土状況と出土動物種

一湊松山遺跡の土層は１層の表層（耕作土）から17層（黄白色砂層）まで確認され，動物遺体は，５・８・10・15・17層から出土しており，８層が最も多く288.7g，次いで５層（195.7g），17層（126.1g），記載カードなし（101.6g）で，総重量712.1gである。

動物遺体は哺乳類，爬虫類，両生類，魚類であり，それらはイノシシ，シカ，ウミガメ，ヒキガエルおよびサメ，タイなどである。

3．出土動物遺体の概要

ここでは動物種別および層別に出土骨について，その概要を述べる。

イノシシ（写真Ⅰ参照）

イノシシは，５・８・17層，カードなしから検出され，５層からは中手骨，指骨，大腿骨，脛骨などが出土している（写真１の１～６参照）。８層からは指骨，大腿骨，脛骨，足根骨，中足骨，趾骨などが出土している（写真１の７～16参照）。17層から頭蓋骨片，下顎骨片，上顎第三後臼歯，足根骨，趾骨などが検出されている。５層から出土した右第四指中節骨は，最大長16mmで，近位端の幅と径は11.1×10.3mmであり，他のいずれの骨も小さく，ホンドイノシシよりもむしろリュウキュウイノシシの大きさである。しかし，大腿骨や脛骨など骨端が分離しており，成長期の若い個体であることから，小格なのかもしれない。また，一部の骨は焼かれている。

シカ（写真Ⅱ・Ⅲ参照）

シカもイノシシと同じように，第5・8・17層，カードなしから検出され，5層からは頭蓋骨片，第二頚椎，手根骨，中足骨，指骨，および趾骨などが出土し，中足骨など割断されている(写真Ⅱの1～10参照)。8層からは，上腕骨，橈骨，および趾骨などが出土し，中足骨など割断されている（写真Ⅱの11～20参照)。17層およびカードなしからは角，手根骨，中手骨，指骨，脛骨，距骨，中足骨，趾骨などが出土している。5層から出土した左第4跡基節骨の最大長は25.3㎜で，中央幅と径は5.8×7.2㎜であり，8層からの右距骨の最大長は28.5㎜，幅と径は18.3×15.9㎜で，カードなしの距骨最大長は21.4㎜，幅と径は13.4×11.5㎜と非常に小さく，現生のヤクジカより小型である。また骨が焼かれており，形が変形しているものもあり，イノシシ同様に若い個体である。

その他の動物遺体（写真Ⅱの15～19参照)。

爬虫類の出土遺体は，ウミガメの指骨であり，両生類はヒキガエルの上腕骨，魚類はタイ類の上，下咽頭骨，サメ歯などわずかな出土量である。

4. 考　察

鹿児島県下で動物遺体の出土した縄文遺跡は，46カ所を数えるが，薩南諸島はわずか4ケ所で南西諸島（15ケ所）に比べて数少ない。今回調査した一湊松山遺跡は，昭和30年代から幾度か調査されているが，動物遺体については獣骨，魚骨として記載されているのみで，その詳細については報告されていない。今回の調査で，イノシシ，シカが検出されたことは極めて貴重で．また，屋久島における初めての報告である。

イノシシ，シカは九州本土では常に検出される動物であるが，シカはトカラ海峡を境に南西諸島の遺跡から出土していない。また，イノシシも県本土と南西諸島のものとは大きさは異なり，南西諸島のものは現生のリュウキュウイノシシとよく似て小型である。種子島の遺跡から出土するイノシシは，大型でニホンイノシシに類似しているが，本遺跡のものは小型である点，南西諸島のものと似ている。しかし，その由来についてはここでは明言できない。シカは小型で現生のヤクシカよりも小さいが，これは若い個体が多いためと考えられ，また，本遺跡出土のシカ末裔が，現生のヤクシカであるかどうかは興味ある問題であるが，よくわからない。これらの問題は，屋久島の他の遺跡からの出土例を待つことで解決されるかもしれない。

今回の調査でイノシシ，シカの遺体が検出されたことから，屋久島の縄文時代にイノシシ，シカが生息していたとこが確認された。しかし，本遺跡からのイノシシは，小型で若いことから縄文人が交流によって持ち込んだ可能性も考えられる。いずれにしてもイノシシ，シカが本遺跡から検出されたことは，薩南諸島で空白であった屋久島の縄文人が，海の幸のみではなく，イノシシ・シカを食していたことは明らかであり，今後の研究に極めて重要な資料となるであろう。

5. まとめ

上屋久町一湊松山遺跡出土の動物遺体について調査した。

1）出土した動物遺体は，哺乳類・爬虫類・両生類・魚類で，それらはイノシシ，シカ，ウミガメ，ヒキガエル，タイ，サメ類であり，細骨片のため動物別出土量は測定できないが，

総重量は712.1gである。

2）イノシシ，シカは小型で，若い個体のものが多い。骨は小さく砕かれ，焼かれているものが多い。これは当時の人々が食していたことを示すものであり，興味深い。

3）イノシシ，シカが検出されたことから，当時の屋久島の動物相を知る貴重な資料となるであろう。

参考文献

1．鹿児島県教育委員会：鹿児島市町村遺跡地名表　P1-175（1977）

2．金子浩昌：縄文時代の狩猟，魚撈，歴史公論，2，67-71（1979）

3．西中川駿他：鹿児島の縄文，弥生遺跡出土の動物遺体　鹿大農学術報告，43，19-24（1993）

4．Nishinakagawa, H. et al. :Mammals from Arehaological Sites of Jomon Period in Kagoshima Pref.　J.Mamm. soc, Japan, 19 , 57-66(1994)

写真の説明

写真Ⅰ

1～4：第5層出土のイノシシ　5，6：第5層下出土のイノシシ

7～16：第8層出土のイノシシ　17～21：第17層出土のイノシシ

22：カードなし

1．大腿骨	2．中手骨	3．中節骨	4．末節骨
5．中手骨	6．中節骨	7．11．大腿骨	8．中手骨
9．中節骨(指)	10．末節骨(指)	12．脛骨	13．中節骨(趾)
14．大腿骨	15．足根骨	16．中足骨	17．頭蓋骨片
18．上顎第三後臼歯	19．左下顎骨	20．足根骨	21．中節骨(趾)
22．中節骨(指)			

写真Ⅱ

1～6：第5層出土のシカ　7～10：第5層出土のシカ　11～20：第8層出土のシカ

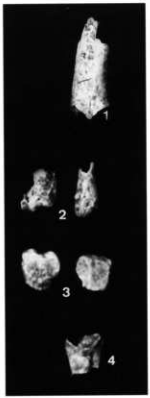
1．第二頚椎	2．手根骨	3．4．中足骨	5．基節骨(趾)
6．中節骨(趾)	7．頭蓋片	8．中足骨	9．基節骨(趾)
10．中節骨(趾)	11．上腕骨	12．橈骨	13．基節骨(指)
14．距骨	15．足根骨	16．中足骨	17．末節骨(趾)
18．左は頚椎，右は距骨		19．中足骨	20．基節骨(趾)，中節骨(趾)

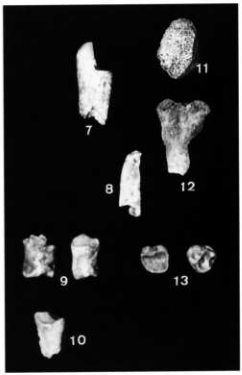
写真Ⅲ

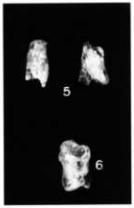
1～6：第17層出土のシカ　7～14：カードなしの出土のシカ

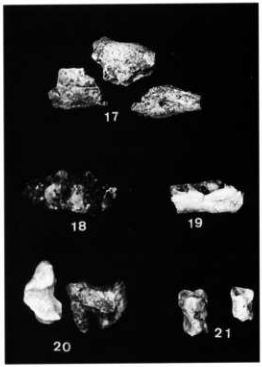
15：ウミガメ　16：ヒキガエル　17：タイ　18：タイ　19：サメ

1．角根	2．上顎後臼歯	3．手根骨	4．中手骨
5．中足骨	6．末節骨(指)	7．角	8．手根骨
9．10．顎骨	11．距骨(3個)	12．基節骨(趾)	
13．中足骨	14．末節骨(趾)	15．指骨	16．上腕骨
17．上咽頭骨	18．下咽頭骨	19．歯	

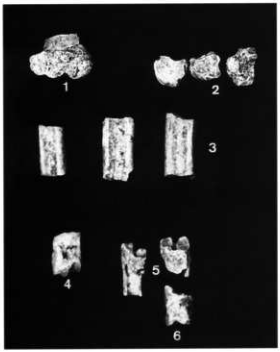


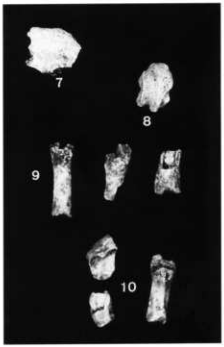


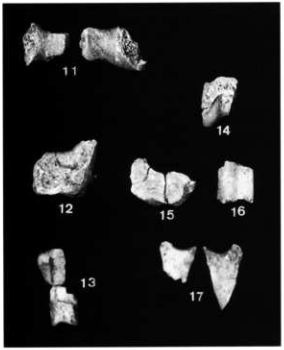


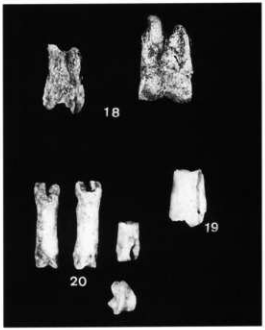


図版1　一湊松山遺跡出土動物骨

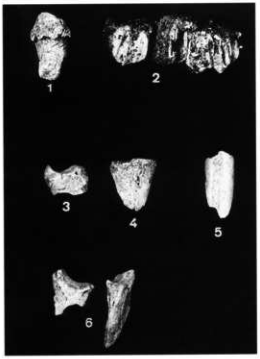


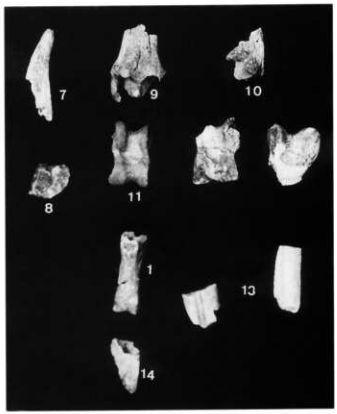


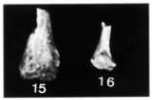


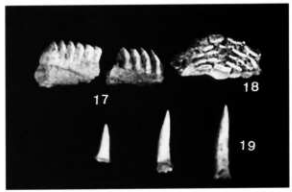


図版 2









図版3

第2節　一湊松山遺跡出土の赤色顔料について

大久保　浩　二
（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

一湊松山遺跡出土の縄文土器と磨石に，赤色顔料の付着が認められるものがあった。種子島・屋久島以南の南西諸島では，これまで赤色顔料の報告例は少なく，今回の発見は興味のあるところである。その顔料について粒子の形状の観察と成分の分析を行い，顔料の種類の同定を試みたのでここに報告する。

一般に赤色顔料の種類には，ベンガラと水銀朱が考えられる。それぞれは顔料の粒子の形状に特徴があり，主成分もベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），水銀朱は硫化水銀（HgS）と大きく異なっている。今回は主にEDSによるX線分析（成分分析）で検出される元素をもとに，赤色顔料の種類の同定を試みた。

分析に使用した機器は，鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡（低真空タイプ・LV-SEM）とエネルギー分散型X線分析装置（EDS）である。

1. 試　料

試料1　2層（縄文時代後期）出土の市来式台付皿形土器（第89図720）1点に塗彩された赤色顔料。皿部の口縁内面に塗彩されており，多くは剝落しているが，剝突文の内部には明瞭に残っていた。色調は暗赤色である。これを針先でわずかにサンプリングし，試料とした。

試料2　8層（縄文時代前期）出土の磨石（第49図340）に付着した赤色顔料。片側の全面に付着している。実体顕微鏡の観察では，礫面の凹凸に沿って赤色顔料が付着している様子が観察できる。なお，8層からは曽畑式土器が出土している。

2. SEM像の観察（図版1に試料1のSEM像を示す。）

試料1　中空のパイプ状をした粒子が密集しているのが観察できる。口径は1μm程で，長さはまちまちである。短いもので10μm程，長いものでは140μm程のものもある。

試料2　赤色顔料の粒子であると考えられる細かな粒子が観察されるが，不明瞭である。

3. X線分析

X線分析は加速電圧20kV，有効時間100秒，取り出し角度20.2°，作動距離200mmの測定条件で行った。測定の結果，試料1・試料2ともに，Feが顕著なピークとして検出された。Al,Siのピークも検出されたが，これらは土壌からの汚染であると考えられる。

4. まとめ

X線分析の結果，試料1・試料2ともに，Feのピークが認められたので，赤色顔料の種類は酸化鉄を主成分とするベンガラであると考えられる。

試料1の粒子の形状は，いわゆるパイプ状粒子と呼ばれるものである。パイプ状粒子に関しては，従来知られているものは長さが10～20μm程のものがほとんどで，今回の試料のように，100μmを越えるような長いパイプ状粒子が密集しているのは，あまり例がない。他のパイプ状粒子に埋もれてはっきりしないが，中には200μmを越えるのではと思われるような長大なものも観察される。

このパイプ状粒子の生成過程は明らかでないが，永嶋正春[1]は小谷遺跡[2]の赤色顔料を分析した中で，パイプ状粒子について三次元的な網状構造が観察されている。しかし今回の試料には，かなり長いパイプ状粒子の中にも，三次元的に枝分かれをしているような部分は確認できない。長いパイプ状

粒子が細かく折れて，他の短いパイプ状粒子になっている感を受ける。今後より詳しい観察と分析を継続し，まだ解明されていないパイプ状粒子の生成過程を考える一助にできればと考える。※

試料2は曽畑式土器に伴う磨石であるが，筆者の分析した範囲では，曽畑式時の時期の赤色顔料としては初出のものである。しかし土器に付着したものが1点も発見されていないなど，疑問点が残されている。

南九州本土においては，縄文時代早期からベンガラによる赤色塗彩土器が出土しており，試料1のような後期の台付皿形土器には，赤彩は一般によく見られるものである。よって今回の出土資料も型式的には類例は多い。しかし，種子島・屋久島を中心とする大隅諸島では，各時代を通して，これまでに赤色顔料の使用例は1例しか確認していない。それは未報告のものであるが，平成4年3月に行われた同じ一湊松山遺跡の別地点の調査で，縄文時代後期の赤色塗彩された鐘ケ崎式土器が出土している。この赤色顔料は分析の結果，ベンガラであったが，パイプ状粒子ではなかった（筆者分析）。大隅諸島より南の奄美・沖縄諸島でも，縄文時代の土器に対する赤色顔料の使用例はほとんど知られておらず，沖縄では弥生時代の本土からの移入土器によって，赤色塗彩土器が見られるようになるとのことである[3]。なぜ赤色塗彩土器が見られないのか。流通の問題や文化的な背景など今後の課題であるが，今回の赤色塗彩土器は，南西諸島の赤色顔料の実態を知る上でも，貴重な資料となるものである。

※校正中に，このパイプ状粒子について「鉄バクテリアの生産物」であることが判明した。

註）

1）国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授

2）『小谷遺跡発掘調査報告書』千葉県袖ケ浦市　君津郡市文化財センター　平成4年3月

3）琉球大学池田榮史先生御教示

図版4　赤色顔料・試料1のSEM像

第3節　一湊松山遺跡^{14}C年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試　料

鹿児島県熊毛郡上屋久町一湊に所在する一湊松山遺跡の発掘調査では，縄文時代前期～後期の遺構・遺物が検出された。そのうち，縄文時代前期（曽畑式期）の遺構や遺物包含層より出土した炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行い，それぞれの年代を確認した。

2. 方　法

測定は学習院放射性炭素年代測定室に依頼した。半減期はLIBBYの半減期5,570を使用した。

3. 結　果

測定結果は表1に示す。

表1　放射性炭素年代測定結果

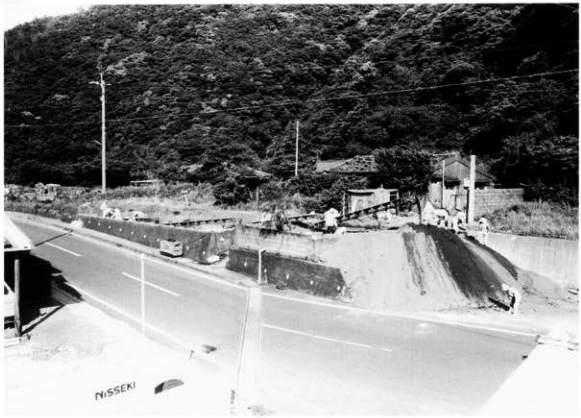
試料名	試料の質	年代	Code №	
№1　2号炉跡	炭化材	5620±110(3670B.C.)	Gak-18207	(17層1号集石)
№2　5号集石	炭化材	5420±110(3470B.C.)	Gak-18208	(8層3号集石)
№3　2号土坑	炭化材	5150±110(3200B.C.)	Gak-18209	(5層1号配石)
№4　17層	炭化材	5410±120(3460B.C.)	Gak-18210	

今回得られた測定結果は，いずれもこれまで得られた九州地方の縄文時代前期の年代測定値（キーリー・武藤1982）に調和している。同著によれば，前期でも曽畑式期の年代はおよそ5,700～5,000Y.B.P.であり，今回測定試料とした4点はいずれもこの年代幅に収まっている。

引用文献

キーリーC.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代『縄文文化の研究1，縄文人とその環境』P.246-278雄山閣

図版1



一湊松山遺跡近景

一湊松山遺跡の層位

図版２

作業状況（平成６年度）

C地点舗装剝ぎ取り

B地点矢板準備状況

図版３

矢板打ち込み状況

作業状況（矢板内）

B地点近景

B地点　ベルコン・排土状況

C地点　ベルコン・排土状況

GS前調査状況（A地点）

図版5

B地点土層

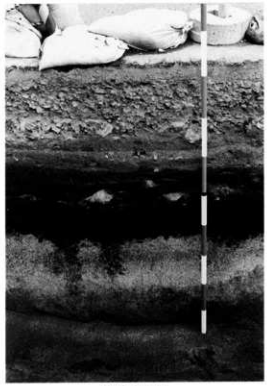
GS前完掘状況

GS前土層

C地点遺物出土状況

出土状況（512）

土製品　出土状況（758）



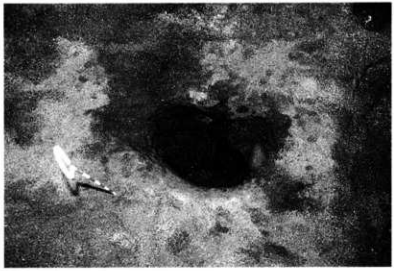
C地点土層

図版7

C地点住居跡検出状況

C地点1号住居跡

C地点住居跡石組炉
中央が一須式土器712



C地点住居跡横Pit

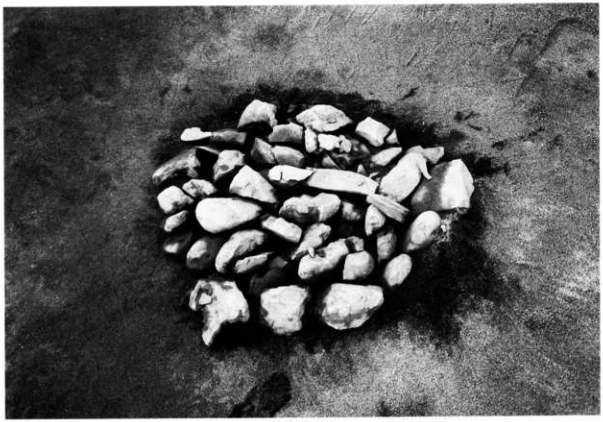
B地点2号集石

図版9

3層5号集石

3層下6号集石

5層1号配石



8層3号集石

石集積状況

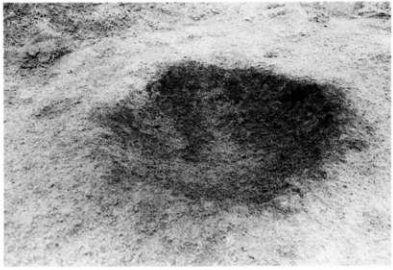
図版11

8層3号集石底石

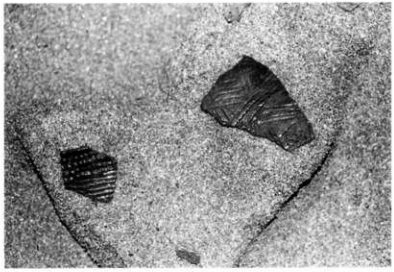
8層集石完掘状況

17層1号集石

17層1号集石堆積状況



17層1号集石完掘状況



17層出土状況（8）

図版13

1・129

16

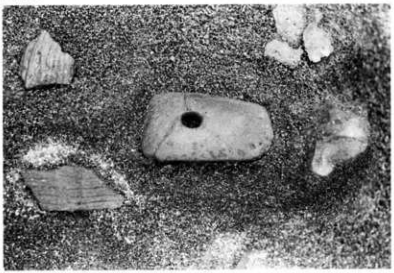
16

20

34

165

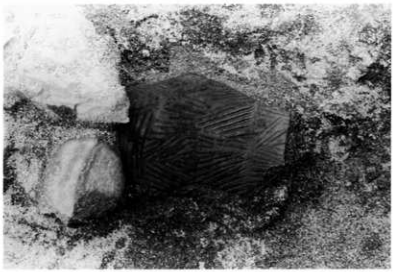
図版15



756

151

123・144



195

243

247

図版17

8層出土状況

223

179

249

263

330

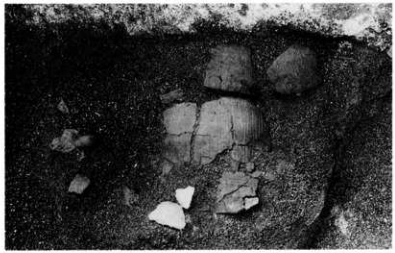
図版19

327

371

418

644



563

617

250, 225, 247

8層出土土器（曽畑式土器）

1

223

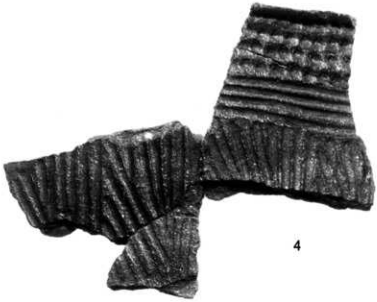
248

510

図版23

2

3


4

5

6

7

8

10

11

12

13

14

15

図版25

16

20

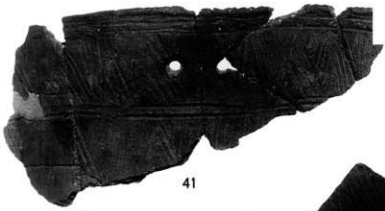
22

34

27

42

44


41

78

47

73

88

87

図版27

34

105

102

195

106

196

232

242

243

251

249

263

264

図版29

313

372

403

418

512

526

524

563

583

569

617

図版31

119～131

132～147

148～150, 152～161

162～169

170～177·208～213

214～222·333～336

337～346

347·348, 350～357

図版33

358～370

376～379·451～455

456～466

467～479

480～489

490～505

506～509·635～641

642～654

図版35

655～668

669～673·727～733

734～747

748～758

押引き

刺突

刺突・沈線

ナデ

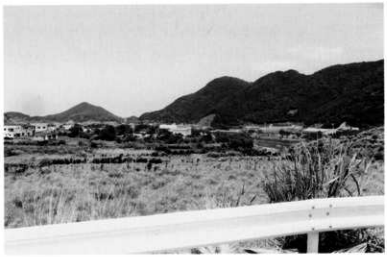
曽畑式土器施文・調整

図版37

工具ナデ（ケズリ）

条痕ナデ消し

条痕



調査地遠景

発掘調査参加者

あとがき

平成6年は，屋久島の雨が多いなかで，蒸し暑いなかでの発掘作業でした。平成7年は秋の調査であったが，やはり雨が多く，そのたびに「布引の滝」の水量がふえて絶景であった。たまのヤクザルたちの訪問も楽しかった。しかし発掘作業はむし暑く大変でした。作業員の皆様に感謝もうしあげます。多量に出土する遺物や遺構の写真や実測のほかに，生活道路であるために，それに関わる排土処理や安全対策等の調整事項も多く，忙しさの中で調査を楽しめる余裕はありませんでした。そうした中で作業員の皆様には，曽畑式土器の文様の美しさからか，興味をもたれて，現場や遺物の水洗時によく語り合ったことが思い出されます。

上屋久町教育委員会社会教育課の皆様に調査の開始から終了までお世話していただいた。排土処理や安全対策等では，屋久島事務所土木課道路係の方々や啓南建設さんなど工事関係者の多大な御協力をいただいた。矢板打ち込みでは近隣の方々に多大な御迷惑をお掛けした。

遺物量が膨大で，整理作業に時間を要しながら，調査員が多忙でなかなか思うように整理時間がとれず，入稿はしたものの，その後の追加原稿や図面がなかなか入れられず関係者に御心配をおかけした。いずれにしてもいろいろな人々のおかげで報告書が刊行できた。ありがたいことであった。拙速に仕上げたために，図面等に多くの不備があることをおわびしたい。

森浩一先生の発見，盛園尚孝先生の発掘調査，県教育委員会による一湊川側の崖面調査，この調査以前に町教育委員会の実施した個人住宅に伴う発掘調査でも大きな成果があがっている。これらの資料の活用もいそがれる。こうした調査でうかがい知る遺跡は，砂丘全体にひろがる縄文時代前期から晩期の複合遺跡であり，良好に遺物・遺構が保存されている。屋久島の誇る一級の遺跡として永く受け継がれ，将来有効に保存・活用されることを切に願うものである。(D)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書〈19〉
一湊松山遺跡

発行日　1996年3月31日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
印　刷　協業組合 ドウ・アート
〒892-0835 鹿児島市城南町2番25号